

戦姫絶唱シンフォギア
転生をしたらアダム
になっていた＼(^o^)/
オワタ

機械天使

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

事故で死んでしまった男、彼が目を覚ました姿を見て驚いてしまう。彼はアダム・ヴァイスハウプトに憑依転生をしてしまった。

このままでは死亡をしようと考えた彼は奮闘をすることにした。
これはアダムに憑依転生をした男性の物語。

目次

僕の名前はアダム。転生者だよ	1
アダムと少女の出会い。	7
サンジェルマン錬金術を学ぶ。	21
アダムたちと詐欺師との出会い。	29
アダムとイザークと少女	44
やつと原作まで来たぜ。	54
キャラ紹介	62
爆発をする研究所	70
アダムたち遺跡探索へ	82
解析されたもの	88
移動基地完成 日本へGO!!	94
現れたノイズ	99
2課との会合	105
フィーネの計画	112
クリスを探せ。	122
アダムの休み	132
覚醒の時	145
アダム再び月に	158
襲い掛かるネフシュタンの鎧を着た人	164
遺跡再び	171
デュランダル護衛	174
アダムは(☒ω☒)スヤア	183
響正体を明かす	189

アダムたちこっそりと終わらせることに した	195	目を覚ました女性	276
世界の歌姫	203	そういえば名前を聞いていなかったの 巻。	287
アダム対F I S装者	212	アクルスの襲来	291
黒いノイズ。	222	次元・・・え？	296
ギャラルホルンからやってきた装者た ち。	233	ワープをするアダムたち。	303
アダムの決断。	237	迫ってきた敵。	310
決戦。	243	レグリオス軍団の謎	317
あんたを止めることができるのはこの僕	252	レグリオス基地を探せ。	326
だ!!	253	レグリオス基地に突撃。	331
アダムの退屈な一日。	263	アダム対レグリオス	337
暴れる謎のロボット	269	襲撃をする王国。	348
		アダムとレグリオス	355

次元戦艦完成

—

366

復活の闇

—

372

会合

—

379

ネフィリムとゴ・ガメゴ・レ

—

388

僕の名前はアダム。転生者だよ

???
side

「……………え?」

目を覚ました僕は声が三木眞一郎ボイスに驚いていた。その理由が鏡を見てすぐにわかってしまった。

「アダム・ヴァイスハウプト……………」

そう僕はアダムに憑依転生をしてしまったみたいだ。どうしてこうなった? 神さまが転生をしてやるといわれてこのシンフォギア世界へと転生をした。特典は錬金術などが使える体って言ったからかな? それで選ばれたのがアダムって……………まずいまずいこのままだとシンフォギアAXZで殺されるじゃねーか!!

「冗談じゃない。この世界で二度も死んでたまるか。とりあえず僕が今できることはここから脱走することだ。おそらく僕はこのままいけば廃棄処分を受けてしまう。ならその前にここを出ればいいさ。よし出ようそうしよう。」

とりあえずまずはティキを作ることしよう。彼女を作ったのはアダムだからね。えっとまずはどうしようかな。パーツなどはあったからね。まずは戦闘力などを考える

とやはり武器などは装備させておくべきだね。

「彼女の拳などにエネルギー波が出せる装置などを作っておくか。ついでに手が武器に変われるようにつと。色々改造をしておくでしょう。」

それから数時間の時間でテイキが完成をした。さすがアダムの体だ。元々天才的な頭脳があつたから簡単に作る事ができた。

「とりあえず起動つと。」

僕はスイッチを押すと彼女の目が光りだして起き上がる。

「あなたは？」

「始めまして僕の名前はアダム。君のマスターと言っておくよ。」

「マスター？」

「そう君の名前はテイキだ。」

「テイキ認証しました。」

彼女は立ちあがり僕たちは脱出をするために移動の開始をする。創造主を送りだしてきた敵が僕たちに襲い掛かる。

「であ!!」

頭部のシルクハットを投げつけて創造主を送りだした兵器を破壊する。テイキは両手の装甲を展開してガトリングを放ち撃破する。戦闘力はすごいなと思いつつ僕たち

は脱出をした。

さて脱出をしたのはいいがここは地球なのか？てか物語が始まるまでずっとごく暇な気がするな。

そして見えるのは青き地球……つまり僕が作られた場所は月ということになる。あーちなみにシンフォギアXVまで見ている。

とりあえず地球に避難をすることにした僕たちは転移石を割って適当な場所へと降りたつた。

「まず必要なことは僕の方がどれだけ使えるかだね。まずは火だ。」

手に集中をすることで火が発生をした。それから水や氷、風や雷に石などが発生をしたので僕はかなり力の錬金術を使えるみたいと判明をした。さらには治療能力なども錬金術で使えるのも傷ついていた動物を治して判明をした。

まずは僕たちの家が必要だね。錬金術を応用をした方法で僕たちが過ごせる拠点が完成をした。

「すごいですねマスター。」

「ああ待てよ……錬金術ならあれが出来るじゃないかな？」

そう僕がもう一つ好きなものがあつた。それは仮面ライダーオーズに出てきたグリードたちだ。彼らのデザインなどが好きでメダルなどを集めていたのを思いだした

よ。

とりあえず早速メダルのデザインなどはタカ、クジヤク、コンドル、クワガタ、カマキリ、バツタ、ライオン、トラ、チーター、サイ、ゴリラ、ゾウ、シヤチ、ウナギ、タコのコアメダルを作りだしてから五体分の欲望エネルギーを使つて意識を生み出していく。

セルメダルも同じように生成をして作つていき色々とやつてから10日間で完成をした。といつてもどうせ始まるまで時間があるからいいんだけどね？

9枚作つておいて彼らの体を生成をするために一応コブラ、カメ、ワニのメダルにプテラ、トリケラ、テイラノのメダルも作つておいた。これらは一応念のために持つておくことにした。

ついでに僕の戦闘力不足を解消させるためにオーズドライバーも作つておいた。まあ一応僕つて化け物の姿が本来の姿だから力などを使うわけにはいかないからね。そのためにオーズドライバーなどを作っている。

メダルは実は10枚作っているが後の一枚は変身用に残しているわけ。さーて早速彼らの体を生成をしてグリードの誕生させるとしよう。

テイキは僕の傍で彼らの誕生を見守っている。欲望などが動いていきセルメダルが彼らの体を構成をしていき五体の完全体のグリードが完成をした。

「……ここは？」

「僕たちは誰だい？」

「目を覚ましたみたいだね。」

「誰だ!!」

アंक達^が僕の方を見て構えているが、戦うつもりはないので立ちあがる。

「僕の名前はアダム、君達を作り上げた人物さ。」

「じゃああなたが私たちを？」

「そういうことになるね。さて君達に名前を与えないといけないね。まずは赤い君はアंकだ。」

「アंक……」

「緑の君がウヴァ。」

「ウヴァ……」

「黄色い君がカザリ。」

「カザリね。」

「そして灰色の君がガメル。」

「俺の名前ガメル!!」

「そして水色の君はメズールだ。」

「メズールいい名前じゃない。」

グリードの名前をつけて僕は安心をする。まさか本物じゃないけど彼らと話をしたので僕的には満足だ。

さてとりあえずここがどの時代か調べないといけないね。錬金術を使つてとりあえずまですることは一つ……

「ご飯を食べようか。」

「……はあ……」

こうして僕は憑依転生をしてアダム・ヴァイスハウプトになり替わった。別に僕は創造主に復讐をすることは考えていない。

生み出してくれたことには感謝をしているからね。ならこの世界をどう変えていこうか考えるだけだよ。

アダムと少女の出会い。

アダム side

グリードたちが誕生をして数週間が立ち、彼らも人間態を得ることができたので街へと出ていた。

「これが人間が作った街か……」

「そうだね。ここまで作るのにどれくらいかかったことか……ね。」

「マスターなら錬金術を使えばあっという間にできますけどね？」

テイキは素晴らしいながら笑っているが、やはり容姿などを幼く作ったのではなく大人のような姿をしているから性格が違うような気がする。

彼女はオートスコアラたちのようにご飯を食べてエネルギーをとっている。キャロルが作ったようなものでは確かにエネルギーが必要いらないけど思い出を吸収をしないといけないのが欠点だからね。

それにテイキは人間のようにその……作ってしまった結果できるんだよね……子どもが。僕が見ていたリリカルなのはに出てきた戦闘機人みたいな感じにテイキを作ったからだ。

容姿はギンガ・ナカジマ、性格は……誰だろうか？まあそれはいいか。僕たちは街を歩いていると一人の男性の足にしがみ付いている女の子がいた。

「お願いです!!お母様を助けてください!!」

「うるさい奴隷の娘が……」

「きゃ!!」

おそらく父親である人物に助けを求めているが奴隷という単語が聞こえたな。彼女は奴隷の人から生まれた人になる。

「アダム俺あいつ許せない。」

「駄目だガメル。」

「どうして止める。あいつ悪いガメルブツ飛ばしてやる。」

「馬鹿考えろ。こんなところであの姿をさらすつもりかよ。」

「そうしたら僕たちここにこれなくなるよ?」

「うう……ガメルそれは嫌だ。」

「すまないガメル、だが君の気持ちは私も同じだからね。」

彼女の父親だつて言うのに助けようとしないうちに僕は怒りを感じていた。奴が去つたのを見て僕は女の子に声をかける。

アダム side 終了

???
side

「ううう……」

お父様は見捨てた。母様と私を奴隷である母を助ける気がないというのか……なら私はどうして生まれてきたの？母様に愛されてるのにどうしてお父様は……このままじゃお母様が死んでしまう。どうしたら……

「どうしたんだいお嬢さん。」

「え？」

私は振り返るとシルクハットでいいのかなそれをかぶった男の人と青い髪をした女の人が二人に、金髪の髪をした男性が二人。黒い髪をした人が二人がわたしに声をかけてきた。

「すまない。君のことを少し見ていたんだ。困っている様子だったので見過ごせなくてね……力を貸すことができるかもしれないよ。」

もうお父様は信用できない。なら私は……

「お願いです!!お母様を助けてください!!ずっと苦しんでいるんです!!」

「苦しんでいるだって、それは困った。とりあえず君の家に案内をしてくれないか？」

「こつちです!!」

私はその人たちが私が住んでいる家に連れていく。母様が助かるなら私の命だつて

捧げてあげる!!

??? side 終了

アダムたちは少女に連れられて彼女が住んでいる家に連れてこられた。だがその家はボロボロの状態でベットに眠っている女性の姿をみてアダムはさらに目を見開いてしまう。

(なんてことだ、奴隷だけでこんな生活を……)

「サン……その人たちは？」

「お母様を治してくれる方々です!!」

「始めまして、まずはお手を出してくれませんか？」

アダムはだされた右手を持ち彼女の中を透視する。彼は透視をやめると錬金術を使う決意をする。

「今から君のお母さんを治してあげるさ。まあ見ていなさい。」

彼は母親の胸元らへんに手を出すとそこから光が発生をして彼女の体の中にある病原体を消滅させるための錬金術を発動させた。アंक達はその様子を見ている。

数分後アダムの手から発生させていた光が消えると彼は立ちあがり彼女に振り返る。

「お母様は……」

「もう大丈夫。今は眠っているだけだから後は暖かいごはんなどを食べさせればいい。」

「ありがとうございます!!」

「さてメズールとティキ、悪いけど君達は食材を買ってきてほしい。」

「わかりました。」

「任せなさい。」

二人が出ていったのを確認をしてアダムは彼女達の様子を見てみるとカザリが声をかけてきた。

「アダム、君の様子など今夜父親と呼んでいた人物をどうする気だい?」

「ああもちろん倒すだけだ。お金と服を奪いにね……」

「なら僕たちも参加させてもらえないかい?あいつのしていたのを見ていると怒りができてね。」

「ああそのとおりだ。」

「俺、やる!!あいつ許せない!!」

「下らん、だがあいつを倒すって言うなら協力をしてやる。」

「ありがとう君たち。さてお嬢ちゃんはどうして服を脱ごうとしているのかなやめなさい。」

アダムは服を脱ごうとしている女の子を止めた。

「え?御奉公をするって聞いておりますが……」

「いや僕は助けたいとおもったからね。君の母親を思う心が僕を動かした。そういうえば名前を聞いていなかったね僕はアダム。アダム・ヴァイスハウプトって言うんだ。」

「サンジェルマン……お母様からはサンと呼ばれています。」

「サンジェルマン……」

アダムは驚いた。ここで原作で登場をしたキャラクターと出会うことができるとは、前世の記憶を思いだしていた。サンジェルマンが奴隷の子どもとして生まれて幼いころに母親を亡くしたことを……

(ということは今僕がしたことって原作ブレイクつてやつ?)

彼は苦笑いをしながら話しているとメズール達が帰ってきた。

「ただいま。」

「食材などを購入しました。」

「ご苦労さま、さてサンちゃんこれから僕たちはご飯を作るが一緒に作るかい?」

「ごほん?」

「ああ皆で食べるととても暖かいんだ。さて早速作るとしようか。」

「作る!!」

アダムは錬金術で皿やフォークやナイフ、スプーンなどを創成をした。サンジェルマンはアダムが使ったのに目を光らせていた。

「アダムおじちゃん!!今のなに!!」

「今のかい?これは錬金術といってね。今だしたのは全部錬金術で作ったものなんだ。」

「すごい!!」

「さーて皆できたわよー!!」

メズールの声に全員がアダムが作った机やいすに座ると声が聞こえてきた。

「うーん。」

「お母様!!」

サンジェルマンは母のところへ行きアダムもついていく。彼女は起き上がり自分の体を見ていた。

「嘘、先ほどまで苦しかったものがなくなっている。どうして?」

「それはアダムおじちゃんが治してくれたんだよ!!」

「まあ、奴隷である私を治してくれたのですか?ありがとうございます。」

「気にしないでくれ、僕は奴隷だろうが困っている人を見捨ておけなくてね……. それにあなたが助かったのはサンちゃんのおかげですよ。彼女の母を助けたいという思いが僕に届いたつとだけ言っておきますよ。」

アダムはそう笑いご飯ができていますよといい一緒に机がある場所へ連れていく。

「まあ食事やいすなども……. 申し訳ありません……. お客様にそこまでし

てもらうなんて……」

「いや気にしないでくれ、俺達はやりたかったからやっただけです。」

「あなたは先ほどまで病人ですからきにしないでください。」

ウヴァとカザリがいい、全員が首を縦に振り座る。

「では。手を合わせて。」

サンジェルマンと母親は一体何をしているのかなと見ている。アダムは説明をしてサンジェルマンとお母さんも一緒に手を合わせる。

「いただきます。」

「……いただきます。」

アダムたちはご飯を食べる。サンジェルマンたちも初めてフォークなどを使った感じなのでアダムは丁寧に教える。

彼女はアダムの顔を見て顔を赤くしているのをティキたちは見逃していなかった。

(これはマスターは気づくでしょうかね?)

(さあどうかしら?)

メズール達はニヤニヤしてアダムとサンジェルマンの様子を見ている。彼女達はアダムが作った錬金術で作ったお風呂に入っていた。

「いい湯!!」

「どうかな？サンちゃん。」

「すごい錬金術って!!」

彼女はアダムが作ったお風呂に目を光らせていた、アダムはなんでか一緒に入りましょうといわれたので一緒にお風呂に入ってから体を洗ったりしてサンジェルマンたちが眠ったのを確認をした。

「テイキ、サンちゃんたちは？」

「はいぐっすりと眠っています。」

「でどうするんだ？」

「ああもちろん……」

彼は大剣を出していた。その剣はウルトラマンオーブが使っている武器オーブカリアーだ。

彼は錬金術の火、氷や水、風、雷と地面の力を大剣に錬金術で作リオーブカリアーが完成をしたのがこの武器だ。

「さて行くでしょうか？貴族でダラダラしている奴らを懲らしめるためにね。」

アダムはハットをかぶりアंक達もそれについていく。

アダム side

皆が寝静まった夜、僕たちはサンちゃんの父親がいると思われる屋敷に到着をした。

実はあの後彼に発信機みたいなのをつけていたので場所はすぐにわかった。

こうして寝静まった夜を狙ったのも護衛兵たちがいるのを考えているからだ。

「さて始めようか。」

僕の言葉にウヴァたちは元の姿に戻りアंकが右手から炎の火球を放ち扉を破壊して突撃をする。

「何だお前たちは!!」

「遅いよ?」

ガザリが高速で移動をしてその爪で相手を切り裂いた。メズールは液体状になり相手の首を触手で絞め殺す。

「くらうがいい!!」

ウヴァは右手の鎌で切っけいきガメルは剛腕で相手を二人つかんで壁にめり込ませて殺害した。

「この化け物が!!」

「遅いです。」

ティキは右手を剣に変えて首を切断させて切断された場所から血が噴水のようにあふれてくる。

「ひい!!なんだよこいつら!!」

「勝てるわけがないよ!!」

逃げだそうとしている人物にアंकが右手から火球を出してそれらが燃えていくのをアダムは見ていた。

「愚かだね……勝てそうにないのに挑むなんてね。さて僕も戦うとしようか。」
彼は頭部にかぶっているシルクハットを投げると迫ってきた人物たちに命中止させて彼は振り返り帰ってきたシルクハットをかぶる。

「お前たちは終わっているよ。3, 2, 1」

ぱちんと指を鳴らすと首が次々に落ちていき亡くなった胴体はそのまま倒れていく。アダムはそれを見ながら先に進むことにした。

「さて進むとしよう元凶がこの先に待っているからね。」

彼はオーブカリバーを持ち大きな扉を切り裂いた。

「何だお前たちは!!」

「いやーどうも奴隷を好き放題にしている貴族を倒しに来たんですよ。悪いけど今の僕は機嫌が悪いんでね……」

僕は右手を上空に構える。大きな火球を作りだす。カザリとテイキには彼らの奴隷たちを逃がすようにとお金を確保しておくように指示をしている。

「さて貴様何が目的だ!!お金か女か!!どれも好きに持っていくといいぞ!!」

「ツチ」

僕は舌打ちをしてしまう。自分の命がなくなると命乞いをする貴族の姿を見て許せなくなつたから殺すことにした。

「僕が一番嫌いなのを教えてやるよ。それは……自分よりも他人を大事にしないような人間は大嫌いなんだよ!!消えてなくなれええええええええええええ!!」

大きな火球を作っていたのを投げつけて僕はその貴族を焼き尽くす姿を見る。

「熱い!!熱い!!いいいいいい!!ぎゃああああああああああああああああああああああああああああ!!」

燃えてなくなつた相手を見て僕たちは屋敷から脱出をする。ガザリたちも人間態になり脱出させたみたいだ。

さてこれでこの街に来ることはないだろうね。サンちゃんはここで幸せになるとは思えないけど僕とかかわることはないだろうね。彼女の家のまえにお金などを置いていき僕たちは自分たちの屋敷に戻ろうとした。

「さて行くと「待つて!!おじさん!!」ん?」

僕たちは屋敷に戻ろうとしたときサンちゃんが走ってきた。

「サンちゃん?」

振り返りサンちゃんが来たので膝をついた。サンちゃんは全速力で走ってきたのか

疲れていたがすぐに僕の顔を見た。

「お願い!!私を連れていって!!」

「え?」

「私はアダムおじちゃんがいなかったらお母様は死んでいた。だから……」

「サンちゃん、僕たちについていくってことはお母さんに会えなくなることになるんだよ?それでもいいのかい?」

そう彼女が僕たちについていくってことは母親のところには帰れなくなるということだ。それは彼女はわかっているのか……

「母様とはお話をしました!!母は許可をしてくれました。私おじちゃんの力になりたい!!お願いします。連れていってください!!」

「……………」

彼女の真剣なまなざしを見て僕は考え直してテイキたちを見る。彼女達はあなたに任せるという感じだったので僕は答えを出す。

「わかったよサンちゃん。今日から僕たちは家族だいいね?」

「はい!!」

サンちゃんは笑顔で僕の手を握ってきた。本編だと仲が悪いけど僕はそんなことさせないさ。

転移石を使い僕たちは屋敷の方へ帰ってきた。僕は扉の鍵でドアを開けた。

「お、お邪魔します。」

「サンジェルマン、お邪魔しますじゃない。」

「え？」

「「「おかえり。」」」

「ただいま!!」

こうして僕たちの家に新しい住人が加わった。

サンジエルマン錬金術を学ぶ。

アダム side

サンちゃんがこの家に来てから数週間が立った。この家に来た次の日彼女は僕に錬金術を教えてほしいといってきた。最初は困ったけど彼女の真剣なまなざしに負けて教えることにしたが彼女は天才かもしれない。

本編でも錬金術は使っていたから覚えるのが得意なんだなと思いつつも四つの属性に慣れることから始めさせてみたが……

「おじちゃんできたよおおおおお!!」

「マスターすごいですね。」

「ああ僕も驚いているよ。」

現在サンちゃんは右手に火球をだして的確に当てる練習をしているが火球を見事にコントロールができてるので驚くばかりだ。

グリードたちも彼女の成長に驚いている。

「なあガザリ、確かサンジエルマンってここにきて数週間だろ？」

「確かね。けどアダムから学んだとはいえあそこまで錬金術をうまく活用できるなんて

思ってもいないよ……」

「すごいサンジェルマン天才。」

「ええ本当に天才ね。」

「だな。それよりもアダム!!アイスクリームよこせ!!」

「アイスをかい?」

氷の錬金術で作ってから味付けなどをして完成をしたアイスクリームをアंकは気に入ったのかこうしてアイスクリームを請求するようになった。

まあ貯蔵庫に何十本か保存しているからまた作ればいいかな?でもサンちゃんはどうしてそこまで錬金術を学ぼうとしているのかな?

それが不思議なんだよね。

アダムside終了

サンジェルマンside

「ふう……」

特訓を終えた私はアダムおじちゃんが用意をしてくれた部屋に戻ってから本を読んでいた。これに書かれているのは肉体を永久的な状態にするものが書いてある。

おじちゃんはおそらく長い間ずっとあの姿を保っている。おそらく私はよばよばなおばあさんになってもあの姿だ。

だから私はこの本を読み今の体じゃなくて大きくなった体で固定をしておじさんと
うふふをするんだ。

「おじさんといつでも一緒うふふふふ。」

だからおじさんに錬金術を学んでいるんだ!!私のお母様を救ってくれたアダムおじ
ちゃん。アダムおじちゃんを守るためなら私は人だつて殺せる。

「よこしよ。」

私が出したのは錬金術で作った武器だ。まだおじさんにも見せていない銃剣つてや
つかな? 弾丸なども錬金術で作つて炎の弾、氷の弾、電気の弾、風の弾などを作つてい
る。

「でもこれを使うには今の体じゃなーはやく大きくなりたーい!!」

そしておじさんに似合う女に私はなる!!

サンジェルマン side 終了

サンジェルマンがそんなことをしている時アダムはオーズドライバーを装着をして
三枚のメダルをセットをしてオーズスキヤナーを通していた。

「変身。」

【タカ! トラー! バッター! タ・ト・バタトバ! タ・ト・バ!】

オーズタトバコンボに変身をしてメダジャリバーの変わりにオーブカリバーを手

振るっていた。この間の戦いでは錬金術で相手を燃やし尽くしたのでオーズに変身をしていないなと思いついた。

「悪く無いね。」

彼はオーズの出力などを調整をしながら変身を解除。メズールとガメルがいた。

「あらアダム。」

「アダムだー！ねえおかし頂戴。」

「はいはい。ほら飴ちゃんだ。」

「わーい（*、▽、*）ガメル嬉しい!!俺アダム好きだ!!」

「ありがとうガメル。メズールも感謝をするよ料理などを作ってくれて。」

「気にしないで当然のことをしているから。」

三人で話しをしているとリビングではウヴァとガザリとアंकがランプをしている。ちなみにこれはアダムが紙を生成してから作り上げたランプである。

「はい上がり。」

「な!!」

「ほらアंक次はお前だぞ。」

「ち!!ウヴァのくせに調子乗りやがって……」

どうやらババ抜きをしておりガザリが上がり、現在はウヴァ対アंकの戦いをしてい

る。

アंकはウヴァの持っている二枚を見ていた。どちらかがジョーカーなので彼はあたりを引きたいのだ。

そして運命が動く。

「こつちだ!!」

アंकの運命はいかに。彼はそのままカードをみてニヤリと笑いテーブルにカードを置く。

「俺の勝ちだウヴァ。」

「があああああああああああああああああああああ!!」

結果はアंकの勝ちでウヴァがビリで終了をしたみたいだ。アダムも彼らを見て楽しそうに良かったと思いい見ているとサンジェルマンが走ってきた。

「おじさーんーん。」

「やあサンちゃんそろそろお昼ご飯にしようか。ティキが今作っているみたいだ。いい匂いがしてきたぞ?」

全員が手を洗ったりしてから椅子に座っているとティキがご飯を持ってきた。

「お待たせしました。」

「待っていたよティキ、さあ皆がそろったことで……手を合わせよう。」

パンと全員が手を合わせる。

「いただきます。」

「「いただきます。」」

今回ティキが作ったのは和食のため箸が用意されていた。アダムは前世は日本人のため箸を使うのは簡単だがほかのメンバーなどは箸などは初めてのため苦労をしていた。特にサンジェルマンは一番に苦戦をしていた。

「うううえい!!えい!!」

つかもうとしてもスカツと抜けてしまい転がっているのを見てティキがサポートをすることにした。

「サンジェルマンさん、箸は……」

つと丁寧に教えているのでサンジェルマンも理解していく。

「ううっ?」

「はい、それでつかんでみてください。」

彼女は教えてくれた通りに箸を使いおかずを取り口に運ぶ。

「おいしい!!」

「喜んでくれてよかったです。」

「ありがとうティキ、いつもご飯を作ってくれて。」

「いいえマスター、これも私の使命ですから。」

ティキはお辞儀をして一緒にご飯を食べる。アダムは考えていた。ティキ一人でこの屋敷内は不利だなと……だが今の状況ではオートスコアラーを作ることではできないので断念をする。

(ティキのパーツなどもあつちで作ったからね……錬金術で作ってもそこまでは再現することはできない。そういえば……どこかにそういうのがあるような場所があればいいんだけどな。)

アダムはティキのことを考えて戦闘機人がいそうな場所はないかなーと思いながらこの時代じゃ無理か……と考える。それにサンジェルマンのこともあり彼はゆつくりと彼女が年をとっていく姿を見るしかない自分が情けないと思う。

アダム side

さて彼女を引き取ってから数十年が立った。あれ？なんでそこまで立っているかって……単純だよ。普通に生活をしていたからだよ。

彼女の体も大きくなりその……胸が大きくなっているんだよ。それでも……

「おじさん一緒に風呂はいるう!!」

「はん二」

僕はお茶を飲んでいたが吹きだしてしまう。サンちゃんはいつまでたっても甘えん

坊だなと思ってしまう。

おかしいな……僕の育て方を間違えてしまったのかな？サンちゃんは体は大きくなって成長をしたと思っただか知らないが甘えん坊になってきている気がする。気のせいだと思いたい。

「サンちゃん……さすがにそろそろまずい気が……」
「駄目？」

彼女は上目遣いをしてきた。僕もこれには勝てず。

「わかったよ一緒に入ろうか？」

「わ……い。」

彼女と一緒にお風呂に入ってしまう。お風呂に関してはサンちゃん特製のお風呂を使わせてもらっている。もちろんグリードたちも入ることがある。

ちなみにサンちゃんはアंक達が怪物だつてことは知っているみたいだ。彼らが姿を戻しても驚かないのでびっくりをしている。

だからこそ僕はまだ自分の正体を明かしていない。いずれは明かすつもりだけどまだいいかなと思いつつもサンちゃんと一緒にお風呂に入る。

アダムたちと詐欺師との出会い。

アダム side

僕はテイキと一緒にある場所に向かっていた。

「マスター本当にその人を信用をするのですか？」

「まあね。彼を仲間に加えられたら僕的には助かるかなと思ってね。」

そして彼がいるであろう場所へ到着をしてノックをする。

コンコン

『はい。』

「あなたの手紙を受け取りましたアダムです。開けてもらってもよろしいですか？」

『ああドアは空いてるから入ってくれ。』

ドアを開いて僕は中へ入る。そこには眼鏡をかけた男性が座っていた。彼はこっちに座るように指示をして僕たちは座る。

「やあすまない。こちらから呼んでおいて……」

「気にしてないさ。テイキを一目で人造人間と見抜いたあなたは研究をしてる感じですかね？」

「まあね。だがそれを作り出した君の技術は素晴らしいばかりだよ。それに錬金術か……私が今まで研究をしてきたのよりも驚くばかりだ。」

「それで何が言いたいんだい？」

「あーすまない、つい君のような人私は待つていたかもしれない。それに今の世の中で私のような人は生きずらいのでね……」

「そういうことか。なら僕たちのところへ来ないかい？まあ性別なども変わってしまうが……もちろん研究施設なども用意させてもらおうよ。」

「ほーうそれはいいかもしれない。なら今すぐに荷物などをまとめさせてもらおうよ。」

彼は大慌てで準備をして僕はサンちゃんに連絡をする。

「サンちゃんこちらアダムどうぞ。」

『おじさま、こちらサンです。実はこちらでも男の人を拾ったのですが……傷だらけでなんとか治療をしたのです。』

「ああそういうことか、サンちゃん確か君は男性の体を女性にすることが得意だよね？ならある人物を女性に変えてくれないかい？」

『わかりました。とりあえずおじさまを待つておりますので。』

「わかったよ。それじゃあ。」

僕は作り出した電話を消して彼の準備が終わるのを待つことにした。テイキも彼が

作ったであろうものを見ていた。

「すごいですね。」

「ああ僕も驚いている。錬金術で作ったりするがこうして作るのはなかったね。テイキを作つて以降は何もしてないからね。」

僕たちは話をしてしていると彼が準備を終えたのか現れた。

「待たせたね!! さあ行くとしよう!!」

「ああ・・・ではこっちに。」

僕は転移石を割り屋敷に到着をした。とりあえずまずはサンちゃんが助けたという人物と会うとしよう。

リビングに行くときアंक達がいた。どうやら彼は目を覚ましてキョロキョロしていた。

「ここは・・・」

「目を覚ましたみたいだね。ここは僕たちが住んでいる屋敷だよ。君はボロボロだったところを彼女達に助けてあげたんだよ。」

「・・・ありがとうよ。」

「いったいどうしたんだい？」

僕は彼に話しかけると彼は話し始めた。彼は貧困な家族に生まれた。家は貧乏でこ

の時代はお金持ちは偉そうにしている時代……彼らは貧困な中暮らしをしており彼は詐欺などをしておかねを奪っていたそうだ。

だがそれがばれてボコボコにされて裏路地で何とか生き延びようとしているところをサンちゃんたちが助けたことになる。

「なるほど……君はこれからどうするんだい？」

「また詐欺をして暮らすしかねえよ……俺には家族はもういないし……」
「なら僕たちと一緒に暮らすつてのはどうだい？ただし前の生活のようにはいかないかもしれないけどね。」

「……どういうことだ？」

「君の性別などを変えるつてことだよ。あの街では君が詐欺師だつてことがばれている。なら性別などを変えてここで暮らせばいい。」

「……いいのか俺は……」

「ああいいとも。」

「お願いします。」

「決定だね。サンちゃん……」

「はいおじさま、もう一人の人も同時に行きますので数時間お待ちください。」

「わかったよ。」

サンちゃんは研究科な人と詐欺師だった男を連れてこれから錬金術で色々とするらしい、なおサンちゃんは今のつまり本編と同じ姿になってからは錬金術などを使って体を完全な状態にして悠久な命を得ていたことに僕は驚いている。

「なあアダム。」

「なんだい？」

「サンジェルマンってやつぱり天才だよな？」

「それに関しては僕も同意見だよウヴァ、彼女の錬金術は今じゃ僕を超えていると言っておくよ。まあ戦闘に関してはまだまだだつて感じだけどね？それに今彼女は僕が見つけた賢者の石を使って何かを作っている感じだったしね？」

おそらく本編で使ったファウストローブのことだろうね。確かあれはサンジェルマンが作ったことは前世で見ていたので知っていた。

まあ僕はそこまで気にすることはないからいいけどね？昼ご飯となりサンジェルマンは部屋に閉じこもっている。おそらく二人も同じように悠久な命を得た完全な体になり替えているところだね。

「あの二人どんな姿になるのか楽しみ。」

「まあサンちゃんが考えているからどんな容姿になるのかは楽しみだけどね？」

「ふんくだらん。そんなことどうでもいいだろ？」

「アंक、あなたね……これから一緒に暮らしていくのにどうしてあなたはいつもそういう態度をとるのよ。」

「ああ？元から俺はこうだ。」

メズール達が喧嘩をしているのを見てやれやれと思いつつもおそろくあの二人はカリオストロとプレラーティになるんだろうなと思いつつティキが入れてくれたお茶を飲む。彼女は目を光らせると上空に恒星などが映りだす。本編でティキがしていたようにこのティキも同じことができるようにしている。

僕は見えないときは彼女を使って夜空を見ることにしている。サンちゃんもこれが好きでよく一緒に見ていたね。

それから数分後。

「お待たせしましたおじさま。」

「やあサンちゃん。どうやら終わったみたいだね？」

「ええ二人ともいいですよ？」

「失礼するわよー」

「失礼するワケダ。」

声がしたので僕たちはドアの方を見るとうん原作通りカリオストロとプレラーティになっていた。彼女達は女性の体になっていることに驚いていた。

「すごいわねー女性の体ってあーしも驚いているわ。」

「ああ錬金術でここまでできるなんて思ってもいなかっただけだ。サンジェルマンのすごいところは驚くばかりなわけだ。」

二人は驚いている中僕はサンちゃんのところに行き彼女の頭を撫でていた。

「すごいじゃないかサンちゃん、これは僕も驚くばかりだよ。」

「そんな私がこうして錬金術をこうして学べたのもおじさまやテイキさん、それにアンクさん達がいたからです。」

「僕たちは何もしていないけどね？けどありがとう。」

「そうねこれは嬉しいことよ。」

「サンジェルマンが喜んでいいる。ガメルも嬉しい!!」

「ああそうだな。」

「ふん。おいアダム!!アイスよこせ!!」

「やれやれ、君はアイスが本当に好きだね……ほら。」

「ふん。」

アンクはアイスクリームが本当に好きだなと思いつつながら原作通りにメンバーはそろって来たね。

サンちゃんはファウストロープの方はまだ完成をしていないが錬金術は使えるって

ことで僕たちはある城へとやってきた。

この城は悪名が高い国王で僕たちは彼を退治するためにやってきた。ウヴァ達も本来の姿に戻っており僕はオーズドライバーを装着をしてメダルを装填していく。

オーズスキヤナーを持ち装填する。

「変身。」

【タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ タトバ！タ・ト・バ！】

オーズに変身をして前進をしていく、国王たちの兵士が僕たちに武器を向けていた。

「あらあら私たちに武器を向けてるわねー。」

「そうだな。おじさま……。」

「心配することはない君達はここで待っているといい。テイキ彼女達の護衛頼んだよ？」

「了解しました。」

そう錬金術を使えるとはいえまだサンちゃんたちは完全に戦えるわけじゃないがっ
いて行きたいといってきたので連れてきた。

僕はバッタレグで上空へとびオーブカリバーを構えて兵士たちに攻撃をする。兵士たちはこちらに魔法をぶつけようとしたがその前に僕はカリバーのエレメントを回転させて風のエレメントを発動させる。

「タイフーンカリバー!!」

風を纏わせたオーブカリバーを振るい巨大な竜巻が兵士たちを巻き上げていく。オーブカリバーをしまい僕はウヴァのメダルに変えてオーズスキャナーを装填させる。

「クワガタ!カマキリ!バッタ!ガータガタキリバガタキリバ。」

オーズガタキリバコンボへと姿を変えて僕は叫ぶと分身たちが発生をした。8体分だ。

「「「「「今日は特別!!」」」」」

僕自身はタトバのメダルに変えてほかはコンボメダルをセットをしていく。

「クワガタ!カマキリ!バッタ!ガータガタキリバガタキリバ!」

「ライオン!トラ!チーター!ラタラターラトラター!」

「サイ!ゴリラ!ゾウ!サゴーズ サゴーズ!」

「シャチ!ウナギ!タコ!シャシャシャウタ シャシャシャウタ!」

「タカ!クジャク!コンドル!タージャードル!」

「プテラ!トリケラ!テイラノ!プットテイラーノザウルス!」

「コブラ!カメ!ワニ!ブラカーワニ!」

「タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ タトバ!タ・ト・バ!」

8人のコンボのオーズが誕生をして構える。

「なんだあれは!!」

さあ地獄のパーティーの始まりだよ？

アダムside終了

ガタキリバコンボのオーズはウヴァと共にカマキリソードを使い兵士たちを切っていく。ウヴァは雷を使うとガタキリバも頭部のクワガタヘッドから雷を発生させて兵士たちを次々に殺していく。

「せいやああああああ!!」

ラトラーターコンボはカザリと共にチーターレッグで高速で移動をしてトラクロールで切り裂いていく。兵士たちも突然として血が噴出をして倒れていく姿を見て驚いている。

「なんだ!?!どこから攻撃が!!」

「遅いよ?」

カザリの爪が兵士の体を貫いて血が噴出する。

一方で空ではアंकとタジャドルコンボのオーズが飛んでいた。兵士たちは弓を使い彼らに攻撃をするが二人は回避をしてアंकは右手からオーズは左手のタジャスピーナーのから炎を発射させて兵士たちに攻撃をする。

「ぐああああああああああああああああああ。」

「熱い!!ぎやああああああああああああああ!!」

「ふん。」

「アंक行くぞ?」

「ああ!!くらいやがれ!!」

「せいやああああああああああ!!」

二人は羽型のエネルギーを発生させて兵士たち全員が命中をして絶命する。一方でサゴーズコンボとガメルの二人は剛腕で兵士たちに攻撃をする。

「であああああああ!!」

「遅い。」

ガメルは槍をつかんでそのまま引つ張り殴り飛ばして殺害をした。オーズはドラミングをして重力を発生させて兵士たちは突然として上空に上げられてガメルは左手の二連キャノン砲を構えて追撃。

オーズはサゴーズコンボでオーズカリバーを持ち岩のエレメントを発動させる。

「ロツクカリバー。」

地面に突き刺してたくさんの岩が発生をして兵士たちに命中して絶命させていく。一方でシャウタコンボとメズールは液状化して兵士たちを窒息させていた。

「ぐ、ぐるじい。」

「た、助いで!!」

「無駄よ。私とオーズの力が合わさっているからあなたたちが今までしたことを後悔したまま死んでいくといいわ?」

シャウタコンボは向かってくる兵士たちに頭部から強力な水流を発生させて兵士たちを吹き飛ばす。さらにオーズカリバーを持ち水のエレメントを発動させる。

「アイスカリバー!!」

地面に突き刺して氷が地面を走っていき兵士たちが次々に凍らされていく、オーズは近づいて蹴りを入れると凍った兵士たちは粉々に砕けていく。

プトティラコンボとブラカワニコンボのオーズはというと。攻撃をブラカワニコンボのオーズが受け止めてプトティラのオーズは尻尾を出して兵士たちを次々に吹き飛ばしていく。

「さあ蛇の怒りを受けるがいい。」

プラカワニオーズは笛を吹くと頭部のコブラが動きだして兵士たちを次々にかみついて猛毒を注入していく。

「スキヤニングチャージ!!」

「ふん!!」

頭部のプトティラヘッドの翼が羽ばたいた冷気が兵士たちに命中をし、次々に凍らせ

て両手のトリケラガンドレクスから光の爪で貫いていきそれを上空へ上げていき尻尾のテイルデイバイダーで叩きつけて粉々にさせた。

「やったな？」

「まだ攻撃をしてくるぞ？」

「え？」

プラカワニは前を向くと兵士たちはじりじりと槍を構えていた。はあとため息を出してプトテイラのオーズに声をかける。

「どうする？」

「俺が決めるさ。」

彼は地面を殴りメダガブリューを出してセルメダルを創成をしてメダガブリューに装填させる。

プラカワニコンボのオーズはオーブカリバーを構えて炎のエレメントを発動させる。

【ゴックン！プットーティラーノヒツサーツ！】

「インフェルノカリバー!!」

二人が放った砲撃などが兵士たちに命中をして吹き飛んでいく中タトバコンボのアダムは国王がいると思われる場所に到着をしてオーブカリバーを振り下ろして扉を切り裂いた。

「貴様!!」

「やあどうも国王さま、悪いけど君が今までしたことははつきりと知っているんだよね？あんたが集めたお金で彼らのために使わずに自分の欲望のためにね。そんなことが許すのかな？許すわけないよね。だから僕が君の人生にジ・エンドを送らせてもらおうよ。」

タトバオーズは右手に火・水・風・雷のエレメントを発動させてそれを上空へと止めていつでも国王を殺せる準備をしていたがもうすでに彼は殺す気でいたので容赦ない攻撃を放った。

「ぎゃああああああああああああああああああああ!!」

こうして一つの国はメダルを使った戦士と怪物によって滅ぼされたと書かれることになるがこのことをアダムたちは知らないのであった。

彼らは街を救いし英雄と呼ばれることになるとは思ってもいなかった。彼らは城にあつたお金などを住民たちに配り黙って去ったからだ。

アダム side

やれやれ・・・ガタキリバコンボからの全コンボは僕の体に負担が大きいみたいだ。今僕はベッドの上に寝転がっていた。

今回の戦いでオーズの力は強大だつても判明をしているしオーブカリバーや鍊

金術なども使用することができるところも判明をしている。

さてどうするかな……時代のにまだまだシンフォギア原作まで時間がありまくっている。その間に作っておくとしようかな？

パヴァリア光明結社をね。長い歴史の中裏で暗躍をしていくとしよう……知っている名前が出てきたら助けていくのが僕たちの使命としていくようにね。

そして僕たちは新たな組織『パヴァリア光明結社』を作った。もちろん錬金術師たちを集めていくさ。

けど本編みたいなきことをせずに入助けをするためにね？

アダムとイザークと少女

アダム side

パヴェリア総社を作った僕はサンちゃんやカリオストロとプレラーティにアंक達を入れてさらには色んな所の錬金術師たちも加えた組織へと発展をしていた。ちなみに組織は兵器などを提供はせずに貧困な国の住民たちに服や食料なども提供をしている。それが僕の組織のやり方となる。

ちなみに定期的にいつぐらいになるのかって言うときまだ原作が始まるまでかなりかかるみたいだ。それでもこの組織ができてからだいぶ経っている。

「失礼しますアダムさま。」

「どうしたんだいカテリア。」

彼女はカテリアと呼ばれる錬金術師の一人で現在は大幹部となったサンちゃんたちに変わって僕の秘書をしてくれている。テキキも秘書の一人だ。

「はい実はある錬金術師の話聞きまして……」

「ある錬金術師？ふむ僕も少し調べてみないといけないようだな……それでカテリアその錬金術師はどこにいるのかわかっているのかい？」

「ええ一応になりますか……名前なども判明しておりますこちらです。」
彼女が渡してくれた資料を確認を僕はする。そこにいたのはイザークと書かれている錬金術師の名前だ。

そう僕は彼こそキャロルの父親で間違いないとなら急いで接触をしないといけな
いかもしれないね。彼が火刑される前に助けるだけさ。

「わかった。カテリア悪いけど留守を任せてもいいかい？」

「アダムさま？」

「本人に直接僕が会いに行くのさ、サンジェルマンたちには無理をしないように指示を
頼む。ここまで組織が大きくなったのも彼女達の協力があってこそだからね。」

僕はシルクハットをかぶり部屋を出て彼がいるであろう場所に向かおうとしたとき
アंकがいた。

「おうアダムどこに行く気だ？」

「なーにある人物をスカウトしに行こうとしている。」

「俺も行くぜ。ここにいっても退屈なだけだ。」

「いいよ。とりあえず転移石を使って移動をしようか。」

僕とアंकは転移石を使いパヴェリア結社本部から彼がいるであろう場所の近くに
転移をした。そこは自然がたくさんある場所に到着をした。

確かに錬金術を使うにはいいところだ。ん？

「アंकク何か騒がしくないかい？」

「奇遇だな俺も聞こえているぜ。」

僕たちは村があるのを見つけて隠れて様子を見ることにした。一人の男性が張りつめにされているのを見つめる。

あれはもしやイザークさんではないか？そしてその近くで泣いているのはキャロルと呼ばれる少女で間違いない。

「アंकクは怪物体になって彼らを殺さない程度に牽制をしてくれないかい？その間に僕は彼らを助ける。」

「ちい、だが帰ってからアイスをやこせ!!」

「アイスでいいならね。」

アंकクは念じると怪人態に変わっていき空を飛んで行った。さて僕も動くとしようかな？

アダム side 終了

キャロル side

「パパ!!パパああああああああああ!!」

村人たちにパパが火刑にされようとしていた。パパの力に恐れた人たちによってパ

パは張りつけにされて炎をつけられようとしていた。

「これより異端者の処刑を行う!!火を放て!!」

村長がパパに火を放とうとしたとき何かが降ってきた。赤い羽根? 私は上を見てみると赤い鳥のような人が火をつけようとしている人を蹴り飛ばした。

「化け物!?!」

「なんだあれは!!」

村人たちは突然として現れた怪物に攻撃をしているが、怪物は人を殺さない程度なのか蹴りを入れて気絶させていく中、パパに向かって走っていく男性の人がいた。

「であ!!」

頭部にかぶっていたのを投げてパパが張りつけされている木を倒した。その人は私の方を向いてこちらに来るようにと手で合図をしたので私は走ってパパがいる場所へ行く。

「しっかりつかまっていなさい。」

その人に言われてパパと私は地面に叩きつけた石から魔法陣が発生を見た。赤い怪物の人もこちらに来て一緒に転移をした。

私とパパはどこに移動をしたのかわからなかった。どこかの家みたいな場所に転移をしたみたいだけど……

「おかえりなさいませマスター。」

「テキキただいま。さて改めて大丈夫ですか？」

「ええあなたはいったい？」

「僕はアダム・ヴァイスハウプトです。これでも錬金術師をやっているものです。」

「ほほうあなたも錬金術師を……とりあえずこちらも自己紹介をします。私はイザーク・マールス・デインハイムといいます。こちらは娘の……」

「キャロル・マールス・デインハイムです。」

「はは元気そうな娘さんで。もしかして家事も彼女が？」

「ははは残念なことで私は家事などが苦手です。キャロルに任せてしまおうですよ。まあこちらは錬金術に集中できますけどね？」

。パパは苦笑いながらアダムさんとお話している中、私はテキキさんを見ていた。彼女は普通の人と違う感じがしていた。

「どうしました？」

「いやテキキさんって普通の人と何か違うなと思ひまして。」

「ふふ正解ですよ。私は自動人形と呼ばれる存在です。」

。すごいなーテキキさんはアダムさんが作ってもらったといっていた。アダムさんはパパと同じようにすごい人なんだなと思った。

「それで私を助けてくれたのですが……ほかの人たちももしかして……」
「ええ処刑されようとされていた人たちを集めたのがこの組織ですね。裏から貧困な国の人たちに食料や服を提供をしたりしてますね。それでイザークさんも研究などもここで過ごされたらどうですか？」

「……確かに素晴らしいことです。ですがキャロルは……」

「それに関しては問題ありません。あなたたちの生活はこちらから出させてもらいますよ。」

「そこまでしてもらうなんて……」

アダムさんは首を横に振り気にしないでくれといっていたのでパパはここに入ることになった。私はティキさんに案内されてパパと過ごす部屋に案内された。

「ここがイザークさんとキャロルちゃんのお部屋になります。」

「わざわざすみません。」

「いいえこれもマスターが用意してくださったお部屋なので何か不自由なことはありません。ティキお姉さんはそういつて去っていく。パパはふうと座っていた。」

「ああ正直言つてアダムさんがいなかったら今頃僕は火刑されていたかもしれないから」

「パパ大丈夫？」

「ああ正直言つてアダムさんがいなかったら今頃僕は火刑されていたかもしれないから」

ね。まあ助かったと言える奇跡だよ。」

「奇跡……」

アダムさんには本当にありがとうといわないといけないな。

キャロル side 終了

現在アダムはある場所にやってきていた。プレラーティがある場所を見つけたってことでやってきたのだ。

そこには人形と思われるものがたくさんあった。アダムはふむうと思いい人形が倒れている場所に歩いている。

「おじ……じゃなかった局長いかがしました？」

「あ、いや……これは間違いなく古代に使われていた人形だね。僕が名付けるとしたらオートスコアラーと言っておくかな。けどこれはおそらく何かの影響で機能停止をしている状態だ。プレラーティよく見つけたね。」

「なーにここは昔から調査をしていたが錬金術があつたおかげで探すことができたワケだ。」

「でもでもなんだかいっぱいあるわね。」

彼女の言う通りたくさんの人形と思われるものがあり、アダムもふむーと考えてこれらを持って帰ることにした。

「でもアダムこれを持って帰ってどうするの?」

「ああティキの姉妹でも作ろうと思っている。ティキに関してはプロトタイプの一体をサンジェルマンがいた完全な体に作り替えたんだけど……この姉妹たちも同じようにしようかなと思っっているんだ。」

「なるほどそれならエネルギーなども食料で活動ができるワケだ。」

「ああプレラーティは一体ほど解析に回したいという目をしているけどまあいいよ。」
「ありがとうなワケだ。」

転移石を使い人形を回収をした。三体はティキの姉妹を作るためにアダムが自身の部屋に運んで行き、一体はプレラーティが研究用に持つていきほかは倉庫の方にしまっておくことにした。

アダム side

さてティキの姉妹を作ることにしたが、とりあえずまずは人形という部分を排除をしておくかな?そこからティキの姉妹たちを作っていこうとするか。

外見はどうしようかな?ティキをベースに作っっていくとしようかな顔なども構成させていこう。

「……こうして作っただのはティキを初めて作っただけ以来だな……ティキも僕のために頑張ってくれている。彼女とはグリードたちよりも前からの付き合いだ。」

創成者から脱出をする時の相棒だからね。」

転生をして最初はアダムになってしまったのはショックだったけど今はこうして長年暮らしていると慣れてしまった。

憑依転生みたいなものだけとおそらく最初からアダムという人格はなかったんだ。そこに僕が入りこんで今のアダムができたことになるね。本来のアダムは錬金術もできずに全裸になってしまいうほどの高火力の黄金錬金を発動させたりする人物だけどね。サンジェルマンたちを平気で捨て駒にしたりするキャラクターだ。

けど僕は違う。彼女達は大事な仲間だ。捨て駒にするなんて言語道断。それに僕は身は創生者に復讐をするつもりはないからね……だからこそ僕はひっそりと彼女達や仲間たちと共に暮らしていきたいと思っっている。

さてまずはキャロルちゃんやイザークさん達の体も完全なものにしないとイケないな。すでにここに住んでいる錬金術を使う者たちはサンちゃんによつて完全な体になっっているが………。なんでか女性ばかりになっているんだよね。カテリアも元は男性だったが現在は女性になっている。

サンちゃんに聞いたら彼らが自ら望んだことだっけって聞いたな。いったい何があつたんだ彼らは………。まあそれでも男性のままがいいっていう人物もいたのので助かっている。

女子だらけだったら僕とイザークさんが持たない気がしたからだ。主に下半身が……さて三体のオートスコアラータちの体を女性の体にすることに成功をして今は容姿などや武器などもつけ与えている状態だ。

けど僕は色々やり過ぎたのか眠くなつてしまい眠ることにした。

「ふああああ……武器などはテイキとおんなじでいいかな？腕部などが変形させていくがそれぞれで戦闘の仕方が違うようにね……」

彼女達は起動させていないのでそのまま立っている状態のまま僕は眠りにつくことにした。(☒ ω ☒) スヤア

やつと原作まで来たぜ。

アダム side

やあ僕の名前はアダム・ヴァイスハウプトに憑依転生をした男性だ。いやー原作までかなりの時をかけてきた。

「アダム……終わったぜ？」

「ご苦労さま。サナエにアイカにレイ。」

彼女達は数百年前に改良をしたオートスコアラーの三体たちだ。緑髪のサナエにピンク髪のアイカ、そして黒い髪をしているレイの三人だ。

彼女達は起動後はすぐにテイキの指導を受けており僕の仕事の手伝いをしてもらっている。

そういえば現在キャロルちゃんもオートスコアラーを作っておりサンちゃん同様に大人の姿に変身をしている。

「これはアダムさまごきげんよう。」

「やあフアラ、キャロルちゃんはこの中かい？」

「はい。」

「じゃあ入らせてもらおうよ。」

僕はファアの許可を得て彼女の部屋に入る。彼女は椅子に座っており何かを調べているところだ。

「ふーむあーでこーで……」

「キャロルちゃん何をしているのかな？」

「うわ!! アダムおじさんいきなり人の部屋に入つてこないですよ。」

「ごめんごめん、ファアから許可を得て入ったんだけどね。これって聖遺物かい？」

「といつても欠片なんだけどね。ダウルダブラと呼ばれる聖遺物ですね。今これをファーストローブ風にしようと改良をしているんですよ。サンジェルマンたちのようにね。」

そうサンちゃんたちはすでにファーストローブを完成をしており僕も実は協力をしている。彼女達が使っているファーストローブは原作と同様でサンちゃんはひそかに作っていた銃剣、カリオストロは指輪のエネルギー弾、プレラーティはけん玉である。ずっと思っていたがなぜけん玉なんだろうかと……なら僕はコマを使おうかななーんてね(笑)

さて話を戻して僕はキャロルちゃんの部屋から出てある場所に一人で来ていた。それはある研究所だ。そこである実験が行らわれると聞いてね。それをぶつ潰す為

やってきた。

ここにいるのはシンフォギアXDで登場をしたジャンヌがいるであろう研究所だ。実は僕のところにはF I Sのナスターシャさんがやってきたことがあった。僕は一応そこに挨拶を言ったこともあるしそこでマリアちゃんたちにも出会っている。

僕は錬金術を使いぬいぐるみを作ったりしてあげたことがある。その中にいたのだよジャンヌちゃんや妹のメイちゃんやね。幼い二人がマリアたちと離れてこの研究所で実験にされようとしていると聞いてね。時間がかかってしまったが大丈夫だね。

さあ突入しようじゃないか。さあ地獄のパーティータイムだ。

アダムside終了

研究所では完全聖遺物アルゴスの目を使った実験を子どもたちによって行われている。だが誰も適合者がおらずついにジャンヌたちに迫ろうとしたとき。突然として研究所が揺れだした。

「何事だ!!」

「何かが侵入をします!!これは!!」

扉が開いて入ってきたのに驚いている。

「の、ノイズだああああああああああ!!」

現れたのはノイズだった。彼らは研究室にいる研究員たちを次々に炭化をしていき

ジャンヌとメイはお互いに抱きしめあっていた。

すると一体のノイズが近づいてきた。彼女たちは目を閉じたが……プレートを持つていた。

二人は目を開けるとプレートに文字が書いてあった。

【大丈夫？君たちを助けに来た。】

「え？」

ノイズがプレートで言葉が書いていたので二人は驚いている、ほかのノイズ達は大人の研究員たちを襲っているが実験にされようとしている子どもたちには手を出していないからだ。

ジャンヌ達のそばにいたノイズはプレートを出した。

【僕たちはアルカ・ノイズと呼ばれる存在だ。主の命令で君達を助けに来た。】

「私たちを？」

「そのとおりだよジャンヌちゃんにメイちゃん。」

彼女達は声をした方を見るとシルクハットをかぶった男性が現れた。アダム本人である。彼はオーブカリバーを構えながら研究者たちに刃を向けている。

「ご苦労だね君達。純粋な子どもたちをお前たちの実験対象として保護をして過酷な実験で多くの命を散らさせた。よってこの僕アダム・ヴァイスハウプトが断罪をくらわせ

る!!アルカ!!この子たちを脱出させる!!」

【了解。】

アルカ・ノイズはジャンヌ達を掲げるとそのまま脱出をする。なんでこのプレートを持ったアルカ・ノイズだけは人が触っても炭化をしないのかというところこのアルカ・ノイズのアルカはアダムが最初に作ったアルカ・ノイズでアルカとつけられている。

炭化能力がない代わりに人を避難させたりするのに彼の力が必要となる。アダムは彼が避難をしたのを確認をしてオーブカリバーのエレメントを回転させていた。

すでに完全聖遺物『アルゴスの目』は回収をしたので彼は遠慮なく研究所を壊すことに集中ができる。

彼はカリバーを上空に掲げてそれを振り回して剣先にエネルギーがたまつたのを確認をする。

「スプリームカリバー!!」

放たれた光線が研究所のメインコンピュータに命中をして爆発をしていきアダムは素早く移動をして研究所の外へと脱出をした。彼はオーブカリバーを肩に乗せてジャンヌたちを見ていた。

「改めて申し訳ないねジャンヌちゃんとメイちゃん。」

「アダムおじさん……」

「お久しぶりです。」

「ああ君達がF I Sにいた以来だね。すまないもう少し早く君達を見つけられればほかの子たちを助けることができた。」

「……………」

二人は爆発をする研究所を見ながらアダムはアルカ・ノイズたちを収納をしてアルカだけ出している。

【マスターどうしますか？】

「とりあえず戻ろう。彼女たちを新たな仲間とはいかないけどここに見捨てるわけにはいかないからね。」

【わかりました。】

アダムは転移石を使ってパヴェリア総社へと戻った。

「おじ……………じゃなかった局長どこに行かれていたのですか!!」

「あーすまないサンジェルマン、ちよつとだけね。アルカは完全聖遺物をプレラーティのところへもって行ってあげてくれ。」

【わかりました。】

「テキキ!!テキキ!!」

「お呼びですか？」

「ああ呼んだよ。悪いけどこの子たちの服などを用意してあげてくれ。」

「わかりました。ではお二人ともこちらに。」

テイキは二人と連れていきサンジェルマンとアダムだけになり、彼は話し始める。

「ある研究所で人体実験が行われていた。」

「人体実験!?!」

「ああ……しかも完全聖遺物をアルゴスの目の一体化の実験が行われていたんだ。」

「そんなことをすれば!!」

「ああ僕は見ただよ。実験によつて死んでいた子どもたちの姿をね……彼女達は唯一実験が行われる前に救出することができた。……それにしても許せないね……」

「おじさま……」

「サンちゃん、明日僕はアメリカにある聖遺物研究所の方へと行くよ。」

「なら私も!! 「駄目だ。」 どうして!! 私だつておじさまを守れるくらいはできますよ!!」

「だからこそだ、君には万一僕に何かあったときに備えて残ってほしい……」

「おじさま……」

「テイキやアंक達を除けば僕と付き合いが長いのは君ぐらいだ……君にしか頼れる人物はいない……頼むサンちゃん。」

「……わかりました。それはおじさまとしてですか？」

「ああ今はパヴェリア総社局長としてではなく、アダム・ヴァイスハウプトとしてお願いをしている。」

「おじさま……なら約束をしてください。必ず無事に戻ってきてください。」

「ああわかつているさ。」

次の日アダムは数人の錬金術師と共にアメリカの方へと飛んで行く。場所はF I Sの研究所がある地域だ。

「アダムさま、いったいアメリカには何しに行くのですか？」

「ああ君達は僕がアルカ・ノイズを作ったのは知っているね？」

「はいもちろんです。確かノイズをベースに作られたと……」

「そのとおりだよ。今僕のそばに立っているアルカは基本形態ベースで炭化能力はないんだよね。そのあとに作ったのは炭化能力がつけられているけどね。」

【その通りですけどね。】

プレートを出して言葉が発生をするようにしたアルカであった。

キャラ紹介

アダム・ヴァイスハウプト

性別男

今作の主人公でその正体は憑依転生をした転生者だ。特典は錬金術の力ってことで四つのエレメント属性や黄金錬金など本編以上の錬金術を使うことができ治療錬金術なども得意である。

原作のような性格はなく、彼は自身を作った創生者に復讐をすることはなく月の技術を使いテイキを作って彼女と地球へ転移する。

前世の記憶を使いオーメダルとセルメダルを作りグリードたちを誕生させてさらにオーズドライバーとオーブカリバーを錬金術で作って仮面ライダーオーズに変身することが可能となった。

変身をしなくても強力な錬金術を使って倒すことができるが自身の体も錬金術で隠しているためあまり強大な錬金術は使用することができない。

ある街でサンジェルマンの見つけて母親を治療錬金術で治してから彼女の父親が住んでいる屋敷に突撃をして火球で抹殺。

そのあとサンジェルマンやカリオストロにプレラーティと仲間が増えていき現在のパヴェリア総社を作り上げる。

本人はひっそりと暮らしていきたいと思っているがこの何百年でどれくらい悪い奴らをオーズの力などを使って倒してきたか覚えていない。

最近の悩みはサンジェルマンやテイキ達が体を隠そうとせず一緒に風呂に入ってくるのが悩みである。

テイキ

アダムが最初に作りだした戦闘機人で、本編のような幼い体ではなく大人の体のため精神的にも落ち着いている女性。姿はリリカルなのはS.T.Sのギンガ・ナカジマ

自身を作ってくれたアダムのことはマスターと呼びながらもサンジェルマン同様に彼に恋をしている。普段はそれを出さないようにしている。

武器は己の手を武器に変える力を持ち主に剣や銃にしてアダムの援護をしたりする。目からは本編でテイキがしていたように星空を出すことができアダムはお風呂で夜空を見るのが好きだったことも知っている。

料理も得意でパヴェリア総社ができる前はアダムと一緒にご飯を作ったりしていた。現在は新たな姉妹、サナエ、アイカ、レイの三人を始動をしながらもアダムの秘書をしている。

最近の悩みはアダムと二人きりになれないことである。

グリード5

アダムが前世の記憶で作ったコアメダルに欲望とセルメダルを錬金術で作ったオーズに登場をした怪人たちだ。

原作みたいに仲は悪く無くトランプをして遊んだりしている。

アंक

アイスクリームが大好きな鳥型のグリード、プライドが高くたまーに傷つくことを言ってしまうことがあるがそれは彼なりの優しさだっことはアダムはわかっている。

アダムのことはアダムと呼び捨てをしており彼にアイスクリームをよこせというほどにアイスクリームが好きである。

セルメダルを使い観察をする鳥型を作ってアダム知らせたりする。得意攻撃は火球と羽型爆弾である。

ウヴァ

昆虫型グリードでいつもアंकやカザリとトランプをしていつも負けている。行動隊長の通りに相手に最初に攻撃をするのがウヴァである。

ほかにも実は料理が得意だっことが判明をする。

武器は右手に発生をした鎌と頭部から放たれる雷攻撃である。

カザリ

獣型グリードで冷静な判断能力を持つグリード、トランプでいつも勝っている。本編みたいな裏切ったりすることはなく困っている人がいたら助ける青年である。

武器は高速で移動をして爪で相手を切り裂く攻撃やコードを伸ばして相手を貫く攻撃だ。

ガメル

重量型グリードで本編みたいな話し方をする。今作ではメズールに甘えたりアダムに甘えたりする。

力もちで力仕事は自らするというぐらいに彼は重いものをもっていくので実はグリードの中では飴ちゃんを皆に渡したりしている。

また子どもたちにも人気でガメルおにちゃんと呼ばれることがある。

武器はその剛腕であいてを叩き潰したり重力を使ったり左手の二連キャノンで攻撃をしたりする。

メズール

本作では皆のお姉さんの存在になっておりテイキも姉さんというぐらいの母性がある。ご飯なども食べられるので料理は彼女がやることが多い。

武器水流と液化化をして相手を窒息死させたり感電させたりする。

サンジェルマン

アダムが最初に仲間にした女性で、奴隷の娘である。貴族の父で病気の母を助けてもらおうとしたが振り払われたところにアダムが現れて錬金術を使うところを見てからじーつと彼を見てこれが恋だつて気づいた。

彼のことはアダムおじちゃんと呼んでおりそれは大きくなってからも変わらない。錬金術は今作ではアダムから学んでおり彼は彼女のことを天才と呼んでいるぐらいに錬金術が得意となり今は本編同様に完全な体に作り替えている。

パヴェリア総社結成後は幹部としてアダムの下についている。彼のことは原作とは違いLOVEでお風呂にはいつも一緒に入っているがアダムは大きい胸を見てしまうので顔を真っ赤にしてしまうぐらいである。

ファーストロープなどは原作同様である。

カリオストロ

かつては男性だったがサンジェルマンの錬金術によって女性の体となり自身を捨ててくれて暖かい場所をくれたアダムとサンジェルマンには感謝をしている。女になつてからは自身に嘘をつかないようにしておりアダムとサンジェルマンや仲間を傷つける奴がいたら殺そうとするほどになっている。

アダムのことはどうおもっているのか？事情を知り自身を拾ってくれた恩人だと

思っており女性へと変えてくれて自身を助けてくれたサンジェルマンには感謝をしている。

こちらもファーストロープなどは同じである。

プレラーティ

こちらもカリオストロ同様には元は男性で科学者をしていた。アダムが連れていたティキを戦闘機人とわかって彼が使う錬金術を見て彼と一緒に面白いつことでついでいくことにした。

そのあとにカリオストロと同様に女性の体に変化してもらい今の生活を木にしている様子。たまーにかつての科学者としての血が出てしまい不敵な笑みを出すことがある。

ファーストロープは原作と同様だがアダムはなぜけん玉と思いつながら彼女が戦う姿を見るのであった。

キャロル

本編ではサンジェルマン達同様な形になっており大人の姿で固定をしている。オートスコアラーたちを作りあげてイザークと共に錬金術を使って人助けをしたりしている。

現在はダウルダブラのファーストロープの改良をされており乳を助けてくれたアダム

には恋をしておりサンジェルマンと激突をすることがある。

料理などは昔から作っていたのでアダムも美味しいといわせるほどの腕をもっている。鍊金術は得意で原作で使ったことも可能である。

イザーク

キャロルの父で今作では生存をしておりアダムに助けてもらい共にパヴェリア総社を支えている人物だ。彼の鍊金術としての知能はすごくてアダムも彼から学ぶことが多く、パヴェリア総社に入っている鍊金術師たちはイザークの講義を聞くほどメモをしたりしている。

現在はプレラーティと共に新たな基地を建設をする予定となっている。

鍊金術師たち

村人たちに処刑をされかけられりした人物たちがアダムたちに助けてもらった者たちが多く彼らを慕っているメンバーである。

ほとんどは元は男性だったが女性に変化しているものが多かったり元から女性の人もいる。

彼らもアダムたちほどじゃないが鍊金術を使って人を助けたりする。

アルカ・ノイズ

今作ではアダムが制作をしたことになっており。一号機としてアルカという名前を

付けたアルカ・ノイズを制作。

彼には炭化能力などはないが人を抱えたりすることができる。もちろんほかのアルカ・ノイズも任意で炭化能力を解除をして人を助けたりするがやはりノイズと勘違いされるのでアダムは普段は出さないようにしている。

仮面ライダーオーズ

アダムが作った錬金術でオーズドライバーとオーズスキャナーを使って変身をした本編同様と同じである。

メダルは全て持っておりタトバ、ガタキリバ、ラトラーター、サゴーズ、タジャドル、シャウタ、プトティラ、ブラカワニに変身をする。

武器はメタジャリバーがないのでオーブカリバーをつかった接近して切ったりする。

オーブカリバー

アダムが自身が使っている四つのエレメントをオーブカリバーに錬金術で作りだした武器で主に使う技はウルトラマンオーブダークの技とオーブオリジンの技を使うことができる。

爆発をする研究所

アメリカに到着をしたアダムたちはすぐに研究所がある場所へ向かっていく。彼は嫌な予感がしており完全聖遺物『ネフィリム』が運ばれているという情報を得ていたのだ。

ネフィリムが暴走をすればその範囲が大変なことになるってことが前世の記憶でセレナは絶唱で繭までの状態にしたが彼女は絶唱のバックファイアーによつて動けないときに天井が崩落をして絶命をしてマリアの目の前でだ。

(そんなことは僕がさせないさ。その為にアメリカにやってきたんだよね。)

アダムたちはFISの研究所が見えてきたが何か変な感じだと思つていた。

「アダムさま!! 研究所が燃えております!!」

「.....」

彼らは降りて燃えている研究所を見ていた。

「いったい何があつたのでしょうか？」

「君達は水の錬金術を使い消火活動をしてくれ、僕は中に突撃をする。」

彼はオーズドライバーを装着をしてメダルを装填する。

「変身。」

【タカ！カマキリ！チーター！】

オーズタカキリーターに変身をしてタカヘッドの能力を発動させて中の様子を見ていた。

（おそらくネフィリムが暴走を起こして暴れて爆発をしている。とりあえず僕の錬金術師たちが消火活動をしているが……一刻も早く突撃をしようか。）

チーターレッグの力で加速をして研究所の中へ突撃をする。本来の歴史ならセレナは死亡をしてしまうがアダムはそんなことはさせたくない思いで走っていた。

「まっつていたまえ!!たとえ原作ブレイクを起こしても助けて見せる!!」

オーズは燃え盛る研究所の中へと突撃をしていた。

一方で研究所のネフィリムが保管されている場所、白い完全聖遺物「ネフィリム」は暴れていた。研究をしようと実験をしたところ突然として制御が聞かなくなり暴走を始めた。

それを止めるために一人の少女が立っていた。名前はセレナ・カデンツヴァナ・イヴ。シンフォギア『アガートラーム』適合者でもある。

彼女は絶唱を使うためにギアを装着、13歳の少女にやらせることになる。それには姉のマリアは反対をするが彼女は自ら志願しアガートラームを纏ってネフィリムの前

に立っていた。

だがその周りは燃え盛る炎が発生をしていた。

「セレナ……セレナ！待って!!」

「マリア姉さん……私、行くよ。」

彼女は目の前の化け物に対峙をする。

「ネフィリムを何とかできるのは私と、私のシンフォギアだけ。だから私が行くよ。姉さんとママ。生き残っている人たちを救うために。」

「セレナ！あなたが犠牲になることなんてない!!」

「……」

彼女はマリアの手を振りほどき、ネフィリムの前に立とうとした。瓦礫が降ってきて初老の女性に振りかかろうとした。

「ママ!!」

だがそこに謎の魔法陣が発生をして彼女の上空にあった瓦礫が消滅をした。

「どうやら間に合ったみたいだね。」

「「え？」」

そこには赤と緑、そして黄色のメダルを装填したオーズの姿があった。彼はその前に二人の少女たちを救ってからこの場所へとやってきた。

「お久しぶりですナスターシャさん。この姿をしていますですがアダムです。」

「あ、アダムおじさん？」

「どうして……」

「なーにかわいい少女がピンチと聞いてね。はるばるアメリカにやってきたのさ。」

「か、かわいい……」

オーズはセレナの頭をなでなでしてネフィリムの前に立った。彼はメダルを変えて赤いメダルを二枚出して装填をしてオーズスキャナーにスキャンさせる。

「タカ！クジャク！コンドル！タージャードルー！」

「は!!」

赤き翼が六枚生えて一瞬で消えた。オーズタジャドルコンボに変身をしたのだ。左手にタジャスピナーが現れて彼は前に歩いていく。

「アダムおじさん!!」

「大丈夫、すぐに終わらせる。その時はセレナちゃんの料理を食べさせてくれるかい？」

「はい!!」

「いい子だ。」

ネフィリムはオーズの姿に咆哮をあげて襲い掛かってきた。放たれる剛腕をオーズはタジャスピナーを使いガードをする。

「いい攻撃だ。だけど無意味だよ!!」

右手に炎の火球を作りだしてネフィリムの顔面に直撃させて吹き飛ばす。瓦礫の方に突っ込んでいき彼はタジャスピナーをオープンさせてメダルを一枚ずつセットをしていく。

そのままオーズスキャナーを持ちタジャスピナーにスキャンさせる。

「クワガター!ライオン!サイ!シャチ!プテラ!コブラ!ギガスキャン!!」

「はああああ.....」

左手のタジャスピナーにクワガタメダルたちの紋章が現れてタジャスピナーに集まっていき彼は左手をつきだしてそこから強烈な光弾が放たれる。

ネフィリムは瓦礫から起き上がるがそこに放たれたマグナブレイズが命中をしてネフィリムは爆散する。

オーズはネフィリムが爆発をしたのを確認をして水の錬金術を使ってそれを上空へ上げるとそのまま周りの炎を鎮圧させる。

「アダムおじさん.....」

彼はオーズドライブバーからメダルを外して変身を解除をしていつものシルクハットをかぶる。

「久しぶりだねマリアちゃんにセレナちゃん、そしてナスターシャさん。」

「アダムさんありがとうございます。」

「気にしないでくれ、これは僕自身が嫌な予感がして助けに來ただけだから。外では僕の仲間の錬金術師たちが消火活動を行っていましたからね。中に入ることは余裕でしたよ。」

彼は外に出て仲間の錬金術師たちと話をしておりマリアとセレナは調と切歌と話をしていた。

アダムたちはそのままパウエリア総社に戻ることとなりお別れの挨拶をする。

「アダムおじさん、もう行ってしまおうの？」

「ごめんね。僕も仕事などがあるからね……セレナちゃんの料理はまた会ったときに作ってもらおうよ。」

「わかりました。」

「アダムおじさん、セレナを助けてくれてありがとう。」

「いいってことよ。マリアちゃんは美人になる。必ずってほどに。」

「もうおじさんたら……でもうれしいです。」

「頑張ってくれ未来の歌姫さん。」

「アダムおじさん!!行かないで(デース)!!」

「調ちゃんと切歌ちゃん……ごめんねおじさんも君達と別れるのはつらい、けど

僕にも色々事情があるからね……. だけど永遠のお別れじゃないってことは言っておくよ。」

彼は二人の頭を撫でてから飛行機に乗りこんでパヴェリア総社本部へと飛んで行く。飛んで行く飛行機をマリアたちは見ていた。

「美人になる……. か…….」

「マリア?」

「私は決めたわ。今度アダムさんにあつたら告白をするわ!!」

「ずるいですマリア姉さん!!」

「そうデース!!」

「私だって!!」

アダムに恋に落ちた人物たちがまた増えていることを飛行機に乗っていったアダムが知ることはなかった。

ナスターシヤも苦笑いをしながら飛んで行った飛行機を見るのであった。

アダム side

「へくしゅん。」

誰だ僕らの噂をしているのは、原作ブレイクをまたしてしまった……. 本来はセレナちゃんはその事件で絶唱を使いバックファイアーで動けなくなつたところに瓦

礫が落ちてマリアちゃんの目の前で死亡。さらにはナスターシャ教授もマリアをかばった際に瓦礫に巻き込まれて下半身が動けなくなり車いす生活を余儀なくされるはずだった。

だけどイレギュラーである僕が現れてナスターシャ教授の上空の瓦礫を錬金術を使い撤去してネフィリムの戦いは僕が成敗をした。

窓の外を見て僕は色々と原作をブレイクさせているなど思いながらフィーネの野望が日本で行われることを知っている。

一度やつとは戦ったことがありテイキを破壊しようとしたが僕がプトティラコンボになり彼女をかばった。だが奴もダメージを与えて撤退させることに成功をした。

その時にテイキが抱き付いてきたのは驚いたな、普段はそんなことを見せない彼女がね（笑）

「アダムさま間もなくパヴェリア総社本部に到着をします。」

「ご苦労。君も帰ったらゆつくりと休んでくれ。」

「しかし……」

「なーに僕についてきてくれたからね。ありがとう……」

「いいえ私はアダムさまたちによって救われました。だからあなたのためなら命だって

「それはやめてくれ。」え？」

「僕は誰一人命を粗末してほしくない。君達は僕にとっては家族当然だ。だから僕のために死ぬことだけはやめてほしい。」

「あ、アダムさま……………」

何て言っているが原作のアダムはそんなことは絶対に言わない。けど僕はアダム・ヴァイスハウプトじゃない……………けれど今は僕がアダム・ヴァイスハウプトだから……………原作通りなんてしないさ。

本部へと到着をした僕はついてきてくれた錬金術師たちに休むように指示を出してから中へ入る。

「おじさま!!」

「おじさん!!」

「マスター!!」

「うわ!!」

声をした方を見るとサンちゃんにキャロルちゃん、ティキが来たので驚いてしまう。

「ど、どうしたんだい?」

「おじさま怪我などはしていませんか!!していたらすぐに私が治療をします!!」

「おいサンジェルマン!!それは私の役目だ!!さあおじさん私が見てやる!!」

「いいえ二人ともここは私にお任せください。さあマスター手を出してください。」

「三人とも僕は怪我などはしていないから大丈夫だよ。心配をしてくれてありがとう。」
「「ほ・・・・・・・・」」

彼女達は安心をしたのかほっとしていた。どうやら僕は心配をかけてしまっていたようだね。カリオストロとプレラーティとも再会をしたが彼女達は元気に過ごしていた。

「そういえばプレラーティ。」

「なんだ？」

「君はイザークさんと一緒に何かを作っていると聞いているが一体何を作っているんだ？」

「ああ今専用の移動基地を作ろうと思っっているワケダ。」

「移動基地かい？」

「そうだパヴェリア総社ごと移動ができれば楽じゃないかなと思っっているワケダ。けどなかなかこれが難しいワケダ。」

「確かにね・・・・・・・・移動などを考えると難しいところだね。」

確かに移動をする基地があれば楽だけど・・・・・・・・作ったの僕なんだけどさ。しかし移動基地か・・・・・・・・悪く無いけどまあそろそろ日本に行くべきかもしれない。

「原作通りならそろそろ天羽 奏が長野で襲われているはず・・・・・・・・」

「アダム？」

「何でもないよ。さてプレラーティ、明日僕は日本の方に飛び立つ。ティキが得た情報だと日本に完全聖遺物があるという情報を得ている。」

「ほう完全聖遺物が……」

「ああそのため長野県へと飛び立つ。そこで今回はサンちゃんとティキ、カリオストロにプレラーティに来てほしいんだ。」

「私もか？」

「ああキャロちゃんにはここを任せることにする。」

次の日となり僕たちは日本へと専用のジェット機で向かうことにした。キャロルちゃんは頬を膨らませていたが仕方がない大韓物を連れて行くから留守番をさせないとね。

「おじさまと一緒、おじさまと一緒。」

「日本なんて初めてよ。」

「けど今回は観光で行くわけじゃないよ。今回僕たちが行くのは長野県にある遺跡だ。」

「その遺跡に完全聖遺物が眠っているってワケだ。」

「その通りだ。」

僕は飛行機に乗っているのは僕たちだけじゃない今回はグリードの五人も連れて

いつている。

「日本か……」

「今回の目的って完全聖遺物が眠っている遺跡だけ？」

「ええその通りよ。」

「俺楽しみ。」

「ふん、おいアダムわかっているだろうな？日本のアイスクリームとやらを食わせるんだぞ!!」

「わかっているよ。そんなこと言われなくてもね？」

「アंकお前アイスクリームになると欲望になるな。」

「ウヴァ、お前のおごりでもらうぞ。」

「なんだと!？」

五人はがーやがーやしているが僕は窓の外を見ながら日本まで眠ることにした。

アダムたち遺跡探索へ

長野県にある洞窟、今現在10人がその中へと入っていき光が発生をする。パヴェリア総社アダム・ヴァイスハウプトが率いたパヴェリア総社たちだ。

彼らは日本に到着後ティキの中に搭載されている聖遺物反応を元に転移石を発動させて洞窟の中へと入っていく。

彼らは辺りを見ながら中へと入っていく。

「それにしても一体どんな聖遺物が置いているワケダ？」

「わからないね。それは奥の方に行けばわかるものだよ。」

「そうね。」

グリードたちも辺りを見ながら警戒をしており全員は奥の方へと進んでいき遺跡みたいなものを発見をした。

「おいあれじゃねーか？」

「みたいだな．．．．だがいったいどこに聖遺物があるのか．．．．とりあえず皆で手分けして探してみるところでしょうか。」

アダムたちは奥の方に到着をしたみたいなので辺りを探すように指示を出す。彼ら

は物を探しながら遺跡をあさっていた。

「メズールこれかな？」

「それは違うと思うわよガメル。」

「これじゃない？」

「違うだろ。」

「つたくなんで俺が．．．．．」

ぶつぶつ言いながらもグリードたちは遺跡に隠されているであろう完全聖遺物を探している。

「これは．．．．．マスター!!」

「どうしたティキ。」

ティキが声を上げたのでアダムたちはティキが見つけたであろう棺を見ていた。

「棺．．．．．だよな？」

「ああ．．．．．一体何が．．．．．」

「ガメル開けてくれないか？」

「わかったガメル開ける。」

ガメルは棺を開けて全員で中を開けてみるとミイラが眠っていた。アダムは前世でなんか見たことがあるような気がした。その腰部につけているものを見ていた。

「なんでしようかこれ？」

「ふーむ………」

アダムたちは考えていると突然として声が聞こえてきた。

「ぐあああああああああああああ!!」

「きやあああああああああああああ!!」

「声だ!!」

アダムはオーズドライバーを装着をしてメダルを装填してオーズスキャナーでスキャンさせる。

「変身!!」

【タカ！トラ！チーター！】

タカトラーターに変身をして声が出た方へと走っていくと調査団と思われるものたちがアルカ・ノイズにそっくりなものに襲われているのを見つけた。

タカトラーターはオーブカリバーで切り裂いて撃破した。彼はもしやと思い急いで走っていく。

???
side

あたしは父さんや母さんがノイズに襲われて妹の香苗と逃げていた。

「きや!!」

「香苗!!」

「お姉ちゃん逃げて!!」

「けど!!」

「お願い!!」

「くそおおおおおおおおおおおお!!」

あたしは香苗を置いて逃げてしまった。あたしは……あたしは!!ノイズをぶつ殺してやる!!絶対にだ!!

香苗 side

これでいい、お姉ちゃんが逃げてくれただけでも……私は振り返るとノイズがせまってきた。パパとママを殺したノイズが……私は目を閉じた。

「ロックカリバー!!」

突然として石が大量に降ってきてノイズ達に命中をして撃破していく姿を見た。そこにたっていたのは。

「タ・ト・バタトバタ・ト・バ!!」

メダルを三枚装着されている戦士の姿だった。

香苗 side 終了

アダムことオーズは地面に刺したオーブカリバーを抜いて彼女に近づいた。

「大丈夫かいお嬢さん？」

「えつと……あなたは？」

「僕はアダム、アダム・ヴァイスハウプトというんだよ君は？」

「天羽……天羽 香苗です。」

「香苗ちゃんか、いいなまえだね……とりあえずここは危ないから君は僕の背中に乗りたまえ。」

香苗はオーズの背中におんぶで乗り彼は歩いてサンジェルマンたちのところへと合流をしていく。

「おじさま!!無事ですか!!」

「ああ君たちの方にも現れたみたいだね？」

「その通りよーファーストロープで対抗できたわ。」

「俺たちの攻撃も通ったからな。ノイズって奴は大したことないな。」

アंकたちはグリード態になりノイズと戦ったみたいでメズールは考えていた。

「どうしたんだいメズール。」

「いいえアダム、ただ……誰がノイズを出して調査団を襲わせたのかわかって。」

「それは僕も思ったよ。彼らを消さないと行けなかったのかと思ってね。」

「とりあえず先ほどの部屋に戻ってみようか。」

彼らは先ほど探索をしていた部屋に戻っていき確認をしてみると棺が入っていた場所とは違う場所が空いており何かが置いてあった形跡があった。どうやらここに何かが置いてあったみたいだなとアダムは呟いて棺の方を開ける。こちらのほうは何も触られておらず腰につけているものもそこにあつた。

「とりあえずこのミイラを棺ごと持つて帰るとしよう。ガメル悪いけど先にこの子と一緒ににもどつてくれないかい？ プレラーティもだ。」

「わかつたワケダ。このミイラが装着をしているものを調べてみるワケダ。」
「頼む。」

プレラーティはガメルと共に香苗を連れて先に戻ることにした。彼らが帰つたのを見てアダムたちも転移石を使い彼らが止まるホテルへと到着をして部屋に入る。

アダムはあのミイラの姿を見て思ひだしていた。それはサンジエルマンたちと出会う前に出会つた戦士のことを……

解析されたもの

アダム side

香苗ちゃんを仲間に加えた僕達・・・あのミイラを見ていて思い出したよ。

実は僕は古代日本にやってきたことがありその時に出会ったのがクウガと呼ばれていた彼のことを・・・

あれはまだサンちゃんたちと出会う前のことだ。日本にやってきた僕達はある村へ到着をした。そこで暴れていたのはグロンギと呼ばれる存在が暴れていた。僕はオーズに変身しようとした時赤き戦士がグロンギに蹴りを入れて撃破した。それが僕とリックとの出会いだった。

「君は・・・」

「俺はリック、お前たちは？」

「僕はアダムって言うんだ。」

そこからぼくたちはしばらくリックが住んでいる村に滞在をすることにした。彼が変身をした姿はクウガと呼ばれる存在だということを知った。

僕もオーズに変身をして共に戦ってグリードたちも協力をしてくれて闇の敵たちを

倒してきた。やがて闇の存在を倒したりクと別れて今に至る。

そして現在、プレラーティが解析結果が完了させたという連絡を受けて僕は一度パヴァリア総社へと帰還をして彼の遺体と再会をした。

「来たかアダム。」

「ああそれで結果の方は？」

「ああこいつの名前はアークルと呼ばれる完全聖遺物なワケだ。」

「……………」

僕はリクの遺体に触ると突然として光が発生をして僕は意識を失った。

アダム side 終了

アダムが光に包まれて意識を失ったと聞いてサンジェルマン達は急いで戻ってきた。

「プレラーティおじ様は!!」

「大丈夫だ。ただ意識が無くなったただけだ。だが突然だったからこそこっちも焦ったワケだ。」

「けどどうしてアダムは気を失ったのかしら？」

幹部たちが話している中アダムは目を覚ました。どこかの心の中であろうか……彼はあたりをみると突然声が聞こえてきた。

「アダム……………アダム。」

「その声は．．．まさか!!」

彼は振り返るとそこにいたのは懐かしい人物であった。

「やあアダム久しぶりだね。」

「リク．．．．．」

そう彼こそかつてアダムと共に闇の存在を倒した戦士クウガに変身をしていたリクだった。

「久しぶりと言いたいけど僕には時間が無い．．．．．アダム君を待っていたのだから．．．．．」

「僕を? いったいどういうことだい．．．．．」

「それはクウガの力を君に託すためだよアダム。」

「な!!」

リクから言われた言葉にアダムは驚いてしまう。クウガの力を託すということ．．．．．彼はずっと待っていた。アダムが再び日本にやって再会をするということ．．．．．

「僕は君という友達も得たからこそ最後まで戦えた。だから僕の魂と呼ぶアークルを君に託したい。」

「リク．．．．．」

リクの体が光出して彼はフツと笑い彼の右手を握った。

「アダム・・・・・・・・最後に君に出会えてよかったよ・・・・・・・・。」

「僕もだよリク・・・・・・・・。だけどお別れじゃないよ。君の魂は僕の中で生きていく。だから見守ってくれリク。」

「ああ見守るよ・・・・・・・・。さようなら友よ。」

「ああさようなら・・・・・・・・。」

リクがアダムのと一体化をして腰にアークルが現れる。

「は!!」

アダムは目を覚ました。メンバーたちは彼のが目を覚ましたことに喜んだ、

「アダム・・・・・・・・。先程解析をしていた遺体が崩れた。そして完全聖遺物アークルも消滅をした。」

「いやアークルはここにある。」

「「え?」」

アダムは立ち上がり腰に念じるとアークルが現れた。そして彼はポーズを構える。

「・・・・・・・・。見ていてくれリクこれが僕の変身!!」

アダムは全身が包まれていき今ここに仮面ライダークウガが復活をした。状況において彼はクウガとオーズを切り替えて使用をする決意を固める。

(そういえば、前に助けたあの家族は元気にしているだろうか？音楽家の夫婦と子供を助けたことがあつたけど元気にすごしているだろうか？)

さて話を戻すでしょう。ジャンヌたちはどうしているかというところ？彼女たち自信が錬金術を学びたいという思いを受けて錬金術師たちに指導をもらっており武器を作ったりして模擬戦をしたりしている。

そしてアダムはある人物を呼び出していた。

「失礼します。アダム様お呼びでしょうか？」

「やあヴァネッサよく来てくれたね？」

彼女を呼んだのはファウストローブの研究を彼女がしているのを知っていた彼はジャンヌたちのファウストローブに使用できないかをしてもらうために彼女を呼び出した。ヴァネッサもまさか自分が呼び出されるとは思ってもいなかったので緊張をしていた。

「ふふ楽にしたまえ。君のファウストローブの研究資料を見させてもらったよ。実に見事だよ。」

「光栄です。」

「そこで君にはファウストローブ開発責任者として頑張つて欲しい。」

「!!」

アダムの言葉にヴァネッサは目を見開いた。彼は椅子から立ち上がり彼女の肩をポンと叩いて局長室を後にした。

その夜お風呂場 アダムは泡風呂に入っていた。そばにはティキも一緒だ。

「マスター今日も見ますか？」

「頼むよ。」

ティキは天井に顔を向けて光らせると夜空が天井に発生をした。彼はこうしてお風呂に入りながら夜空を見るのが好きなのだ。

「綺麗だ……こうして星空を見ながらお風呂に入るのは最高だよ。ありがとうティキ。」

「お礼を言うのは私ですマスター、あなたが私を作ってくれなかったらこうして外を知ることができませんでした。ありがとうごさいますマスターそれとこれからも宜しく御願います。」

「ああ……そ………」

彼らは一緒にお風呂に入り過ぎたのであった。

移動基地完成 日本へGO!!

アダム side

リクから彼の形見でもあるアークルを貰い僕はクウガの力を得る。それからもオーズとクウガの力を交互に使用をして戦い続けていた。まあそのおかげで錬金術師たちが増えてきている。

さてそれから数年がたち今僕達はプレラーティとイザークさんが前に立ち後ろにはでかいものが包まれているのがわかる。

「さてみんな待たせたワケダ。」

「えつとプレラーティ……その後ろの建物は一体何かしら?」

カリオストロが質問をしているが、僕は気になっっているけど一体なんだろうか? 確かチフオートシヨートを設計などは彼女がしたのをキャロルが奪ったからね。

「僕とプレラーティ君と協力をして作り上げた僕達の新しい移動基地だよ!! 錬金術を全てをかけてね。」

「いやそこまでしなくてもいいよね?」

「あははは (?▽?;) ハハッ」

僕も苦笑いをしてしまい、2人が楽しそうで何よりだなと思ひ彼女たちが待たせたなと言ったので見る。

「では見るといい!!私たちが完成させた移動基地を!!」

プレラーティがめくるとそこには移動をするための物が立っていた。

「すごい。」

「名前はチフオートシャトーとなまえをつけているワケダ。この基地には色んな情報が集まるようにしている、さらには錬金術の応用で外は狭そうに見えるが中は空間になっているワケダ。移動も脚部の6つの足で動けるように改良。さらには見つからないようにステルス機能などを搭載されている。」

なんとというかすごい気がするよ。全員で中へはいると外の狭さよりも広く作られているのがわかる。東方Projectの紅魔館のようだよ。

さて僕は局長室に行きあまり変わっていないなと思いつつ座った。秘書のカテリアが入ってきたので僕は移動基地を移動させることにした。

「さてカテリア全職員に通達、僕達はこれからある場所へ移動をする。」

「その場所は?」

「香苗ちゃんの故郷日本だよ。」

僕は(?▽?)ニヤリツと笑い香苗ちゃんが居そうな場所に行く、そこにはメイちゃ

んと仲良く遊んでいる香苗ちゃんの姿があった。

ガメルとカザリが見守っている感じだね。

「あ、アダムおじちゃん!!」

「やあ香苗ちゃん今日はこの基地を移動させることにしたよ。その場所は日本だ。」

「えー?」

ふふふ驚いているね。ちなみにジャンヌちゃんは専用のファウストローブが完成をしておりヴァネッサいわく彼女が使用するのは名前の通りジャンヌ・ダルクの槍を振り回したりするみたいだ。錬金術も得意で僕も何度か模擬戦をしたことがある。

「子供つてのはすぐに成長して悲しいね……」

僕は考え事をしながらそういえばミラルクたちは既に保護をしている。体の方は改造をされていたけど、それは僕の錬金術でちよちよいのちよいで人間の体にしてあげたけど懐かれてしまった。

あ、これってシンフォギアXVがなくなるじゃないかな? まあそれでもいいけどね。さてガシンガシンと基地は移動をしているみたいだね。冷蔵庫なども作っているためアंकはアイスが食べられると喜んでいたのを思い出したよ。

「アダムおじ様—————」

「ん?」

声がして振り返るとジャンヌちゃんが走ってきた。あの胸が揺れているの？おじさん性欲あるから襲ってみたい感じになってるよー

「や、やあジャンヌちゃん。」

アダムside終了

ジャンヌside

私はウヴアさんと模擬戦を終えてシャワーを浴びてから歩いているとアダムおじさんが1人で歩いていた。アダムおじさん……私たちを地獄の底から救ってくれた人。私は走りおじ様に声をかける。けど叔父様顔が真っ赤にしているけど……ははーんおじ様は私の胸のほうをみていた。だーいぶ大きくなってきたけどこれって行ける気がするわ。

「あらーおじさん、どこを見ているのですか？」

「あははははジャンヌちゃん、お、大人をからかうじゃないよ（???）」

ふふふ動揺をしているのがバレバレですよおじ様（笑）まあそれでも私の好きな人だから逆に襲って欲しいなと思っっているのは事実。

だっておじ様なら私の初めてを捧げたっけい。だからおじ様……ニガサナイヨ？

ジャンヌside終了

それからシャトーは数時間の移動で日本近くに到達をした。それから浮上をし基地が置ける場所を探して大きな空き地を見つけてそこに布陣をした。基地の方はステルス機能を発動させて見えないようにしており、彼らは降り立つ。

「着いたみたいだね。それにしてもすごいねこの基地は……数時間で日本に到着をするとはね?。」

「甘いなアダム、こいつは見た目以上のスピードを出すワケだ。」

「なるほど……」

日本に上陸をしたアダムたち、果たしてどう動くのか!!

現れたノイズ

日本に到着をしたアダムたちは到着後彼は自由にすると指示を出してジャンヌやメイと香苗達を連れて街の方へとやってきた。グリードたちもそれぞれが欲しいものがあるのか街へ行ったので彼らも移動をしていた。

「おーーーーー（。？ω？、）」

彼女たちの目が光っておりアダムたちはそれを見て苦笑いをしていた。

「こらメイ!!」

「だってお姉ちゃん私欲しいもん!!」

「わがママを言うんじゃないの!!」

姉妹で喧嘩を初めてしまったのでアダムは2人の頭を撫でることにした。

「まあまあ二人ともメイちゃんと香苗ちゃんほどの味が欲しいのかな?」

「いいの!!（。？ω？、）」

「ああもちろんだよ。好きなのを買ったまえ。」

「わーいゞ（●、▽、●）」

二人は喜んでいるがジャンヌは申し訳ないという顔をしていた。彼女は年上ってこ

とで何かと我慢をしているみたいだなとアダムは思った。

「ジャンヌちゃん、そこまで考えない方がいいぞ？君だって欲しいものがあれば言ってもいいんだよ？」

「けど……」

彼女が考えていると警報が鳴りだした。人々が逃げていくのを見てアダムはなにか嫌な予感がしていた。

逃げようとしている男性の手を掴んで状況を聞こうとした。

「どうしたのだい？」

「逃げるんだよ!!ノイズから!!」

「ノイズだって!!」

彼は前を向くとアルカ・ノイズと同じような姿をしたもの達が前から現れた。アダムは構えるとアークルが現れて彼は発する。

「変身!!」

装甲が彼を纏っていき仮面ライダークウガへと姿を変えてノイズに攻撃をする。クウガの拳はノイズたちにあたり炭化していき次々に撃破していく。ジャンヌは2人を守るためにファウストローブを纏い襲いかかってきたノイズを錬金術で作ったやりに炎を纏わせてもやし尽くしていく。

香苗とメイは錬金術で作った盾でノイズの攻撃を塞いでいた。二人のファウストローブはまだ完成をしておらずティキが己の手を剣に変えて二人に襲いかかるノイズを切り裂いていた。

「超変身」

姿を緑のクウガ ペガサスフォームへと変身をして錬金術で作った銃がペガサスポウガンへと姿を変えてノイズたちに放ち命中をして爆発する。アダムたちは何とか戦っているが次々に現れるノイズに苦戦をしていた。

「く・・・まだ来るのか。」

「このままでは・・・・・・」

ジャンヌとティキは疲れてきていた。アダムもこの状況はまずいなと思い錬金術を使おうとした時上空から槍が降ってきた。

5人は放たれた槍を見て上空から降ってきた二人の人物を見る。1人はオレンジの髪でもう一人は青い髪に左のサイドテールをしている女性だ。

アダムは彼女たちが装着をしている姿を見てシンフォギア装者が来たのだなと確信を得た。するとオレンジの髪をいた女性は香苗の姿を見て目を開いていた。

「な!!」

「おねえ・・・・・・ちゃん?」

「なんでだよ………どうして香苗が………」

「奏、今は戦いに集中をして。」

「ああ悪い翼。」

奏と呼ばれた女性は先程自身が投げた槍を抜いてノイズたちに攻撃をしていく、彼女たちは歌を歌うことでフォルニックゲインが上がっていきその力でノイズと戦うことが出来る。アダムはその様子を見ながらテキキに彼女たちのデータを保存するように指示をして彼女は現在目を光らせて保存するために撮っている。

「さー僕も行くとするかな？超変身。」

ペガサスフォームから青いクウガ ドラゴンフォームへと姿を変身をして武器もドラゴンロッドに変わり素早い動きでノイズたちの間合いに入りドラゴンロッドを突いて封印エネルギーが発生させて爆散させる。

クウガの力に彼女たちは驚いているが、アダムはすぐに声をかける。

「後ろだ!!であ!!」

左手に風の玉を発生させてそれを投げつけてノイズに命中した。くらったノイズを中心に竜巻が発生してズダズダに切り裂かれる。

残ったノイズは彼女たちによって粉碎されて残ったのはアダムたちになり。彼らは帰ろうとした。

「待ちやがれ!! あんたたちの後ろにいるその子はあたしの妹じゃないのか!!」
 「.....」

「答えやがれ!!」

「やめてお姉ちゃん!! アダムおじさんをいじめないで!!」

香苗はクウガの前に立ち実の姉の奏の前に立った。

「やっぱり香苗なのか?」

「そうだよお姉ちゃん。私は天羽 香苗 お姉ちゃんの妹だよ。」

「.....なんだよそれ.....なんですぐに生きている事を言わないんだよ.....」

あたしは.....あたしは(;ω;) ウウウ」

「奏.....」

「それに関しては済まない、彼女を守るためにはこれしか方法がなかったんだ。これを君たちの司令官に渡して欲しい。」

クウガは紙をひとつ投げて翼はキャッチをした。

? (^o^) ? | . * : : ≡ * \ (. o . \) キャッチ!!

「これは.....」

「そこには僕達が普段住んでいる場所が書いてある場所でもある。もし会談をするならぜひ来て欲しい僕たちは歓迎をするよ。」

「アダムは転移石を割り魔法陣が発生をする。彼らはそれに乗り転送されようとする。待て!!お前は!!」

「僕はアダム、アダム・ヴァイスハウストだ。では（*?▽?）ノノノ マタネー♪」
彼らは転移をして姿を消した。残された二人は司令室と連絡をして彼らとどうするかを話すのであった

2課との会合

特異災害機動2課基地司令室では先程翼と奏が帰還をして翼が貰った紙を2課の司令官風鳴弦十郎は見ていた。

「アダム・ヴァイスハウプト……それが渡してきた手紙には彼らが住んでいる場所だ。」

「どうしてこれを私たちに渡してきたのでしょうか？」

「いずれにしても時間なども書いてある以上行かなければならないな。相手が誰であろうと呼ばれている以上な。」

「しかしおじさま、罠という可能性もあります。」

「確かにな、だが翼……基地の場所などを書いてわざわざあたしたちをおびき寄せるにしても変だぜ？」

「つと2課の方では色々意見と言っている中アダムたちは何をしているかと言うと？」

「局長どういうつもりですか!!」

サンジェルマンたちに怒られていた。

「どうもこうもないさ。ただ彼らと同盟を組みたいと言うだけだよ。それに彼女たちが纏っているシンフォギアつてのも興味があるからね。」

「ですがおじさまに何かあつたら．．．．．(；・ω・)」

「なーに心配することは無い、サンジェルマンたちにアंकたちを護衛につかせるからさそれにここは僕達のホームなのだよ？彼らがそんな馬鹿なことをしないことを祈るだけさ．．．．．それに櫻井了子という女性にも会ってみたくてね。」

アダムが笑っているのを見てティキはつまらないそうに見ていた。

「．．．．．マスターノバカ」

「(；・ω・)」

ティキのつぶやきが聞こえたのでアダムは困ってしまう。その夜彼は基地の外にいた。

「．．．．．」

「マスター風邪をひきますよ？」

「大丈夫だよティキ、僕は普通の人と違うからね．．．．．サンちゃんたちとは違うから僕は．．．．．化け物だからね。」

アダムは振り返り彼女に言うのとティキは抱きついた。

「そんなこと言わないでください．．．．．」

「ティキ……」

「マスターは化け物なんかじゃありません。私はたとえどんなことがありましてもマスターの味方です。」

「ありがとうティキ。」

彼らは中へ入り彼はアークルを出していた。

「リク、結局君は消えていなかったみたいだね?」

『ああそのようだ。僕も最初は消えたと思っていたのにね。あんなお別れをしたのに恥ずかしいよ(> / <)』

「だけどリク、君が近くにいると思うと僕は一人じゃないって感じがするさ。」

『……そんなことはないだろアダム、僕だけじゃなくサンジェルマンたちがいるから君は戦えるんだろ?僕も君やアイがいたからあいつらと戦うことが出来た。最後の戦いの時に究極の姿になった時僕は暴走をしかけた。だけど君たちの声が聞こえたからこそ僕はこの力を制御ができてあいつを倒すことが出来た。』

「そんなことはないさリク、君は故郷を守るために1人で戦ってきたんだろ?本来はこの力だつて君は望んでいなかった。」

『やっぱり君には何もかも見透かされている気がするよ。その通りだ……僕は戦いは嫌いだ、でも奴らは人々をおそうバケモノ……だから僕は変身をした。仲

間や家族を守るためにね。』

リクの言葉を聞いてアダムはアークルを見ていた。自分も彼のように戦えるのかと戦えるのかと……

『アダム、君は君だ……僕じゃない。だからその力は君の使いたいと言う時に使つて欲しいそれが僕が言える言葉だ。』

「はは、君の言葉を聞いて安心をしたよ。ありがとうリク。」

『どういたしまして、そろそろ寝ないといけないだろ?』

「ああおやすみ」

『おやすみ』

アダムは目を閉じて眠りについた。次の日となりアダムたちは入口で彼らが来るのを待っていた。

「ねえアダム本当に彼らは来るワケダ?」

「ああ彼らは来るさ。」

「本当かよ。」

アングがじーつと見ていると黒い車がやってきた。そして基地の前に止まると扉が開いて風鳴弦十郎たちが降りてきた。

「ようこそ僕達の家。」

「お招き感謝をします。自分は特異災害機動2課の司令官を務めております。風鳴弦十郎と申します。」

「硬いね………普段の話し方でいいよ。そっちの方が馴染みやすいからね。」
「すまない。」

「さてお客さんたちを案内をしないとね。サンジエルマンたち彼らを案内を頼む。」
「わかりました。こちらになります。」

サンジエルマンたちの後について行く中アダムは櫻井了子を見ていた。

（間違いない、あいつが彼女の精神を取り込んで彼女になりすましているね………
フィーネ………香苗ちゃんの家族を襲い命を奪った張本人でテイキを壊そうとした人物………だが今はうごかないであげよう。だがお前の計画は成功はさせたりはしない。）

アダムは心の中で思いながら彼らが待つている部屋へと歩いていき扉を開ける。

「すまない待たせてしまつて。」

「いや気にしていいいさ。」

アダムは椅子に座り今回呼んだ理由を話をする。

「さて今回君たちに手紙を渡したのは君たちと同盟を組みたいと思つてね。僕達パヴァリア総社としては君たちの力になりたいと思つてね。そしてこれから起こる大きなこ

とをから守るためにね。」

「大きな戦い……」

「そうこちらもノイズと戦うことは出来るからね、それに君たちは僕が変身をした姿をみているからね。それにこつちとしては君たちとは個人としてでも仲良くしたいからね。」

「アダム殿感謝をする。」

お互いに握手をして今2課とパヴェリア総社の同盟が決まった。

奏 side

旦那とアダムの旦那との同盟が決まってあたしはアダムの旦那に妹がいる場所へ案内をしてもらっている。

「そのアダムの旦那。」

「なんだい?」

「ありがとうよ、妹を救ってくれて……あたし妹が死んだと思ってそれで……」

「だがそれでもあの子は今でも君の名前を出して心配をしていたよ。さて香苗ちゃん。」

扉が開いて香苗は友達と遊んでいた姿を見てここで馴染んでいたんだとあたしは思った。

「アダムおじさんにお姉ちゃん!!」

「香苗!!」

あたしは数年ぶりに妹を抱きしめた。あたしたちはお互いに涙を流して再会を喜んだ。

「よかったよおおおおお (; ω ; ;)」

「うんうん。」

アダムの旦那に感謝をするばかりだ、ありがとうな。

フィーネの計画

アダム side

2課との会合を終えて僕はホツとしていたが原作通りならそろそろ彼女が動き出すはずだ。ツヴァイウイングの二人のライブを利用して完全聖遺物「ネフシユタンの鎧」の起動実験を行うためのね。

「カテリア、悪いけど幹部たちを集めて欲しい。」
「わかりました。」

カテリアはサンちゃんたちを呼ぶために部屋を出ていく、改めて僕達パヴェリア総社幹部を紹介しないとね？

幹部はサンジェルマン、カリオストロ、プレラーテイ、カテレス、レヴェリア、アグル、レイジン、キャロルちゃんにジャンヌちゃんというメンバーである。

アグルとレイジンは男性の錬金術師であり幹部の一人でもある。さて僕の部屋にカテリアを始め幹部たちが集まっていた。

なおヴァネッサくんは幹部ではなく最高責任者であるため呼んでいない。彼女には香苗ちゃんとメイちゃんのファウストロープの作成をしてもらっている。

「局長、我々幹部を集結させたのにはなにか理由があるのですか？」

「ああサンジェルマン、その通りだよ。実は今度2課である実験を行うことになったいる。」

「ほう……」

「ちなみにどのような実験をなさるのですか？」

「そうだね。皆はネフシユタンの鎧という言葉を聞いたことがあるかい？」

「確か完全勢遺物だった気がするワケだ。待てアダム……その起動実験を歌で起動させようとしているのか？」

さすがプレラーティイだ、彼女が言った言葉に全員が僕の方を向いていた。だからこそ僕は首を縦に降る。

「それって確か今度行われるツヴァイウイングというユニットのコンサートでやるって聞いたような？」

「ああその通りだよレイジン、だからこそ僕は嫌な予感がして先程から冷や汗が止まらないんだ。さてみんな僕が呼んだ理由がわかったかな？僕はその日はライブに行くことになっているから君たちは外で待機をしてほしい。そして僕が合図を出したら一斉に扉を開けて乗客たちの避難を頼みたい。」

「そんな!!」

「局長に何があったらどうするのですか!!」

サンちゃんとかヤロちゃんに迫ってきているが仕方がないだろう？招待されているのだからさ……まあほかのメンバーたちが抑えてくれているので今日のところは解散ということでメンバーたちは部屋をあとにする。

「マスター、私は心配です……本当に一人で行かれるのですか？」

「ああテキ、君にはここを守つて欲しい。一応心配することはないと思うけど念の為にね？（それに物語を進めるには悲劇を発生させないといけない……果たして響ちゃんもグレになるのか？それとも原作通りになるか……）」

僕は両目を閉じて休むことにした。

アダム side 終了

それから数週間がたちツヴァイウィングライブ会場にアダムはやってきていた。彼は奏からもらったチケットで会場に入場をしてライブが始まるまで自身の席に座って待機をする。

そして会場の周りを見ていた。

（なるほどね、会場を見ているが入口は3個ほどか……幹部たちは透明の錬金術を使う姿を消して待機をしてもらっている。おや？）

彼はこちらの方に女の子がやってきているのを見つけた、それは原作の主人公立花

響である。

「ここかな？あ、すみません。」

「いや大丈夫だよ？なにせ僕はライブには始めてきたものでね？」

「え

「えっ、じゃあ私と一緒になんですわね。よかった……友達が用事で来れなくなったので一人でここへ来たんです。」

「そうだったのか、奇遇だね僕も一人でね。僕はアダム・ヴァイスハウプトって言うんだ。」

「私は立花 響です!!」

「響か……いい名前だね？」

「えへへへありがとうございます。」

彼らはライブが始まるまで話をしてしていると会場が暗くなっていく、アダムもそろそろ始まるから座つたらという響は彼の隣の席に座る。

そしてライトがステージの真ん中に光ると中からツヴァイウイングの2人が出てきた。会場の人達は彼女たちが現れるとサイリウムの色を青とオレンジの色に変えて降っている。

アダムも錬金術を使いサイリウムを生成をして響もツヴァイウイングの2人を見て

目を光らせていた。

ステージのふたりは色々と歌を歌っていきファンのテンションもフォルテツシモになっていく中アダムは嫌な予感がしていた。

「の、ノイズだああああああああああああ!!」

突然としてノイズという言葉を聞いてアダムは石を光らせると扉が一斉に開いた。

「皆様早く避難をしてください!!」

アダムは隣の響に避難をするように指示を出してノイズがいる頃へと走っていきオーズドライバーを装着をしてメダルを三枚装填する。

そしてオースキャナーをスキャンさせる。

「変身!!」

【ライオン!トラ!チーター!ラタラタ!ラトラター!!】

ラトラターコンボに変身をしてチーターレッグのすばやさで人々を襲いかかろうとしていたノイズをトラクローを展開させて切り裂く。

「早く逃げるんだ!!」

「は、はい!!」

女の子は扉の方へと走っていくのを見てから彼は再び前を向きオーズカリバーを構

える。エレメントを回転させて青のエレメントのところに止めてトリガーを引く。

「アイスカリバー!!」

刀身を振るい氷柱の槍がノイズたちを貫いていき撃破していく中ステージでは翼たちがギアを纏って交戦をしていた。

オーズもそこに参戦をして3人でノイズたちを倒していく中奏の動きがおかしかった。

「奏くんどうしたんだい?」

「いや・・・何でもねえよ・・・」

(やはり原作通りLINKERをやらずにギアをまとっているのか・・・)

アダムは原作を知っているので瓦礫が動いたのが見えた。

「あれは!!」

「くそ!!」

奏は響を守るためにギアを回転させているがノイズの攻撃にギアが砕けてその破片が響に刺さってしまう。

オーズはオーズカリバーで奏を狙っていたノイズを切り裂いて響の所へ行くと奏が必死に声をかけていた。

響は僅かに目を開いて確認が出来たのか奏はギアを持ち決心を固めた目をしていた。

「何をする気だい奏ちゃん。」

「なーにこんなにもあたしの歌を聴いてくれるヤツがいるからな、特大のものをプレゼントをしてやろうとつてうぐ!!」

だがその前にオーズが奏のお腹を殴り彼女を気絶させる。

「悪いけど……君を死なせない、翼ちゃんや香苗ちゃんを悲しませるからね。」
アダムはオーズドライバーを外すとアークルが腰に装着されてさらにアークルの形状が変わる。

「リク……かつて君がなったあの姿に僕は変身をするよ。人々を守るためにね……」
『ああやろうアダム。みんなを守ろう!!』

アダムは静かにポーズを取る。

『「変身」』

アダムに装甲が纏っていくがそれはいつもの赤い色の鎧ではなく、黒い鎧を纏っていた。かつてリクが闇の存在と戦った際に変身をした究極のクウガの姿である。

アルティメットクウガが再び降臨をした。その目の色は黒ではなく赤い目をしていった。

「すごい力を感じる……リクはこれを使って戦っていたのか……だが!!」

ノイズたちはクウガに襲いかかるが彼は腕を振るとき竜巻がはっせいをしてノイ

ズたちを切り裂いていく。

彼は手前にかざすと発火能力が発動をいってノイズたちを燃やし尽くす。翼はクウガの姿を見て圧倒的な力を恐れていた。

ノイズたちはクウガを倒すために合体をしていき巨大なノイズへと姿になるが、クウガは脚部にエネルギーを集めていた。

そのまま走りジャンプをして一回転して蹴りを入れる。必殺のアルティメットキックが命中をして巨大ノイズにクウガのマークが発生をして彼は後ろを振り返り歩いていくとノイズは爆さんをしてノイズたちは全滅をしたが一人の女性は笑っていた。

「くつくつくくくアダム……まさか貴様がいるとは予想はしていなかったがまあいいさ、貴様の戦闘データは集めさせてもらった。そして何よりもネフシユタンの鎧を奪うことが出来たのだからな。「させるんでも思っているのか?」なに?」

彼女は回避すると後段が飛んできた、放ったのはアグルの技リキティダーだ。彼は右手に水エネルギーを集めて刃にして女に向けていた。

「貴様がアダムが言っていたフィーネという女か、お前を逃がす訳にはいかないな。」

アグルはフィーネに刃を振るうが彼女は回避をして笑いながらアグルのこうげきをかわしていた。

「はっはっはっは悪いが私は忙しいのでな、さらばだ。」

「逃がすか。」

彼は刃を振るうが彼女が発生をした煙で見えなくなってしまう。彼は右手に発生させてた刃を手に持ち回転させて煙を晴らすすでにフィーネの姿が消えていた。

「アグルやつは？」

「ごめん、逃げられてしまった。」

「しようがないさ、アダムも許してくれるはずだ。」

「僕………役に立てなかった………」

アグルは（・ω・）と落ち込んでいた。

こうして発生をしたライブ事件はパヴェリア総社幹部たちの避難誘導やアダムが変身をしたオーズなどの活躍で死亡者はいなかったが重傷者などは発生をしてしまった。

アダム side

僕は基地へと帰りアグルが落ち込んでいたのでどうしたのかと聞いてみるとフィーネを逃げられてしまったことで落ち込んでしまっていた。

「アグル、落ち込むことはないさ。君たちがお客さんたちを逃がしてくれたあら僕達は戦うことができる。ありがとうね？」

「僕役に立った？」

「ああもちろんだよ。」

だがフィーネが動いたつてことはネフシユタンの鎧は盗まれてしまったで間違いない。ならクリスはまだ攫っていないと見ていい。それなら彼女が捕まる前に色々調べないといけないな。

やれやれ……サナエやカナ、レイにも手伝ってもらおうか考えてしまうね。彼女たちにもテイキと同等の戦闘力を持たせているからね。

「フィーネ、香苗ちゃんの家族の仇は取らせてもらうよ。絶対にね？」

クリスを探せ。

ネフシユタンの鎧の起動実験が成功をしたがライブ会場にノイズが発生をしてしまうという事件が発生をする中フィーネは起動したネフシユタンの鎧を盗んでいき迎撃をした錬金術師アグルは彼女を追い込むが相手は煙幕を利用して逃げてられてしまう。

パヴァリア総社本部のアダムの部屋

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『どうしたんだいアダム？』

リクはアークル内におり心の中から彼に声をかけている。アダムも最初は彼が消滅をしたと思っていたので声が聞こえたときは驚いてしまうが現在は慣れたので彼は考え事していることを彼に伝える。

「いやフィーネはネフシユタンの鎧を盗んでいったからね。それを止めれなかった僕たちの責任だなど思ってるね。」

『だけど君はライブの人々を逃がすために戦ったじゃないか。その結果誰も死ななかったのが一つだよ。』

「リク……そうだね。今は誰も死ななかつただけでも良かったと思わないとね？
待てよ……ファイネはネフシユタンの鎧を奪つただけで自身で装着をすること
はしない……ならばどうするか？」

彼はすぐに二課の弦十郎に連絡を取る。

『どうしたアダム殿？』

「やあ弦十郎君すまない。シンフォギア装者を選んだりしていることはあるのかい？」

『どうしてそれを？』

「話は後で、あるのだね？」

『ああもちろんだ。候補をしているものならいる。名前は雪音 クリスという少女だ。』
（やはり彼女か……狙うとした間違いない……）「弦十郎君、クリスは
狙われている可能性がある。彼女のフォニックゲイン値が高いのなら狙われている可
能性がある。僕たちは彼女を保護するよ。」

『なんだと!!わかつたこちらにも情報を提供をするさ。』

「感謝をするよ。」

通信が切れてアダムは出る準備をしているとウヴァ達がやってきた。

「どうしたアダム？」

「何を慌てているんだい？」

「丁度良かった．．．．君たちの力を貸してほしい。前に助けた雪音クリス君を覚えて
いるかい？」

「俺覚えている。クリス元気な子!!」

「ええもちろんよ?でもどうしてかしら?」

「彼女が狙われている可能性がある。フィーネにね?」

「そういうことか．．．．あのババア厄介なことをしやがる!!」

アंकが舌打ちをして彼らはクリスを探すことにした。彼らはそれぞれで探す為に
通信機を持ち街へと探索をする。

アダムはオーズドライバーを装着をしてメダルを装填してオースキャナーをスキヤ
ンさせる。

「変身!!」

【タカ!トラー!バッター!タ・ト・バタトバ!タ・ト・バ!!】

アダムはオーズへと変身をしてバッタレッグで一気上昇をしてビルの上に立ちタ
カヘッドの視力で街の中を探索をしていた。だがいくら万能のアダムでもこの中から
彼女を探すのは難しいのだ。

「やはりこの数の多きでは駄目か。次の場所に移動をしよう。」

バッタレッグの力を使い彼はビルの上を次々に飛んで行きそこからタカヘッドの能

力を使用して視力を高めていた。

「やはりだめか……ん？」

彼はあきらめようとしたとき追い駆けられている銀色の髪をした女性を見つけた。

「間違いない。黒服を着た男達が追いかけている……ファイネが指し向けた者たちか!!」

バツタレッグでその場所へと移動をしてそのままトラクローを展開をして彼女を襲い掛かろうとしていた黒服の人たちに攻撃をする。

「悪いけど彼女に手を出さないでもらおうか？」

クリス side

「はあ……はあ……はあ……」

私は全速力で走っていた。その理由は突然として学校帰りに黒服の人たちにさらわれかけたからだ。その時に奪ったペンダントと一緒に走っている。

「くそ銃を使え!!」

嘘だろ!!こんなところで銃を使うなんて!!

「助けて……助けて!!」

私は必死に声をあげると上から戦士が降りてきた。その姿はかつて私やパパとママを助けてくれた人たちで間違いない。

クリス side 終了

オーズは無事なのを確認をして黒服を着た人物たちはオーズの姿を見て銃をとりだした。

「ひい!!」

クリスは怯えているがオーズはトラックローを展開して構えている。黒服の人たちはトリガーを引き弾が発射されるが彼はタカヘッドの能力で弾が放たれるのを見て腕を振るった。

「どうしたんだい？君達が撃った弾は全部で……12発だね？」

トラックローに放たれた弾が回収されて彼は地面に落とした。黒服達はこれはまずいと思い逃げようとしたときノイズが現れて二人を炭化させた。

オーズはクリスを守るためにトラックローを展開させてノイズ達を切りつけて攻撃をする中クリスは突然として聖詠を言う。

「Killter Ichhavitron」

「え？」

彼は振り返ると赤いアーマーを装着をしたクリスが立っていた。

「なんだこれええええええええええ!!」

アダム side

まさかイチイバルの欠片のペンダントだったのか？とりあえず彼女は装着をしてしまった以上僕は彼女を守るために奮闘をするしかない。

ノイズは次々に襲い掛かるがそこに雷などが発生をして僕は上空を見る。

『やお待たせオーズ。』

「カザリたちかまっていたよ。」

『ちいまさかノイズどもがいるとはな。』

『まあそんなの俺達には関係ないけどな。』

『俺戦う!!うおおおおおおおおお!!』

ガメルは突撃をしていきその剛腕でノイズ達を殴り飛ばしていく。クリスはどうしたらいいのかわからない状態だった。

「落ちていて武器を想像をするんだいいね？」

「武器……あいつらが使っていたような武器を!!」

すると彼女の手にはガトリングが現れてノイズに向かって発射される。いやーイチイバルは射撃系だからすごいなー僕はそう思いながらメダルを変える。

【クワガター！クジャク！チーター！】

ガタジャーターへと変身をして左手に現れたタジャスピナーから炎の弾を飛ばしてから頭部のクワガターヘッドに雷を集めてそれを発射させて高速移動で翻弄させる。

「くらえ!! あたしの特大の弾だ!!」

彼女は腰部を展開させて小型ミサイルを発射させてノイズ達を撃破した。僕はあれで初心者だっけ?と思うぐらいに彼女戦闘強くね?

「.....」

僕は冷静にメダルをタトバコンボのメダルに戻して彼らが来るのを待つことにした。数分後彼女達が到着をしたので僕たちは撤退をしようとした。

「待って!!」

声があったので振り返るとクリスが僕の方を見ていた。なんでか涙目になっているのが気になったが一体どうしたんだろうか?

「やっと会えた.....あの時私やパパとママを助けてくれたメダルの戦士.....私はずっとお礼が言いたかった.....私がお礼を言う前にあなたは姿を消してしまったから言えなかった.....あの時はありがとうございました!!あなたがいなかったら私はパパとママを失っていた。だから.....だから!!」

僕はその言葉を聞きながらアंकたちと共に転移石を割り総社の方へと戻っていく。「ありがとう.....か。」

僕は変身を解除をした後クリスが言った言葉に複雑な気持ちになっていた。それは僕は本来だったら彼女達の敵として戦う運命なのにお礼を言われたからだ。

本来のアダムはシンフォギアA X Zでラスボスとして戦って死ぬ運命の人物だ。けどその結果を僕という憑依転生をしてしまった結果が原作ブレイクを多数起こしてしまっている。

「まあ考えたってしようがないか……とりあえずお風呂に入って気分すつきりするでしょう……」

僕はお風呂に入るために扉を開けた。

「あ……」

「え？」

そこにはパンツを脱いでいたジャンヌちゃんがいた。僕は出ようとしたが彼女に手をつかまれる。

「ジャ、ジャンヌちゃん!？」

「いいよ……おじさまなら見せても……一緒に入る？」

「ええええええええええ!!」

アダム side 終了

アダムは驚きながらも脱いでいき、ジャンヌと共にお風呂に入ることにした。アダムは彼女の方を見る胸の方はだいぶ大きくなり響ぐらいの大きさになっていることに……. けれどなぜ彼女が自分と一緒に風呂に入ると言ったのが不思議だなど

思いながら体を洗ってからお風呂に入る。

「ふう……いい湯ですねおじさま。」

「あ、ああ……」

アダムはジャンヌの体を見ないようにしていたが、先ほどのお風呂に入る前に見てしまったので脳に記憶をしてしまった。

（うーむサンちゃんもそうだけどジャンヌちゃんも胸が大きくなっているんだよね……こうして僕と一緒にお風呂に入るなんて……ね？）

アダムは考えながらもお風呂で疲れていた体が休まっている感じがした。

「ふう……」

「おじさまお疲れですか？」

「まあね……ジャンヌちゃんも幹部として色々大変じゃないかな？」

「確かに色々大変ですけどおじさまから学んだ錬金術やサンジェルマンさん達が教えてくれますので助かっていますよ。」

「そうか……ならよかったよ。」

彼は上を見ながらこれからのことを考えることにした。

一方でフィーネの屋敷

「くそ!!アダム・ヴァイスハウプト!!よくも私の計画を潰してくれたな!!クリスをさら

いネフシユタンの鎧のデータをとりつもりが奴のせいで失敗に終わってしまったではないか!!おのれおのれおのれええええええええええええええええええええええ!!」

彼女は計画をかなり狂わされて怒り心頭であった。本来の原作ならクリスをさらってネフシユタンの鎧のデータを集めることができたのだがこの小説ではアダムがその前に動いてクリスを助けたので失敗に終わったのだ。

「だがまあいい、私にはまだクローン技術というのを残している。これで雪音 クリスのクローンを作ればいいだけだ。ふっはっはっはっはっはっはっはっはっは!!」

フィーネは笑いながらいつもまにか撮取をしていたクリスの細胞を使いクローンを作ることにした。

アダムの休み

アダム side

僕は今暇をしていた……その理由はサンちゃんたちに仕事を休むようにといわれてしまったからだ。パヴァリア総社を作ってから僕はどうやらあんまり休んでいないようでほかのみんなもかなり心配をしていたようでサンちゃんが今日はお休みしてくださいといわれたのでどうしようかと悩んでいた。

『ならアダム、君が助けたあの子のところへ行ったらどうだい?』

「響ちゃんのことか……そうだね行ってみるとしよう。」

僕はリクの言葉を聞き彼女が入院をしている病院へと向かうことにした。病院のことをなんで知っているかって?僕は天才なアダムだからね調べておいたのさ!!

それから数分後僕は到着をして彼女の知り合いといい案内をしてもらおうとそこではリハビリをしている響ちゃんがいた。

「頑張っているね響ちゃん。」

「うえ!!?アダムさん!!うわわわわわ!!」

「おっと。危なかったね……」

「ふええええええだだだ大丈夫ですよ!!」

なんか顔が赤い気がするが風邪を引いているのかな? とりあえず僕は彼女を抱えていたので座らせる。

「す、すみません……」

「気にしないでくれ、あとこれは僕からお土産だよ。」

僕は途中で買い物をして果物セットを買ってあげた。まあリクからもそれがいいたいわたので彼女はじゅるりとよだれを垂らしているのを見て僕は笑ってしまう。

「あ、すみません……」

「気にしないで、とりあえず君を病室まで送るよ。」

「ありがとうございます。」

響ちゃんを連れて僕は彼女が入院をしている病室へとやってきた。どうやらお客がいたみたいだね?

「あ、響大丈夫?」

「未来ごめん来ていたの?」

「さつきね。あの……あなたは?」

「あー僕はアダム・ヴァイスハウプトっていうものだ。まあ彼女とはライブ会場ですね……」

「そ、そうですね．．．．．私は小日向 未来といいます。」

（一瞬だけ動揺をした．．．．．彼女はもしかして．．．．．）

僕は未来ちゃんと話をしたいといい響ちゃんは病室で待機をするようにといって僕は彼女を連れて屋上の方へと向かっていく。

アダム side 終了

未来 side

アダムさんに連れられて私は病院の屋上に来た。いったいどうしたんだろう？

「さてここでもいいかな？ 未来ちゃん．．．．．君は後悔をしているじゃないかな？」

「え？」

アダムさんに言われて動揺が走ってしまう。なんでばれたか。

「簡単だったよ。僕がライブ会場と行ったとき君は動揺をしていた。それは事実だね？」

それも響ちゃんが入院をしよう重傷をおったと聞いて君はあの時私も一緒に行けばよかったと．．．．．」

「．．．．．そうですね。響を誘ったのは私なのに用事でこれなくなって．．．．．それで新聞で知って病院に駆けつけてそれで．．．．．それで!!」

するとアダムさんは私を抱きしめていた。

「そうか．．．．．辛かったんだね君も．．．．．今は泣いてもいい．．．．．」

「う、うわああああああああああああああああああああああああああああ!!」

私は泣いた、アダムさんの胸の中で……辛かったことなどを話しながら。

未来 side 終了

数分後

「す、すみません……」

「気にしないでくれ……あ、ごめんね?」

彼は連絡が来たので通信を取りわかりましたとい通話を切る。

「ごめんね未来ちゃん、今日は用事で帰らないと行けなくなつたんだ。響ちゃんのこと
は任せるよ?」

「えつとアダムさん!!」

「なんだい?」

「ありがとうございます!!」

「気にしないでくれじゃあね?」

彼は階段を降りると見せかけて錬金術を発動させて分身を作り本体は屋上の後ろ
に回りこんでおり腰にアークルを発動させる。

「……変身!!」

直接クウガ ドラゴンフォームへと変身をしてビルの上を飛んで行く。分身は数分

後消滅をした。

クウガは飛びまわりながら現場の方へ到着をして長い棒を拾ってドラゴンロッドへと変えて地面に降りたちロッドを振り回してノイズ達に当てて爆散させる。

「アダムさん!!」

「待たせたね……ん?」

彼は電撃の力がバチバチと体中にめぐっていくのを感じた。リクの方は驚いている。

『なんだいこれは?アルティメットフォームとは違うものだけど……』

「……ふふなーに見ればわかるさ。超変身!!」

ドラゴンフォームのアークルに金色の装着されていきドラゴンロッドも姿が変わっていく。クウガライジングドラゴンフォームに変身をする。

(しかも時間無制限な感じがするね……まあアルティメットフォームになれるから当然かな?)

翼と奏はクウガのボディに金色がついたので驚いている中、クウガは走っていきライジングドラゴンロッドを振り回してノイズ達に当てた後姿が変わる。

「超変身!!」

緑のクウガライジングペガサスフォームへと変わりライジングドラゴンロッドもライジングペガサスボウガンへと姿を変えて後ろの引っ張ってトリガーを引き連続した

弾が放たれてノイズ達を次々に撃破していく。

「すごい……………」

「ええ……………」

二人はクウガの戦いを見てすごいと思っていた。さらにライジングベガサスフォームの色が紫になりライジンググタイタンフォームへと変身をした。

彼はライジンググタイタンソードを振り回して彼女たちのところへ行くと翼のアームドギアを奪った。

「え?」

「借りるよ!!」

するとアームドギアがライジンググタイタンソードに姿を変えて二刀流で切っていく。そのまま剣を振り回してノイズを次々に倒していき。

「超変身!!」

ライジンググマイティフォームへとなりとどめを刺そうとしたが……………止めた。「どうしたんですか?」

「……………忘れていた。この姿ではマイティキックを使ったらおそろくかなりの被害が出てしまう。」

「まじかよ!!」

「本当ですか？」

「ああだからライジンググマイティキックは使えない……とりあえず殴る!!」

彼は殴りに行きノイズ達を倒していく、翼たちもアームドギアを構えてノイズたちを撃破していく最後は奏の槍が突き刺さって撃破した。

「作戦終了!!」

「そういえばアダムさん。」

「なんだい？」

「実は私たちにも新しい仲間が増えたんです。名前は雪音 クリス。なんでか知りませんが10年前盗まれたイチイバルを持っていたのですよ。」

「……あーそれは助けたのは僕なんだよ。彼女が追い駆けられているところを僕が助けたのはいけどノイズが現れてね。するとあら不思議なことが起きたんだよ。イチイバルを纏ったクリスちゃんが見れたってことだ。」

「なるほどな……けど黒服なんてあたしたちのところにもいるけど襲ったのか?」「それはないと思いたいけど……とりあえずおじさまに報告はしましょう。ありがとうございますアダムさん。」

「気にすることはないよ、僕たちは仲間じゃないか……とりあえず僕は帰るよ。」

彼はそういつて変身を解除をして歩くことにした。

アダム side

僕は彼女たちと別れてから考え事をしながら歩いてきた。おそらく二年後に動きだすと思いたい。

だがこの世界は僕というイレギュラーのせいではほとんどが原作崩壊をしている。サンちゃんたちがいい例だ。

「……とりあえずフィーネの野望を食い止めないとね……君が思っている主さまは君を捨てたのにはある敵と戦ったからだよね……シエムハという……だが奴は一体どこにいるのか僕にも見当がつかない……」

僕はこれからの敵のことを考える。今はフィーネが先決だね……それからはどうするかと考えていくしかない。それともマリアちゃんたちが敵として現れる可能性はあるかな？

フロンティア事件を起こさせるべきか……それとも僕は敵として立つべきなのか？ いやそれはないな……おそらく僕は彼女達とは戦えない……それほど彼女達と一緒にいるのが長いのでいいのかな……

「はあ……」

『アダム……さつきからため息だね。』

「まあ色々あるんだよ僕の方も……ね？」

『まあ僕は聞かないことにしておくよ。』

「ありがとうリク。」

僕はパヴァリア総社へと帰ってきた。

「ただいまー。」

「おかえりなさいおじさま。」

「おやジャンヌちゃんも今おかえりかい？」

「ええ例の取引先をぶっ潰してきたところ、やっぱりおじさまの言う通り奴らは麻薬を取引をしていたわ。」

「ご苦労だね。やはりマークをして正解だったね……ほかには何か情報を得れたかい？」

「いや残念ながら答えはNOだ。」

「アグル君も一緒だったのかご苦労様。」

「照れる……。」

アグル君は男の娘としていけるじゃないかな？容姿的にも……とまあそんなことは置いといて僕たちは幹部たちが集まる部屋に入る。

そこにはサンちゃんを始めメンバーたちが集まっていた。

「おじ……じゃなかった局長……。」

「やあご苦労さま、やはりあそこは麻薬取引をしていたみたいだね。先ほどジャンヌちゃんとかアグル君から話はきいた。これも皆のおかげだありがとう。」

「局長わざわざ頭を下げないでください。」

「そうです!! 私たちを地獄から救ってくれた局長のためです!!」

「……………ありがとう。」

「全くアダム局長はすぐに頭を下げるわいがっはっはっは!!」

レイジンは笑いながら言っておりほかの幹部たちも笑っていた。

さてここで紹介をしておくかな?

カテリアは僕の秘書官を務めており幹部の一人だ。得意なのは銃を使った攻撃で錬金術を応用した弾丸を使用をする。

レヴェリアは二刀流を使った攻撃が得意で主な錬金術は炎と氷を使っている。それをファウストローブは武将達が来ている鎧みたいな形になっている。

レイジンはその名の通り雷を使った錬金術が得意でその剛腕から振るわれる斧が強力である。

アグル君は前回は紹介をしたが水の力を使って戦う戦士だ。

「……………」

「どうしたワケダ?」

「何でもないよプレラーティ、何か聖遺物の情報でも得たのかい？」

「いいやそれに関しては何にもないワケダ。オートスコアラータちに当たらせているが……結果は無しだ。」

「そうかい、だが彼女達にも休ませてあげたまえいいね？」

「わかっているワケダ。」

プレラーティにはほかに聖遺物があるかわからないので調査をお願いしているがヒットはしていないみたいだ。彼女の研究心が燃えている気がしてたまらないね……

「さてとりあえず今回の麻薬事件は解決をしたからね、さて最近ノイズの数が増えている気がするのには気のせいだろうか？」

「局長、確かに最近はノイズの数が増えているのは事実ですな。」

「そーねーあーしもそう思うわ。まるであーしたちの力を試しているかのようにね。」

「……ちいあのババア……」

「局長どうしたのですか？」

「何でもないよキャロルちゃん……（くそフイーネめ……おそらくソロモンの杖を起動させることに成功をしたのか!?だが変だ……クリスちゃんは二課で保護をされているから杖を起動させることは不可能のはずだ……」

くそ!!全然わからないな……」

僕は考え事をしているが正解が導かれない……やはり二年後を待つしかないのか?とりあえず会議は解散をして僕は専用の部屋である局長室へと入る。

「おかえりなさいませマスター。」

「ただいまテイキ、サナエ、アイカ、レイ……ふう」

「どうしたのマスター?何かお疲れだよーレイの胸もむ?」

「ありがとう……. だけど大丈夫だよレイ。」

「. . . マスターにならなくてもいいのに…….」

ボソリといっているが聞こえているよレイちゃん。

「抜け駆けは許しませんよレイ。」

「そうよレイ!!」

「そうっす!!アイカの胸ならいつでもいいっすよ!!」

「. ふふ。」

僕は彼女達の喧嘩を見てふふと笑ってしまう。だがそれでも先ほどよりはスッキリをしている。

「ありがとう四人とも。」

「えへへへへ。」

「どういたしまして。」

「私たちはマスターの命令に従う人形ですから。」

「そうっすよ!!」

「それは違うよテイキ、君達は人形じゃないさ……………」

「マスター……………」

（いずれにしてもファイネがソロモンの杖を起動させたことは間違いないとみていいだろう……………なら僕がすることは彼女達と連携をして戦うことだ。）

僕は眩きながら決意を固めるのであった。

覚醒の時

アダムが響と出会って二年がたった。彼は今もノイズを倒す為に二課と協力をして倒していた。

「スキヤニングチャージ!!」

「せいやああああああああ!!」

オーズタトバコンボのタトバキックが発動をして上空へとびノイズ達を吹き飛ばした。そのそばをミサイルが飛んで行きオーズめがけて走っていたノイズに命中をした。

「ナイスだよクリスマス君!!」

オーズは後ろを振り返ると赤いギアイチバルを装着をしたクリスマスが腰部のミサイルポットから小型ミサイルを発射させてアダムに向かっていたノイズ達を撃破した。

『あらあらお疲れ様ね。』

そこにメズールとガメルが現れる。なお彼女達がグリードという怪物つてことは知られておりクリスマスたちは最初は驚いていたが二年も共に戦っているため慣れてきた。

「メズールさんにガメル。」

「やあ二人ともノイズは倒したのかい？」

「もちろん。俺頑張った!!」

「そうかよく頑張ったねガメル。」

オーズはガメルの頭を撫でて彼は照れていた、その様子をクリスは見ている羨ましいと思った。

「あらあらねえアダム、クリスちゃんにも助けてもらったんだから撫でてあげたら?」

「ちよ!!」

メズールの言葉にクリスは慌てているが彼はそうだねといいクリスに近づいて彼女の銀色の髪を撫でている。

「ありがとうクリス、君がいなかったら僕がやられていたね。」

「……………(グ、U、グ)ゞ」

そして二課のメンバーが後処理をしている中アダムは変身を解除をして緒川と話をしていた。

「ではノイズは何者かが?」

「ああ弦十郎君はおそらく二課の誰かがやっている可能性があるといっていてね。僕もその通りじゃないかなと思ってきたんだ。あの時盗まれたネフシユタンの鎧……………さらに10年前に盗まれたはずのイチイバルがクリスちゃんが持っていたことなど……………それを含めてもね。」

「そうですね．．．．それとアダムさん、翼さんが最近あなたと話をしていないとブツブツ言い始めまして．．．．」

「あははははすまないね、僕も忙しい身だからね。奏ちゃんと翼ちゃんのCDなどは買ったたりするけどね（笑）」

彼はツヴァイウイングのCDを買ったりしているファンの一人で響とはツヴァイウイング同盟を組んでいるほどである。

あれ？どうして響の名前が出てきたのかというと彼女がリハビリが終えてからも交流を続けておりそこからツヴァイウイングの話となりそれから彼女とは同士とお互いに手を組むほどである。

アダムは緒川と少しだけお話をした後にガメルたちを連れて総社へと戻っていく。転移石を割り魔法陣が発生をして彼らは戻ってきた。

「お帰りのワケダアダム。」

「ああプレラーティありがとう。それから何かあったかい？」

彼女は首を横に振ったので彼はそうかいといい両手を組んでいた。二年間で発生をしたノイズの数が増えてきていることに加えて彼自身も探しているがまだ見つからないのだ。

（やはりシエムハの遺体などは簡単に見つかったりしないか．．．．いずれにしても

あれは厄介な存在だからね……」

「アダムは考えながらも局長室へと戻っていき疲れているとサンジェルマンが入ってきた。」

「失礼します局長。」

「やあサンちゃんどうしたんだい？」

「局長が戻ってきたと聞きましたそれでやってきました。」

「はははそういうことか、なら今の僕は局長じゃなくてただのアダムおじさんになるね(笑)」

「もうおじさまだったら……しかし最近はノイズの数が増えて来ましたね。」

「ああそれは僕も思っていたところだよ。敵の数は僕が予想をした以上になってきているね。あるところでは完全聖遺物の研究をしているところがあつたりしているから油断ができない。」

「わかっています。聖遺物はきちんとした方法で使わないと危険なもの……それを回収するのが私たちの使命でもあります。」

「そのとおりだ。さて僕はお風呂に入るとするかな。」

「アダムはお風呂場に移動をするがサンジェルマンも一緒にいる。」

「あれ？」

「その……わたしもよろしいですか？」

「……まあいいけど。」

彼女は服を脱ぎだして大きなものが出てきた。彼はそれを見ないように脱いでいき二人でお風呂に入っていく。

「いい湯ですねおじさま。」

「ああ……」

「どうしたのですか？」

「ちよつとだけね考え事をしていただけだよ。僕たちは随分長い生きをしてきたなと思つてね。この日本だつて前に来た時よりも発展をして驚いているぐらいだよ。」

「おじさま日本に来たことがあつたのですか？」

「といつても古代時代になるけどね……。そこで僕は親友と呼べる男と出会つている……。だけど彼はもういない……。でも彼は僕の中で生きていると信じている。」

『アダム……』

「おじさまが言つていたリクさんって人ですか……。どういふ人なんですか？」

「……。リクは本当は戦いなど好きじゃない男だつた。彼はこういつていた戦いは憎しみを生むものだから僕は戦うだけにクウガの力を使いたくないとね……」

の力は妹や仲間を守るための力だと言っていたのを思いだすよ……だからこそリクは大いなる闇に勝てたんだと思っっている。」

（それは違うよアダム、確かに僕は戦いは嫌いだよ？最初は戸惑ったよ……この力で次々に襲い掛かる怪物に僕は疲労などがたまっていた……いつまで一人で戦い続けるのかって……でもそこに現れたのは君たちだった。アダムたちの協力がなかったら僕はおそらく逃げだしていたかもしれない。感謝するのはこつちだよアダム。）

リクはアークル内で彼に感謝をしながら力を貸そうと決意を固めるのであった。

「……サンちゃんは今も後悔をしていないのかい？僕についてきてお母さんと永遠の別れをしてきたじゃないか……」

「……いいえ私はおじさまについていくことに後悔など一度もありません。鍊金術やカリオストロやプレラーティたちとの出会いなど私にとっても長い歴史をおじ様たちと廻れたので満足しております。母のことは……永遠に忘れません。アダムおじさまがリクさんの魂が心の中で生きてるように私の心の中に母は生きております。だから後悔などありませんよ。」

「サンちゃん……そうだったね。」

二人はお風呂で色々話をした後は各自の部屋へと戻っていく、部屋へと

戻ったアダムは錬金術で作った電話機を出して電話をする。

「やあ弦十郎君僕だよ。」

『アダムかどうした？』

「なにそちらの状況は進んでいるかなと思ってね。」

『……こちらも間抜けではないから……ある人物を怪しんでいるところだ。』

「その人物は僕もあつたことがある人物で間違いないか？」

『……なら答えを合わせてみるか？』

「いいだろうせーの」

『『櫻井 了子（君）』』

二人は同時に答えたのでふふふとお互いに笑っていた。

「やはり君も彼女が怪しいと見ているわけだ。」

『ああだが確実とは言えないからな、もう少しだけ泳がせてみる。』

「わかつたよ。何かあつたら協力をさせてもらおうよ。」

『感謝をする。』

「すまないねではお休み。」

『ああ……』

アダムは電話を切り布団の中に入り眠ることにした。

アダム side

次の日僕は外に出ていた。そばにはティキが一緒に車で移動をしていたところ木が動いているのが見えた。

僕たちは車を止めて降りてその木のそばへとやってきた。

「マスター上に生命反応が二名確認できます。」

「了解だ。」

下の方でスタンバイをしていると上から女の子が落ちてきたので僕はキャッチをした。その髪など見たことがあり僕は名前を出す。

「響ちゃんじゃないか。」

「アダムさん!?!はわわわわわわ!!」

彼女は顔を真っ赤にしているが一体どうしたのだろうか? ティキの方は頬を膨らませてしているし……とりあえず僕は彼女をゆっくり降ろして話をすることにした。

「響ちゃんとりあえずなんで木の上にいたのだい?」

「えつとですね。『にゃー』あららら。」

なーるほどね、猫を助けるために彼女は木に登って助けようとしたのか、だが彼女は制服を着ているけど……時計を見て僕は苦笑いをする。

「響ちゃん時間は大丈夫かい？」

「……ああああああああああああああああああああああああああああああ!! どうしようううううううううううう!!」

「仕方がないテキキ。悪いけど車をリディアン音楽学園に向かってくれないか？」

「了解しました。」

「えつとなんかすみません。」

「気にすることはないよ。」

響ちゃんを無事に学校まで送った僕たちは学校を離れて移動をする。さて今日はツヴァイウイングの新曲の発売日でもあるからね。予約をしたお店に向かっていた。

彼女達は一時的に休止をしてからの発売になるので僕としては楽しみなんだよね？

「すまない予約をしていたアダムですが。」

「はいはいアダムさんいらっしやい!!いつものだよね？」

この人はマスター、僕がいつも予約をしているショップ屋の店長である。最初のころからの付き合いでいつもこうして予約をしたCDを買っている。

「ふふーん」

「好きだねアダム君。」

「まあね。」

僕はCDをもらって車に戻って車を走らせていると誰かが逃げているのが見えた。

「響ちゃん？追いかけているのはノイズ!？」

僕はいそいでテイキに車を止めてもらいオーズドライバーを装着をして変身をする。

「変身!!」

【シャチ!ウナギ!タコ!シャシャシャウター!シャシャシャウター!】

シャウタコンボへと変身をして液体状となり僕は彼女たちのところへと急ぐ。

アダムside終了

現在響は女の子を連れて逃げていた。彼女はツヴァイウイングの最新曲を買いに行くときにノイズが現れて泣いている女の子がいたので一緒に救助をしたのだ。だがノイズ達はそれでも彼女たちを追いかけており現在追い込まれていた。

「お、お姉ちゃん……私たち死んじゃうのかな?」

「大丈夫大丈夫……そう最後まで生きなきゃ……そうあの時の奏さんのように!!なに?歌が聞こえる……Billwisyall Nescell gungnir tron」

響の制服が敗れていきインナースーツが創成され装着されて行き最後はヘッドギアが装備されて彼女は着地をした。

目を開けた彼女は一言。

「なにこれええええええええええええええええええええええ!!」

「お姉ちゃんかつこいい!!」

響に装備されているのはガングニール、奏が装着をしているのと一緒の物だ。ノイズ達は響に襲い掛かってきた。

「うわわわわわ!!」

響は殴るとノイズが炭化していきだが彼女は一般人である。襲い掛かるノイズに苦戦をしていると。

【スキヤニングチャージ!!】

「せいやああああああああああああああ!!」

そこにオーズシャウタコンボの必殺技オクトパニッシャーが命中をしてノイズ達が粉碎されていく。

「え?」

「仮面………ライダー?」

オーズはちらつと彼女たちの方を見てから振り返りメダルを変えてオースキヤナーをスキヤンさせる。

【タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バタトバタ・ト・バ!】

タトバコンボへと戻り地面からメダガブリューを抜いてノイズ達を切り裂いていく。

「すごい……」

すると上空からミサイルが飛んできてノイズ達に命中をして三人が着地をした。

「ええええええええええええ！奏さん!!翼さん!!クリス先輩!？」

「あ、響じゃん。」

「あーあたしのせいか……」

「二人とも今はオーズの援護を!!あなたはその子を守っていて!!」

「えつとはい。」

一方でオーズはメダガブリューにセルメダルをセットをしてバズーカモードにしている。一応ファイナルステージでタトバコンボで使おうとされていたが暴走をしたという結末に（笑）

【タ・ト・バーの必殺!!】

「は!!」

トリガーを引き赤と黄色と緑のオーズランクが発生をして砲撃が命中をして撃破した。オーズは振り返るとノイズ達の数が多くて翼たちも苦戦をしていた。

「仕方がない。四人とも離れろ!!」

オーズは右手に火の錬金術を発動させてそれをノイズ達に投げつける。その火球がノイズたちに命中をして燃えていった。

だがオーズ自身は膝をついてしまう。確かに錬金術は使うことが可能だが彼の姿を維持をするためにはあまり大きく錬金術を使うわけにはいかないのだ。

「「アダムさん!!」」

「え?!アダムさん!!」

三人がオーズのところへ走ってきたが彼は左手を前に出す。

「大丈夫だ。」

彼は立ちあがり変身を解除をした。先ほどの疲れはなくなったが……おそろしく原因は自分自身わかっている。

(やはり僕自身のメンテナンスが必要になってきている。テイキたちの調整などは僕がしているが……. だけど僕自身の体はほかのみんなとは違うからね…….) アダムは一度目を閉じてから自身の体の調整が必要だなど考えるのであった。

アダム再び月に

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

朝早くアダムは誰もいないのを確認をして転移石を持っていた。その理由は彼の体のメンテナンスのことだ。

知っている人もいればそうだが彼の体はテイキたちのような体とはかなりの構造などが違うため彼は今までは簡単なメンテナンスだけで終わらせていたのだ。だが彼自身もこの頃調子が悪いなと思いつつも彼らの前でその姿をさらしていない。

彼は両手を動かしながらも辺りを見ながら転移石を割りある場所へとやってきた。そこは地球より離れた場所であり彼が生み出された場所だ。

「もう二度とここには戻ってこないつもりだったが・・・・・・・・まさかメンテナンスだけで戻ってくることになるなんてね・・・・・・・・」

『「ここがアダムが生み出された場所なのかい？」』

「ああそのとおりだリク、僕が生まれた場所でもある・・・・・・・・さて扉がしまっているな・・・・・・・・まだ使えるならいいが・・・・・・・・ナンバーズZX001コードネームアダム・ヴァイスハウプト。」

【アダム・ヴァイスハウプト承認確認。】

しまつていた扉が開いて彼は中へと入っていき辺りを見ている。

「妙だ……生命反応がない感じがする……」

彼は歩きながら警戒をしていき突然として何かが接近をしてきたあまりの速さにアダム自身は構えることができない。

(速い!!)

「アダム?」

「え?」

彼は振り返るとそこには金髪の女性が立っていたが彼のメモリーにそんな人物はいない。

「誰だい君は……それにその体は……人間?」

「ああそういうこと、私はこのメインコンピューターですよ?」

「は?」

彼はメインコンピューターがなぜ人の体をもっているだろうかと思っていると彼女は近づいてきた。

「回路などが焼き切れているのと各部関節部分に異常があるわね。なるほどあなたがここにやってきた理由はわかったわ。これは本格的なメンテナンスが必要になるわ

ね……ほらはやくはやく。」

彼女は彼の手を握りメンテナンスルームへとやってきた。アダムはここで生み出されたなと思いながら眠らされる。

「さてとりあえずアダム、あなたの回路を一度落とすわね？」

「ああわかつていると思うがメモリーを消去などしたら君を潰すよ？」

「わかつているわよそんなこと私はしないわよ。とりあえず一旦お休み。」

彼女に回路を切られてアダムは機能を停止をした。彼女はさてつといい彼の体を調べている。

「彼の体は人とだいたい同じように作られているから男性としての機能はもちろん一部分を機械類にしているからね。例えば人造人間……みたいな感じね。さてつとうわ……よく数百年以上稼働ができたわ。まあ彼自身が誰にも正体を明かしてない感じね……とりあえず自分ができる範囲でのメンテナンスをしている感じ。一度パーツなどを取り換えておかないとね。ついでに出力なども上げておいてつと……」

メインコンピューターであるコードレイはアダムの体を色々といじっていく、彼の調整などでもしておりついでに彼のメンテナンスを行えるように新たなものを作ったりと色々彼女が改造をしていくのであった。

アダム side

「さあ目を覚ましてアダム。」

声を聞いて僕は目を開ける。そこには金髪の女性がいたがメインコンピュータのレイだとわかる。僕はメンテナンススベツトから起き上がり指などを動かしていた。というよりも何か知らないが力がかなりみなぎっているのはなぜだろうか？

「何か僕の体にしたのかい？何か知らないが今まで以上の力を感じるだけど？」

「あーそれは簡単よ。あなたの体の調整をしたときにバージョンアップをしているのよ。これでああなたが錬金術を使っても気にしないで済むようにね。」

なるほどね。これならバンバンと錬金術を使うことができる。前はそれを気にしながら錬金術を使っているからこれならいいか？それと気になったけどその後ろの物は何でしょうか？

「あーこれ？ここまで戻ってくるのめんどくさいでしょ？だからあなたの体のメンテナンスができるようにと作っておいたのよ。それと私もついていくからよろしく。」

「はあ!?!ここはどうなるんだい？ここは創成主がいただろう。」

「主ならもういないよ？随分前に亡くなったから。私はずっとここで一人で過ごしていたのよ……そこで廃棄処分をしていた体たちを使って体のフレームを完成させたというわけ。」

なるほど、それで彼女はこの中を自由に動いているわけか、まあここは彼女一人しかないってこともあるからね。

さて僕たちはこのデータなどを回収をして転移石を使って転移をした。

「おかえりなさいおじさま。」

「やあサンちゃんにカリオストロにプレラーティじゃないかお疲れ様。」

「まああーしたちは簡単に事を済ませるからね。」

「それでアダム、その後ろの女は誰なワケダ？」

プレラーティに指摘されて僕は後ろの彼女をどう紹介をしようか迷っていた。どういったらわかりやすいかなつと……

「私はメインコンピュータレイと申します。」

お辞儀をして挨拶をしたのでまあ適当な説明をして彼女はチフォートシャドーのメインコンピュータにアクセスをしていた。

「マスターよろしいですか？」

「気にするなティキ。」

ティキがレイのことをじーつと見ているが僕は気にしないでといい、弦十郎くと連絡を取ることにした。

「やあ弦十郎君、そのあとのことを見聞きたくて連絡をさせてもらったよ。」

『ああアダム、響君は君の言う通りに仲間として加わることになった。現在は俺や奏を中心に彼女を鍛えているところだ。』

「そうか、彼女が加われれば今まで三人でまわしているところも楽になるからね。だけど弦十郎君彼女は一般人だったからね。それはクリス君とかも言えないけどね。」

『ああわかつている。』

「とりあえずまた何かあつたら連絡をくれないかい？すぐに駆けつけるさ。」

『ああよろしく頼む。』

お互いに通信を切り、原作みたいに進んでいるみたいだね……だが問題はネフシユタンの鎧などはどうなるのだろうか？ソロモンの杖を起動させるには原作ではクリスが起動させているからね……なら今回はどうなるのか……僕は気になりながらも眠ることにした。

襲い掛かるネフシユタンの鎧を着た人物。

アダム side

響君が仲間になつてから数日が立つた。彼女は戦いに苦戦をしながらも苦勞をしていたが僕もクウガやオーズに変身をして彼女達を援護をするためにサンちゃんたちとも会合をしておりこちらからはサンちゃんやカリオストロ、プレラーティにアグル君にカテリア、レヴェリアにレイジンにキャロルちゃんたちを手伝わせている。

ほかにもティキやサナエたちも彼女たちと共にノイズを倒す為に奮闘をしている。さて今日は流れ星が現れるといっていたが……僕の目の前にはノイズがたくさん現れていた。

「さてなら……」

僕は変身をする決意を固めるとアークルが現れて僕はポーズを取り左腰のスイッチを押す。

「変身!!」

赤い装甲が纏われて行き僕はクウガへと姿を変える。剛腕でノイズ達に封印エネルギーを纏わせて爆散させる。うじゃうじゃと数が増えていくが突然として上空から何

かが放たれて僕は何かと思つてみると響ちゃんもガングニールを纏つて空から降つてきたから驚いている。

「ひ、響ちゃん？」

「……………つかく。」

「ん？」

「せつかく未来と流れ星を見ようとしていたのに!! あんたたちのせいでええええええええええええええええええええええ!!」

「……………」

彼女は勢いよくノイズ達を殴つていき撃破していく、怒りのままに攻撃をしているので僕は唾然として彼女を見ていた。

『なんていうか今の彼女は暴走特急だね?』

「ああまさに……………危ない!! 超変身!!」

響ちゃんに何かが狙っているのが見えたので僕はタイタンフォームへと変身をして彼女に放たれた攻撃を受け止めた。

「アダムさん!!」

「大丈夫だ!!」

タイタンフォームのボディを貫こうとした鞭が戻つていき僕は鍊金術で剣を出して

それがモーフィングされてタイタンソードへと姿を変えた。

「さて何者だい？彼女を狙った敵かな？」

タイタンソードをつきつけて煙がはれるとそこに立っていたのは白い鎧を着ていた少女だ。だがその姿を僕は知っていた。

「雪音……クリス？」

『どうしてクリスちゃんか?!』

「へえーあんたがフィーネが言っていたアダムって奴か……。まあいいあたしの目的はそいつだ!!」

「狙いは響ちゃんか!!」

僕はタイタンソードで彼女が放つ鞭を切っていく、彼女もほほーといい何かを手に持って指示を出している。

「出て来やがれノイズども!!」

「なに?!」

あの杖からの影響かノイズ達が現れた、いくら僕でもこの数を一人で戦うのはまずい……。ただオーズに変身をする隙がない。

僕は超変身をしてドラゴンフォームへと変わりドラゴンロッドを振り回してノイズたちに攻撃をしているとミサイルなどが飛んできた。

僕は回避をしてミサイルがノイズ達に命中をするとクリスちゃんが到着をした。

「アダムおじさん大丈夫!!」

「ありがとうクリスちゃん。」

「来たかオリジナル!!」

「え?」

クリスちゃんは驚いている中翼ちゃんや奏ちゃんたちも到着をして驚いている。あれはネフシユタンの鎧だとわかっている。そこにリキテイダーが飛んできて僕の周りにアグル達が現れる。

「アダム大丈夫?」

「ありがとうアグル君。」

ネフシユタンの鎧を着ているクリスちゃんそっくりな子はこちらの人数が増えていゝるのに舌打ちをしていた。

「まさかここまでそろうことになるとは思ってもいなかったぜ。だが!!」

彼女は肩部の鞭を振り回してエネルギーの刃を発生させてこちらに投げつけてきた。全員が散開をして僕はマイティフォームへと変身をして彼女に攻撃をする。

「君はいつたい何者なんだい?」

「あんたはわかるはずだぜ?」

「……………やはりクローンで合っているみたいだね。」

「そういうことだ!!おら!!」

彼女が振り回した鞭がボディに命中をして吹き飛ばされるがサンちゃんにキヤツチされる。

「大丈夫ですか?」

「ああありがとうね。」

キヤツチされた僕は着地をしてどうするか考えていた。クリスちゃんの偽物に対してどう戦おうかと……………つて敵が増えてきたな……………

「超変身!!」

僕はペガサスフォームへと変身をして銃を生成をしてペガサスボウガンに姿を変えて現れたノイズ達を次々に撃破していく。翼ちゃんたちもネフシュタンの鎧を着た人物に苦戦をしていた。

「仕方がない……………プレラーティ!!」

「わかっているワケダ!!」

彼女が放ったけん玉が命中をしてネフシュタンの鎧を着た人物は吹き飛ばされたのを見て僕はマイティフォームへ再び変身をして走りだして回転をしてマイティキックをお見舞いさせる。

「おりやああああああああああ!!」

「ちい!!」

彼女は両手でガードをしてマイティキックをガードをした。

「ちい……これは厄介だな。まあいいここは撤退をする!!」

彼女は地面に鞭を叩いて煙が発生をした。僕はペガサスフォームになり視力などをあげてみたが……どうやら彼女は僕でも遠くに行ってしまった彼女にペガサスボウガンを放つのは無理だな……

『せめてゴウラムがいたら楽だね?』

「確かに……ゴウラムがいないのはつらいかもね……」

「ゴウラム?」

「ああクウガの相棒のメカだよ。最後の戦いの後はどこにいったのか僕もわからない状態だけどね?」

ゴウラムがいたらその足につかまって上空からペガサスフォームで見れたんだけどね……さて変身を解除をしないとね。

僕たちは変身を解除をして二課の方は話をしている中ジャンヌちゃんがこちらに来了た。

「アダムおじさんどうなるのかしら?」

「わからないね。あのネフシュタンの鎧がなぜ今になって現れたのか……その狙いは響ちやんだってこともわかった。」

「響ちやんですか？」

「ああそのとおりだよ。だがなぜ彼女を狙っているのかは不明だね……（おそらく響ちやんの戦闘データ及び自身がネフシュタンの鎧を装着ができるように動いているのかなフィーネ……）」

だがいずれにしてもこれからのことを考えて彼女の動きを見張っておかないとね……さておそらく次はデュランダル護衛の時期になるが、今回は翼ちゃんは絶唱をつかっていないから問題ないね。そういえば僕ってバイクなかったな……どうしようかな？

遺跡再び

アダム side

ネフシユタンの鎧を着た女の子を退かせて二課の方ではネフシユタンの鎧がなぜ現れたのかと話をしていいる中僕はある遺跡にやってきていた。そこはかつてリクの遺体が放置されていた遺跡へとやってきた。

「またここにやってくるとはね．．．．だがゴウラムを探すことを考えたらここしかないな。」

『そうだね．．．．僕の遺体があつたつてことはゴウラムもおそらく．．．．』
「だといいいね。」

再びこの遺跡に探索をするのはいいけどペガサスフォームに変身をした方がいいのかな？今回は僕一人だからな．．．．皆がいないのは最初の頃を思い出すよ。

「．．．．僕も甘くなつたかもね。ん？」

何かの形がこちらにやって来る．．．．あれはノイズ!?オーズドライバーを装着をしてオースキャナーを取り出して変身をする。

「変身。」

「タカー！トラー！バッター！タ・ト・バ　タトバタ・ト・バ！」

オーズに変身をしてトラクローを展開をして襲いかかってきたノイズを切っていく。だがなぜノイズがどうしてこの遺跡に現れたのか？

考えても仕方がないオーブカリバーを装備をしてエレメントを回転させて地のエレメントで止めてトリガーを引く。

「グランドカリバー」

地面に突き刺してノイズたちに命中をして撃破する。メダルを変えて戦おうとした時何かがこちらに近づいてきたのがわかった。クワガタのようなものがノイズたちに体当たりをして撃破した。

『うiiiiiiiiiiiiiiii』

「あれは……」

『間違いないゴウラムだよ。だがなぜ？もしかしてアダムに託したクワガの力に反応をして蘇ったのか？』

だつたら助かるね、ゴウラムが体当たりをしていき僕はオースキャナーを取る。

「スキヤニングチャージ!!」

「せいやああああああああ!!」

タトバキックが命中をしてノイズたちを撃破してゴウラムはこちらの近くに浮いて

いる。目的のものを見つけたので僕は一安心をする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

原作通りなら完全聖遺物デュランダル護衛が始まる可能性があるね。とりあえず一旦総社に戻って作戦会議をしないといけないな。

石を割りゴウラムと共にもどるとサンちゃんたちがこちらに走ってきた。

「「おじさま!!」」

「え?」

なんで自分たちを連れていかなかったのかと色々と言われて僕は(・ω・)をする。僕は一人で行動をしては行けないのかな?

まあ局長という立場の人間だからもし僕に何かあつたら彼女たちはどうするのかと聞いてきたので僕は君たちを置いては死なないさといひティキが僕の所へやってくる。

「私はマスターを信じています。でもマスターた死んだら私もあとをおわせてもらいます。マスターがいない世界にいても意味が無いので。」

「ティキ・・・・・・・・」

少し潤んでしまったけどしなせないからねってあれ?もしかして僕が死んだら彼女たちも後を追って心中をするつもりなのか?

どうしてこうなったんだ?

デュランダル護衛

アダム side

ゴウラムを発見をして僕はパヴァリア総社へと帰還をしたゴウラムはすぐに僕の部屋の中で眠りについた。疲れていたのかすぐに目が閉じられてゴウラムの力が必要だと思っただら念話すればいいかな？

とりあえずお風呂に入ろうとしたが青い髪をした男の子が立っていた。

「アグル君じゃないか？」

「うえ!？」

「え？」

彼はこちらに向いたが……驚いてしまった。そう彼……いや彼女だったからだ。最初は男の子と思っていたがアグル君は元々女の子だということに今気づいてしまった。

「えつとその……」

「とりあえずお風呂に入ろうか？」

「はい……」

僕たちは一緒にお風呂へと入りアグル君と話をする。

「さてアグル君……どうして男の子と嘘をついたんだい？僕は驚いてしまったよ。」
「ごめんなさい……でも僕この力でおじさんを助けたかった。だから女よりも男として活動がした方がいいかなと……それで……」

「なるほどね。ありがとうアグル君……」

僕は彼女の頭を撫でていた。だから彼女は顔を赤くしていたんだね……さてアグル君のことをどう説明をしようかな？まさかさらしをして胸を隠してたんだね。大きき的にはどれくらいだろうか？

「……おじさんのエッチ。」

「すまないすまない（笑）」

僕は笑いながら一緒にお風呂から上がって体を吹いてあげたりする。アグルちゃんも落ち着いてたのかいつものさらしを巻いて服を着ている。

「おじさん、これは内緒でお願いするね？」

「わかったよ。君は幹部アグル君だからね……期待をしているよ。」

「局長のために戦う。」

お風呂から上がった僕に通信が来ていた。通信をとると弦十郎が映っていた。

「やあ弦十郎君どうしたんだい？」

『すまないアダム、実は……』

説明中

「なるほど完全聖遺物デュランダルをね……（櫻井了子だな……まさかガ・ディングルを使用しているのか……そのためのガ・ディングルか……）」
僕は考えてから彼女達の護衛任務についていくと連絡をして直ちに幹部たちを集めた。

「やあ皆すまないね。今日は二課から協力要請が出てね……」

「協力要請ですか？」

「ああ完全聖遺物「デュランダル」の護衛だよ。」

「！！」

「おいアダム!!なんで向こうに完全聖遺物が所持されているのじゃない?」

「それに関してはおそらく僕たちよりも早く動いたんだろうね。彼女達が使っているシンフォギアはプレラーティイわかったかい?」

「ああバツチリなワケダ。あれは聖遺物の欠片を使ったものだってことがわかったワケダ。だが完全聖遺物は違う……あちらは完全に形が残っているため完全聖遺物と呼ばれているワケダ。」

「なるほど……では局長私たちも共にですか?」

「ああ今回はよろしく頼むよ。」

僕はサンジェルマンたちと協力体制がとられたのでゴウラムを起こすことにした。

「ゴウラム起きてほしい。君の力を借りたい。」

ゴウラムは僕の声に反応をしたのか目を開けてくれた。じーつと僕の方を見てから背中の羽を開いて喜んでいた。

「ありがとうゴウラム……」

夜となり僕たちは二課のみんなと合流をして護衛任務に当たるためファウストロウブを纏っている中僕はクウガに変身をする。

「アダム完成をしたワケダ。お前が要望をしていたバイクと呼ばれるものなワケダ。」

そうプレラティに頼んで完成をもらったのはビートゴウラムに合体をして僕はそれに乗りこするとゴウラムはがしつと変形をしてビートゴウラムに合体をして僕はそれに乗りこんで車にはサンジェルマンたちが搭乗をして護衛任務が始まった。

僕が先に走りその後ろをデュランダルが摘まれている車がついてくる。

アダム side 終了

一方トラックの中では。

「……………」

「大丈夫か響?」

「サンジェルマンさん……あはははは大丈夫じゃないかもです。」

「そうか……とりあえず緊張をしているなら一旦深呼吸をするべきだ。」

「すー……はー……すー……はー……あ、少し楽になりました。」

「そうだ。君はまだシンフォギアを纏ってからそれほど立っていない。最初の時の私を見てみようだ。」

「サンジェルマンさんですか?」

「ああおじさま……いや局長と共に戦っている時に最初の戦闘時では足を引つ張ってしまつてね。でも局長は怒りもせず気にしないでといわれたんだ。だから私は局長を守るために戦い方を学んだりしてきたんだ。」

「そうだったんですか……アダムさん優しいですからね。」

「ああおじさまは優しい……私に色々と錬金術の基礎などを教えてくれたのはおじさまだから。」

「おじさまなんです。」

「ごほんごほん!!忘れてくれ……さてそろそろだな。」

サンジェルマンは銃剣を構えていると外で爆発ノ音が聞こえた。

二人は外を見るとカテリアが銃を構えて電撃を纏わせた弾をノイズたちに命中をして撃破していた。

「ノイズだと。」

「どうするの!!」

「僕は引き上げる!! ティキ!! 君達は別のルートを使って移動をしてくれ!!」

「わかりましたマスター。」

ティキは運転をしているトラックを別方向へと向かって走っていく。クウガはカテリアから銃を生成してもらいそれを受け取った。

「超変身!!」

ライジングペガサスへと変身をしてライジングペガサスボウガンから連続した弾が放たれて次々にノイズ達に命中をして撃破していく。一方で別方角に走っていたトラックは工場へと到着をしたがそこにのノイズが現れていた。

「あーもう!! しつこいんだから!!」

カリオストロは拳にエネルギーをためてそれを連続してビームが放たれてノイズたちを貫いていく。

「確かにその通りなワケダ!!」

プレラーティはけん玉にエネルギーを集めてそれを振り回してノイズ達を撃破していく。全員が交戦をしている中鞭が襲い掛かってきた。

「させませんよ!!」

テイキは右手を剣にして放たれた鞭を切り裂く。そこにキャロルとオートスコアラーたちも合流をして構えているとネフシユタンの鎧を着た人物が現れる。

「ちい．．．．．まさかここまで護衛をしているとはな．．．．．だがあたしの目的は完全聖遺物だ!!くらいやがれ!!」

鞭をたくさん生成をしてそこから棘をたくさん放ってきた。

「くそ!!」

「近づけない!!」

翼と奏は槍と剣を使ってはじかせている。ジャンヌとレヴェリアも槍などを振り回して動けない。

「くそ!!」

キャロルは障壁を張り響と了子を守っていた。ネフシユタンの鎧はチャンスと思いつ近づこうとしたとき。

「おりやあああああああああ!!」

「ぐ!!」

マイティキックを放ったクウガの攻撃を受けて吹き飛ばされる。着地をしたクウガは彼女たちを見る。

「大丈夫かい!!」

「「局長!!」」

「ちいノイズたちを倒したのか!!」

「ああ僕の仲間たちがね。」

アダムが指を鳴らすとノイズが現れたので驚いている。

「ノイズだと!?!」

「いやあれはアルカ・ノイズ……局長が作ったものだから安心してくれ。」

「アルカ!!」

【攻撃開始!!】

アルカの指示でアルカ・ノイズはノイズに攻撃をしていた。翼たちは啞然として見ている中何かが飛びだしたのを見た。

「あれは!!」

「おらああああああああああああああ!!」

ネフシユタンの鎧を着た人物が飛びたちデュランダルをつかもうとしたが響が蹴りを入れてそのままデュランダルをつかんだ……。だが突然として彼女のギアが黒くなっていく。

「いかん!!超変身!!」

クウガはライジングマイティフォームへと変身をした。響はそのままデュランダル

を振り下ろした!!

「おりやああああああああああ!!」

ライジングマイティキックを放つて響が放つデュランダルに命中させてお互いの力が衝撃波を与えてほかの人物たちを吹き飛ばしていく。

アルカはすぐにアルカ・ノイズ達を戻してからサンジエルマンのところへとび彼女はキヤッチをして障壁を張る。

そしてデュランダルが地面に突き刺さりそこにクウガが地面に倒れる。

「ぐふ．．．．．」

「おじさま!!」

サンジエルマン、キヤロル、ジャンヌたちがクウガのところへと行きライジングマイティから白いクウガクローイングフォームに変わってから変身が解かれる。

「なんて力だ．．．．．ライジングマイティでも相殺ができるかどうかわからなかったからね．．．．．」

彼はデュランダルの力がこれほどかと思うぐらいに力を付けないと判断をする。こうしてデュランダル護衛任務は失敗に終わったのであった。

アダムは（ ω ）スヤア

パヴァリア光明結社の基地であるチフォードシャトーの一室。アダム・ヴァイスハウプトは眠っていた。

だがその周りには幹部たちが全員集まっていた。彼はなぜ寝かされているのかその理由は二課の完全聖遺物デュランダル護衛任務の際に響がつかんだデュランダルの強力な力に対抗をするためにライジンググマイティへ変身をしてライジンググマイティキックを放ち彼女が持っていたデュランダルに命中をしたが彼自身もダメージを受けてしまい膝をついてしまう。

「おじさま………」

サンジェルマンは眠っているアダムの姿を見て涙を流そうとしていた、だが今は全員がいるため涙を流すことをしない。

「あら皆ここにいたの?」

「何やっているんだお前ら。」

そこにグリードVの面々が現れてプレラーティが話をする。

「そんなことがあったのね。」

「ふーむだがアダムが眠るほどのダメージを受けるなんて初めてじゃねーか？」

「そうだね………とりあえず彼は何て指示をしているの？」

「一応は各自の仕事はやっておくことだそうだ。」

「なら仕事を開始をしておかないとね？」

メズールの言葉に全員が心配そうにアダムの方を見ていた。

「お前からアダムはお前らが思っているほど弱い奴じゃねーだろうが………あいつを信じて仕事をしやがれ。」

アंकの言葉を聞いてアダムの部屋を出ていく幹部たち。

「やれやれ全くアダムもひどいね？」

「だな寝てるふりをしてるだろ？」

「いや実際には先ほどの声で起きたよ。」

アダムはそういつて布団から起き上がりどれくらい自分が眠っていたのかと聞くことにした。

「そうねあなたが倒れてから二日になるわね。」

「そこまでか………あのデュランダル攻撃は僕が思っていた以上強かった………」

おそらく奴はあのエネルギーを使って何かをしようとしているが今に不明だ………」

彼は立ちあがりゴウラムの傍にやってきた。ゴウラムは目を閉じており (☒ω☒)

スヤアと眠っている。

「さて彼女達にも僕が起きたことを報告アンドこれからのことについて話をしないといけないね。やれやれやる仕事が増えそうだ。」

アダムは苦笑いをしながらはあとため息をついていた。そのあとにサンジェルマンたちが彼に抱き付いてきたので彼がおわわわとなつたとだけ書いておく。

アダム side

とりあえず起き上がった僕はリクと話をしていた。

『アダムどうやら目を覚ましたみたいだね．．．まさかあのデュランダルという力があるほどの力を出すとは僕は思ってもいなかつたよ。』

「ああ僕も甘かつたよ．．．．．フィーネはチャンスだと思っているけど．．．．．ならこつちも新たな力を手に入れようじゃないか？」

『新たな力？』

「テイキ、大至急サンジェルマンたちに連絡をしてくれ。」

「わかりました。」

僕の連絡を受けて彼女達が入ってきたので本題に入ることにした。

「やあ皆．．．．．実はある完全聖遺物を見つけたという連絡を受けてね。僕たちは今からその征伐及び捕獲をしに行くよ。」

「局長その名前は？」

「ああ魔剣ダインスレイフさ．．．．．」

僕たちは転移魔法を使いダインスレイフが置かれている場所へ到着をした。僕はオーズへと変身をしてオーズカリバーを構えている。するとダインスレイフが光りだしてそこに立っていたのはダインスレイフを構える黒騎士の姿だ。

「おじさま。」

「待ってくれ僕がやる。おそらく奴の力は強大だからね．．．．．」

僕はオーブカリバーを構えていると黒騎士が走ってきて振り下ろしてきた。僕はオーブカリバーを使いそれを受け止めてその斬撃をはじかせていく。

後ろに下がった僕はエレメントを回転させて風のエレメントを発動させる。

「ハリケーンカリバー!!」

放たれた風の刃が黒騎士に当てるが聞いていなさげだね。僕はオーブカリバーを収納してメダルを変えてスキャンする。

【サイーゴリラ！ゾウ！サゴーズ サゴーズ!!】

サゴーズコンボへと変身をして黒騎士は僕に剣を振り下ろすがパワー型のこの形態はそれを体で受け止めて右手のゴリバゴーンで殴り飛ばして吹き飛ばした。

「これで終わらせるよ。」

オースキャナーを取りスキャンさせて必殺技を放つ。

「スキヤニングチャージ!!」

「はあああああああああせいやあああああああああ!!」

黒騎士をこちらに吸い寄せてからサイヘッドなどで攻撃をして黒騎士を撃破する。
 ダインスレイフは僕の方を見ていたが気にせずそれに手を取る。

「ぐううううううう．．．．．」

「おじさま!!」

サンちゃんたちがこちらに来るが僕は手で制止させる。

「負けるものか．．．．．僕がこのような力に!!うおおおおおおお
 おおおおおおとおおとおおとおおとおおとおおとおおとおお
 おおおおとおおとおおとおお!!」

僕は気合でダインスレイフから流れる力を克服すると変身が解除されていたがなかなかサンちゃんたちがおどろいているけどどうしたの？

「お、おじさま．．．．．ギアを装備されています。」

「ギア?」

僕は改めて姿を確認をするためにアグル君が作った鏡を見るとそこには僕の体を纏うかのように鎧が装着されており右手にはダインスレイフが装備されている。どうや

らダインスレイフが僕用にファウストローブのように姿を変えてくれたみたいだ。

「悪く無いねこのデザインも……」

背中にはマントが装備されており僕は回転をしてみたやー僕もファウストローブがほしかったけどまさかこうやって手にいれるなんて思ってもいなかったよ。

「おじさまも私たちと同じファウストローブを……」

「ああ僕自身も驚いているよ、だからこそダインスレイフが力を貸してくれたかもね。さて戻るとしよう。」

でもダインスレイフが僕の手に移ったらイグナイトモジュールできないじゃん。

「まあいいか(笑)」

こうして僕は新たな力ダインスレイフをファウストローブにした力を似ていれました(笑)

響正体を明かす

アダム side

ダインスレイフを手に入れた僕はジャンヌちゃんと一緒に外に出ていた。仕事を終えてからのなので丁度暇をしていたのがジャンヌちゃんだ。

「おじさまと一緒におじさまと一緒に。」

楽しそうにしているジャンヌちゃんを見て僕はほっとしている。確か原作通りならそろそろ響ちゃんが未来ちゃんに正体をばらしてしまうきっかけが確かクリスちゃんがネフシユタンの鎧を着て襲い掛かってきたときだったよね？

どかーんと音が聞こえてきた。

「そうそうこのときって……え？」

「おじさま……！」

音がしたのでまさかなと思いつつ僕はシルクハットを深くかぶりながら走っている現場に到着をする。

そこにはガングニールを纏った響ちゃんが立っていた。そばには未来ちゃんがいて彼女の方を見て目を見開いていた。そこに鞭が飛んできたので僕はシルクハットを投

げて鞭を切り裂いた。

二人は後ろを振り返ると僕が立っていることに驚いている。

「アダムさん!」

「二人とも無事かい?」

戻ってきたシルフハットをかぶり僕はオースドライバークリヤンではなくてアークルを発動させる。

「変……身!!」

照井 竜が変身をするみたいな掛け声でクウガへと姿を変えた。未来ちゃんの前で一度変身をしているので彼女は驚かない。ジャンヌちゃんはファウストローブを纏い隣に立っているとノイズが現れた。

「ジャンヌちゃんは今未来ちゃんの避難をさせてくれ。未来ちゃん……響ちゃんを怒らなくてくれ?彼女にも言えない事情つてものがあるからね。」

「わかり……ました。」

彼女が連れて行くのを見て響ちゃんの方を向く。

「後でちゃんと話しあいなさい?」

「はい……」

僕は現れたノイズに拳で殴っていき倒していきライジングマイティへと姿を変える。

蹴りの威力を抑えてライジングマイティキックを放ちノイズ達を撃破した。まさか威力調整ができるとは思ってもいなかったけどね？

響ちゃんもノイズを倒したのかこちらの方へ来ているが僕はこつちには来ないよう
に指示を出してライジングペガサスフォームへと変身をして辺りを見る。

「そこだ!!」

ライジングペガサスボウガンを発生させてトリガーを引きライジングブラストペガ
サスを発射させるが相手はこちらの攻撃に気づいたのか回避をした。

「ちい!!隠れてい様子を見ていたが……まさかばれるとはな……」

現れたネフシユタンの鎧を着たクリスちゃんそっくりな女の子が現れた。ライジン
グペガサスボウガンを構えながらも響ちゃんの援護をするためにトリガーを引く。彼
女は僕が放つ光弾を鞭ではじかせて響ちゃんが接近をして蹴りを入れる。

「ぐ!!前よりも戦闘力が上がっているだ!!」

「師匠直伝!!必殺技を放つ際に叫べ!!うおおおおおおお!!剛腕粉碎!!」

響ちゃんは右手にエネルギーを込めてバンカーが作動をして一気にネフシユタンの
鎧の子を吹き飛ばした。

てかなんで剛腕粉碎?一瞬だけゴッドフィンガーが思い浮かんだのは僕だけかな
?ネフシユタンの鎧の子は立ちあがり頭を振っていた。

「いって……てめえよくもやりやがったな。仕方がない……。本当だったらこいつらに使うつもりはなかったけどな……。イチイバルをベースに作られたあたし専用だ!! パージ!!」

キャストオフ!! 僕はライジングドラゴンになりライジングドラゴンロッドを振り回してネフシユタンの鎧をガードをする。

[Killter heavy arms tron]

今なつていった? ヘビーアームズとか言ったよね間違いなく。すると彼女が光りだして装甲が纏われて行くと両手にダブルガトリング、肩部と脚部にミサイルポットが装着された蒼いイチイバルともよばれる形態になっていた。

うん間違いなくヘビーアームズじゃないかな? それは。

「くらいやがれ!!これがあたしのヘビーアームズだ!!」

「ですよねええええええええええええええええ!!」

僕は叫びながら放たれたフルオープンアタックを回避をして素早く響ちゃんを回収をした。

「アダムさん!?!」

「さすがの僕もこの砲撃をふさぐ方法は難しいよ!!ちい!!」

錬金術で作った盾を出してガードをする。さてどうしたらいいのかな? あつちは撃

ちまくつているせいで接近などができない状態だ。

すると上空から槍や剣、ガトリングが放たれてクリスちゃん偽物の方へと放たれる。

「ちい!!」

あつちは回避をしたみたいで僕は錬金術で作った盾を消して立ちあがる。奏ちやんたちが到着をしたみたいだね。

「お待たせしました!!」

「ごめんなさい!!」

「気にしないでくれ。」

「んでなんだあれ? イチイバルの青いバージョンか?」

奏ちやんが言うが確かにあれは青いイチイバルと言った方がいいね。すると声が聞

こえてきた。

「やっぱりに役に立たないか……」

「フイーネか。」

「まさか貴様がここにいるとはなアダム・ヴァイスハウプト。」

「そうだね。君がティキを攻撃をした以来だよ。悪いが君をここで倒させてもらおう!!」

ライジングドラゴンロッドを構えて彼女に攻撃をしようとしたがその前にノイズが現れてライジングスプラッシュドラゴンが当たってしまった僕に僕は投げ飛ばして爆発させ

る。

その間にフィーネは撤退をしたみたいでノイズや青いイチイバルを纏っていた彼女が姿を消していた。

「逃げられてしまった。(思いだしたよ……櫻井 了子はリディアン学園の地下でガ・ディングルを作っていたことを……)」

僕は呟きながらも彼女の野望を止めるためにガ・ディングルを先に抑えてしまえばいいじゃないかなと……その為にも僕は急いで総社へと帰ってから錬金術を使って開発をしなければならぬな……ガ・ディングルを奪うためにね？さあフィーネ……悪いけど君の野望壊させてもらおうよ。

「そう僕、アダム・ヴァイスハウプトがね？ふっふっふっふ。」

アダムたちこつそりと終わらせることにした

夜、静かになったりディアン学園……その周辺で錬金術師たちを筆頭に先頭に立っている人物はアダム・ヴァイスハウプトである。

「局長。誰もいません。」

「よしでは転移石を使いここの地下へと行く。」

「は!!」

錬金術師たちは転移石を割り彼らはある場所に転移をした。そこにあつたのはエレベーターシャフトのように見えるが間違いなくカ・ディンギルで間違いなかった。プレートイはそれに近づいて驚いている。

「これは驚くばかりなワケだ。確かにこれじゃエレベーターシャフトにしか見えないようにしている。」

「そのとおりだよ。さあ準備を始めようじゃないか。このような兵器は僕たちがいただけことにしようか?」

彼らは色々準備をしていたのでカ・ディンギルに色々設置などをしていきサンジェルマンたちはカ・ディンギルを見ていた。

「しかしファイネはいつたいこれで何をする気だったのでしょうか？」

「おそらくバラルの呪詛を解放させようとしたのだろうね。そんなことをしても……あのほうが喜ぶとは思えないしね。」

「アダムがそういういながらカ・デインギルの方を見ていると一人の錬金術師が声をかけてきた。」

「アダムさま!!準備が完了をしました!!」

「よし転移発動目標はチフォードシャフトだ。」

「了解です。」

転移石を使ってカ・デインギルを運ぶことにしたアダムはさーてといいながら彼女を待つことにした。サンジェルマンたちも残ることにして全員がファウストロープを纏って待つことにした。

ファイネ side

私はカ・デインギルを最終調整をするために二課のエレベーターシャフトへとやってきた。扉を開いてまず驚いたのがカ・デインギルがなくなっていることだ。

「な!!なぜだ!!なぜカ・デインギルが消えているどこに行っちゃ!!」

「それは僕たちが回収させてもらったからだよ。櫻井了子……いやファイネ。」
私は声をしたので振り返ると白いシルクハットをかぶった男がいた。

「アダム・ヴァイスハウプト!! 貴様か!!」

「ああ僕だよ。カ・デインギルを使った月の破壊を止めるためにね……悪いけど月は破壊させないしバルルの呪詛は破壊させない。」

あいつは腰にドライバーとメダルを出していた。あれはオーズの方か。私はネフシユタンの鎧を着てあいつが変身をしたオーズと戦う。私の野望を砕いてくれた奴を殺すために!!

ファイネ side 終了

オーズへと変身をしたアダムはファイネが纏ったネフシユタンの鎧の前に立っていた。その後ろでは幹部たちがファウストローブを纏っておりファイネに攻撃をするために構えている。

「アダム・ヴァイスハウプトおおおおおおおおおおお!!」

彼女は鞭を振るいオーズに攻撃をしてきた。オーズはトラクローを展開して彼女が放った鞭をはじめかせていくとサンジェルマンとカテリアの二人が放つ銃がファイネに向かって放たれる。

「ちい!!」

彼女は鞭で二人が放つ弾丸を落としていくとそこにレイジとカリオストロが接近をして電撃と光の拳をファイネに当てて吹き飛ばした。

「ぐお!!」

「これでもくらうワケダ!!」

プレラーティがけん玉を振り回してそれを投げつけて玉がフィーネに命中をして彼女を吹き飛ばした。

「ぐ!!」

「であああああああ!!」

ジャンヌとレヴェリアが槍と剣をふるって攻撃をしてフィーネは鞭で二人をはじめせると光弾が飛んできて彼女を吹き飛ばした。

「リキティダー。」

アグルが放ったリキティダーが命中をしてオーズはオースキャナーを持ち必殺技を放つ。

【スキヤニングチャージ!!】

「せいやああああああああああああああ!!」

タトバキツクが放たれてフィーネのボディに命中をして吹き飛ばした。

「がああああああああ!!馬鹿な……ネフシユタンの鎧を着た私がやられるだと……」

「フィーネ……なぜエンキが君を遠ざけたのか……そしてなぜバラルの

呪詛を發動させたのか君は知らないみたいだね。」

「なに．．．．．あれはあの方が私を遠ざけるために。」

「それは違う。真実は裏切り者のシエム・ハを復活させないためにバラルの呪詛を發動をさせたんだ。」

「なに．．．．．どういうことだ!!」

「シエム・ハは自らの権力と力を欲し彼らを裏切った。その時に迎撃をしたのがエンキだったんだ。だが彼も左手を自ら切断をしてシエム・ハを倒したが彼女は地球人類の遺伝子に自身の情報を紛れ込ませて自らのスペアボディにしていたんだ。だからエンキは自らも致命傷を負っていた彼はそれを止めるために自らの命と引き換えにバラルの呪詛を發動．．．．．残された者たちはシエム・ハの遺体を封印をして地球をさつてしまった。だから君は何も知らされないままだったからね。彼は君のことを拒絶をしたわけじゃない．．．．．彼は人類の生命と尊厳をシエム・ハから守るためにバラルを起動させたんだ．．．．．」

「なら．．．．．私はそれを知らずに月を破壊をしようとしたのか？あの人在必死になって守ろうとしていたのを私は私は!!」

彼女は涙を流しているのを見てアダムはそつとハンカチを出して彼女の涙を吹いた。

「お前．．．．．」

「フィーネ……まだ君は罪を償うことができる。これからは櫻井 了子としてこの世界で生きていくんだ。それが彼が君に対して言える最後の言葉でもある。君も彼の後を追うようなことはしないでくれ。」

「……だが。」

「わかっている君がしてきたことは犯罪だ。だからこそ今ここでフィーネという存在は死んだことにして君は櫻井 了子としてこの世界を見守ってほしい。エンキが望んでいた世界を守るためにね。」

「……」

オーズから変身を解除をしたアダムはそういいながら彼女を連れて二課の方へと行くことにした。

「アダムじゃないかどうした？」

「君が思っていた事件は終わったってことを伝えにね？」

「そういうことか……わかったこちらで犯人は死んだことにさせてもらおう。」

「弦十郎君私は……」

「たとえ君が誰だろうと俺にとつては櫻井了子だつてことに変わりない。」

「……そうね。なら私はこれからも変わりなく櫻井了子として関わっていくことにするわ。」

「ああこれからもよろしく頼むぞ了子君。」

「ええ弦十郎君。」

二人が握手をするのを見てからアダムはソロモンの杖をどうするのかを聞く。

「とりあえずこちらの方で何とかしてみよう。ソロモンの杖を抑えればノイズが発生をすることは無いと思うしね?」

アダムの言葉を聞いて二人は納得をしてアダムは転移石を使ってチフオージュ・シャトーへと戻ってきた。すでにカ・デインギルの調査をしていた。

「プレラーティイどうだい?」

「アダムおかえりなワケダ。ああ……確かにこいつは強力な砲塔になるけどその分エネルギーをかなり使ってしまうのが欠点なワケダ。解体をしてチフオードシャトーの砲撃ユニットとして付けたほうが良いと思うワケダ。」

「なるほどね。じゃあこれは解体をするってことで決定だね?」

「それいいワケダ。」

カ・デインギルは解体されることとなり砲撃をするユニットだけはチフオードシャトーに装着されて攻撃力がない移動基地にはいいじゃないかなということで砲身だけはつけられることになった。

「それよりもこれだね。」

「ソロモンの杖じゃないの。それをどうするのよ？」

「とりあえずぶん!!」

アダムはソロモンの杖に封印の錬金術を施してノイズ達がこちらにこないように制御を完了させる。これによりノイズが発生をすることはなくなるだろう。．．．．たぶん。

世界の歌姫

アダム side

やあ皆、アダム・ヴァイスハウプトだよ。久々にこの挨拶をしたような気がするよ。フィーネの野望を打ち砕いてから二か月がたった。あれからノイズの出現はなくなっただけ僕たちの仕事は残っているからね。

パヴァリア総社は裏側でも活動をしていた。裏で動いている犯罪者たちを捕まえたりと案外忙しい状態だ。

サンちゃんたちも働いておりそのトップである僕は皆以上に動いていたけど……

「おじさまは休んでください!!」

「そーよトップが動くのはいいけど働き過ぎ!!」

「その通りなワケダ。」

つと幹部皆に言われたので落ち込む僕であった(・ω・)。そこから僕は仕事をセーブをしながら働いており二か月がたった。

ある日二課から連絡が来たので僕は丁度暇をしていたので通信にでる。

「はいこちらパヴァリア総社ですが?」

『アダムさん翼です。』

映像に映し出されたのは長い青い髪の一部をサイドテールにしている翼ちゃんの姿があった。そういえばこの後の話をしていなかったね？クリスちゃんのクローンは結局雪音家に引き取られてクリスちゃんの双子の妹の名前はえっとイリスちゃんになったそうだ。

さて話を戻して翼ちゃんから連絡なんて珍しいことはあるね。

「どうしたんだい？装者としての仕事はまだできたのか？」

『あはははまあそれもありますけどまあ今回は違いますよ、実はツヴァイウイングがコラボコンサートをすることになりましたそのチケットをアダムさんに受け取ってもらいたいと思いますよ、すでに立花たちにも渡しております。』

「転送確認をしたよ。確かに受け取ったよ。それでその相手はいつたい誰なんだい？

(もし僕の予想が正解をしていたらあの子だと思うが……)」

『はいアメリカで二か月で歌姫のトップに立ちました。マリア・カデンツァヴナ・イヴです。』

やはり彼女か……。そりゃあそうか……。あれから6年も立っていたら彼女だって成長をしているからね。とりあえず行くって約束をしたので僕は眠ることにした。

さてあつという間にコンサートの日となり僕は響ちやんたちと合流をするためにいつもの格好でやってきた。そばにはティキと香苗ちやんがおりサンちやんたちも一緒に行きたかったと嘆いていたがすまないねとしか言えなかった。アグルちやんも頬を膨らませていたのでかわいいなと思いつつながら彼女の頭をなでなでしたな。

「アダムさーん!!」

「あの人がビツキーの知り合いの人!？」

「やだかつこいいじゃない!!」

「これはこれは響ちやんのお友達かい?」

「はい!!安藤 創世です。」

「寺島 詩織です。」

「はいはい板場 弓美でーす!!」

「あつはっは元気な友達だね。僕はアダム。アダム・ヴァイスハウプトって言うんだよろしくね?彼女はティキというんだ。」

「よろしくお願いします。」

「そしてもう一人紹介をするよ。」

「天羽 香苗です!!」

「天羽?どこかで聞いたような……」

流石にばれるかな？まあ奏ちゃんの妹だからねってあれ？二人の少女がこちらの方を見ているがうーんと首をかしげている。

「さすがに創世も変なあだ名つけないよね？」

「あ、当たり前だよ。(い、言えないアダッチとティティって言いかけたなんて。)」

なんか考えているのを見て嫌な予感を感じていたが中へ入らないといけないだと僕がいい未来ちゃんもはつとなり中へと入る。辺りを見てツヴァイウイングの気もそうだがマリアちゃんの人気もすごいじゃないかと思いつつ前にサリウムをもらったがティキはサリウムを持ちながら首をかしげていた。

「マスターこれはいったいなんでしょうか？」

そういえばティキはこんな場所には連れていったことがなかったな、僕は前世の記憶で覚えているから何とも言えないけどね……。それから始まるまでは響ちゃんが学校での様子などを聞いて楽しんでいるだなどと思いつつ話を聞いているとブザーが鳴りだした。

照明などが消えていきステージが光りだす。そこから現れたのはツヴァイウイングの二人だ。

香苗ちゃんはサリウムをぶんぶん振り回しながら姉の奏ちゃんが出てきたので興奮をしていた。

「おねえちやああああああああん!! かつこいいいいいいいいいい!!」

香苗ちゃんを見ながら僕は苦笑いをしながらツヴァイウイングの曲を聞いていた。まさか再びこうやって聞くことになるとは思ってもいかなかったよ。さて彼女達が歌い終わると次の曲が流れてきた。

そしてステージの真ん中から出てきたのはマリアちゃんだ。あれから6年もたっているから美人さんに変身をしていた。

「ほう………元氣そうでよかったよ………」

僕は彼女が歌っている姿を見ながら元氣に過ごしていたのでほっとしている自分だったのでそして3時間後ライブが終わり響ちゃんたちは寮の方へと戻っていく中僕は彼女達がいる控室の方へと歩いていく。

そしてツヴァイウイングの二人を見つけると香苗ちゃんが走りだす。

「おねえちやー………」

「香苗!! お前も来ていたのか!!」

「うん!! アダムおじさんに連れてきてもらったの!!」

「やあ二人ともお疲れ様。いいライブだったよ。」

「ありがとうございます。アダムさんも忙しいのに来てくださってありがとうございます。」

「なに気にすることはないよ。僕は今仕事をセーブされているからね。」

「またサンジェルマンさんたちに心配をかけられたのですか（笑）」

「う．．．．．その通りだよ翼君。」

まさか正解を言われるとは思ってもおらずに笑っているとこちらを見つけて走ってきた女性がいた。

僕はすぐにわかった。彼女は僕の顔を見ながら涙目になりそのまま走りだしてきた。

「アダムおじさまああああああああああ!!」

僕に抱き付いてきたのは皆の前ではびしつと決めている女性、マリア・カデンツァヴナ・イヴが今僕に抱き付いてきた。

「おじさま、アダムおじさま．．．．．ああ．．．．．またお会いできて光栄です。」

「マリアちゃん6年ぶりだね？本当に美人に育ったね．．．．．先ほどのライブ見させてもらったよ。見事な歌だったよ。」

「ありがとうございますおじさま。」

「おいおいアダムさん、あんた歌姫と知り合いだったのかよ．．．．．」

「ああ彼女がまだ小さいときからのね？」

それから彼女とお話していた、あの後僕が去った後はアメリカで歌姫として動いていたそう。それから色々とお話を聞いているとこちらに走ってきた人物がいた。

「もう姉さん勝手につて……え？」

「これはこれはセレナちゃん。」

「アダム……おじさん？」

「久しぶりだね。」

「はい。」

セレナちゃんとも再会をした僕はそろそろ戻らないといけないじゃないかといひ二人も時間に気づいて僕も後にする。

香苗ちゃんとテイキが待っていてくれたので転移石を使って総社へと戻っていく。ちなみにマリアちゃんとセレナちゃんとはLINEの交換はしている。

「ジャンヌちゃんマリアちゃんとおったよ。」

「マリアとですか!?それで彼女は元気でしたか？」

「ああ元気に過ごしていたよ……」

「そうですか……良かった。」

「実は明日彼女たちと会うことになっているが来るかい？」

「はい!!」

次の日、僕とジャンヌちゃんとメイちゃんが後ろにいた。僕は指定された場所へ到着をしたのでマリアちゃんにLINEで連絡をする。

『今到着をしたよ?』

『わかりました、今迎えを行かせますので。』

つと返信が戻ってきたので待つっていると二人の人物がこちらの方へと走ってきた。

あれは………

「アダムおじさん!!」

「おっと。」

調ちゃんと切歌ちゃんが僕に抱き付いてきた、彼女達も大きくなっている原作通りの姿をしているがあれ? 調ちゃん胸が当たっているのですが……切歌ちゃんと同じぐらいに成長をしている……だと……それから案内をされて中へ入るとナスターシャさんがいた。

「お久しぶりですねアダムさん、それにジャンヌにメイ。」

「はいナスターシャ教授。」

「お元氣そうでよかったですよ。」

「あなたたちも……本当によかったです。」

「ナスターシャ教授、もしかして彼女たちはシンフォギアを持っていますね?」

「ええその通りです。」

やはりか……マリアちゃんがガングニール、調ちゃんがシユルシャガナ、切歌ちゃ

んがイガリマ。そしてセレナちゃんがエンキの忘れ形見……アガートラームを纏っているか……僕はある決意を固めた。

「なら四人と戦わせてもらえませんか？」

「「「え!?!」」」

「君達の今の実力を知りたいからね。翼ちゃんたちとどのくらい違うのかをね？」

アダム対F I S装者

アダムside

今僕はナスターシャさんが用意をしてくれたシユミレーション室に立っていた。そう僕は今の彼女達の実力を知りたいと思いい戦うことにした。

するとまず入ってきたのは切歌と調の二人だ。サババコンビと呼ばれる2人の力を見るってことか。

「さあ見せてもらおうよ………君たちの力をね？」

「あれ？アダムおじさんオーズに変身をしないの？」

「ふふふさあーてどうするかな？見せてもらおうよ君たちの力を!!」

僕はシルクハットを深くかぶり腰に力を込める。アークルが発生をして僕は一定ポーズをとる。

「変身!!」

クウガに変身をして二人は驚いている。

「アデアアデアス!!」

「オーズ………じゃない？」

「この姿の時はクウガさ。次は君達の番だよ?」

「うん行くよ切ちゃん。」

「了解デース!!」

「Various shul shagana tron」

「Zeios igallima raizen tron」

二人が光りだしてピンクのギアと緑のギアが纏われていく、あれはシウルシャガナとイガリマか……。二人の準備が完了をしたのを見て僕は構える。

「行くデース!!」

切歌ちゃんが鎌を出して僕に振り下ろしてきた。彼女が振り下ろす鎌を横にかわして殴りかかろうとしたがそこに小さな鋸達が生んできた。

「ちい!!」

マイティキックを使い僕は鋸を爆発させて煙幕を発生させて超変身をする。

「超変身!!」

煙幕で見えない二人に接近をして素早い蹴りを入れてイガリマの鎌を奪ってモーフイングさせる。

「あー私の鎌が!!」

ドラゴンロッドへと変わったのを見て調ちゃんが両手に持ったヨーヨーを上空へ合

体させてそれを投げつけてきた。

「おっと。」

僕は回避をして切歌ちゃんたちにスプラッシュドラゴンを決めようと走りだして突きました。二人は回避をして切歌ちゃんはアンカーを飛ばしてきた。僕はドラゴンロッドを離してから姿を変えて街の中へと消えた。

「消えた!?!」

「どこに……」

さて僕を探しているけど今の僕はビルの上……

「超変身!!さーて狙い撃つぜ!!」

ペガサスフォームへと変身をして銃を生成をしてペガサスボウガンへと変える。さらにライジング形態を発動させて彼女達が見える場所へと移動をしてライジングペガサスボウガンを構えて二人に向かって放った。

「あう!!」

「う!!」

二人はライジングブラストペガサスを受けて吹き飛ばされた。僕は着地をして彼女たちは驚いている。

「姿がさつきと違うデース!!」

「まさか今の攻撃はアダムおじさん？」

「そのとおりだよ。さてナスターシャ教授シユミレーションストップで。」
『了解です。』

シユミレーションが止まり二人はギアを解除をする。僕自身もクウガを解除をして二人にお疲れ様と云って次の相手を待つ。

次に現れたのはセレナちゃんだ。僕は今度はクウガにはならずにダインスレイフを装着をしてファウストローブを纏う。

「オーズじゃない．．．それは!!」

「僕の新しい力さ。さあ見せてもらうよセレナちゃん．．．」

「はい!! Seillien coffin air get l l a m h t r o n」

セレナちゃんが光りだしてエンキの忘れ形見とも言われるアガートラムが装着される。元は彼の腕と考えるとやりずらいけど．．．僕はダインスレイフの剣を構えて彼女は短剣を構えている。

「さあ遠慮なくきなさい!!」

「はい!! はあああああああああああ!!」

セレナちゃんは持つている短剣でこちらに攻撃をしてきた。僕はダインスレイフの剣で彼女が放つ短剣を受け止める。

「ぐ!!」

「ふん!!」

振り下ろして攻撃をするが彼女は後ろへと下がり短剣を二つほど投げつけてきた。僕ははじめさせたが短剣が僕を攻撃するように動いている。

「これは……ちい!!」

僕は回避をするが短剣が僕を追撃をするファンネルのように襲い掛かる。僕はダインスレイフを置いて短剣を生成させてセレナちゃんが投げつけた短剣に放つ。だが作ったのはただの短剣じゃないぶつかった瞬間爆発が起こり僕は刺していたダインスレイフの剣を拾い彼女に接近をする。

「!!」

彼女は短剣をすぐに二刀流で生成をして僕が振り下ろすダインスレイフの剣を受け止める。

「お、重い……」

「まさか短剣を追撃をするようにするとは思ってもしなかったよ。だけどそれで終わったらつまらないからね。だけど終わりだよ?」

「え?」

後ろから彼女に剣が突きつけられる。それは分身をした僕だった。爆発をさせた際

に分身をして前からは僕が後ろからは分身が彼女に襲うようにした。

そしてシユミレーションが解除されて僕はダインスレイフ及び分身を解除をする。さて最後はマリアちゃんか・・・僕はオーズドライバーを装着をしてメダルを装着をする。

まっつているとマリアちゃんが入ってきた。

「ねえアダムおじさんお願いがあるわ。」

「なんだい？」

「私と戦うときはネフィリムを倒したあの姿で戦ってくれないかしら？」

「タジャドルかい？」

「ええ。」

「君が望むなら。」

僕はタカ、クジャク、コンドルのメダルをオーズドライバーにセットをしてオーズキャナーをスキャンさせる。

【タカ！クジャク！コンドル！タージャーボール——】

僕はオーズタジャドルコンボへと変身をしてマリアちゃんは笑い出す。

「本当に・・・その姿は私たちを助けてくれた姿だわ・・・おじさまありがとうございます。」

「気にすることはない。さあマリアちゃん見せてもらおう・・・」

「ええ・・・C r a n z i z e l b i l f e n g u n g n i r z i z z l」
彼女が光りだしてガングニールが装備されて行く。奏ちゃんや響ちゃんが使用するものとは違い黒い鎧でさらに背中には僕が使用をするダインスレイフのマントの用に装備されている。

「・・・なるほどね。さあ始めようか!!」

僕は背中から炎の羽を発生させて彼女に向かって放つ。マリアちゃんは槍を振り回して僕が放った羽を次々に落としていく。

「であああああああ!!」

彼女は振り回す槍をこちらに向けて放ってきた。僕はそれをかわして拳で攻撃をしようにしたが彼女は背中のマントでこちらの攻撃をふさいで後ろへ下がりが槍をこちらに向けて展開される。

「くらいなさい!!」

特大なビームが放たれた。僕は背中 of 羽を開いて空へと飛び回避をする。そしてオースキャナーをスキャンさせる。

「スキヤニングチャージ!!」

脚部のコンドルレッグが変形をして必殺のプロミネンスドロップを放つ。

「はああああああああああああああああ!!」

「マリアちゃんはこちらに槍を構えて突撃をして僕たちは激突をした。」

「ぐ!!」

「う!!」

僕たちは吹き飛ばされて僕は着地をしてマリアちゃんは吹き飛ばされたので槍を地面に刺してセーブをしたみたいだ。

「さてどうする? まだ戦うかい?」

「降参よ………アダムおじさんに勝てない気がするわ。」

その言葉を聞いて僕は変身を解除をしてマリアちゃんもガングニールを解除をした。そのあとはご飯などを頂くことになり普通にナスターシャ教授と調ちゃん、セレナちゃんが作ったご飯を頂いた。

うん美味しかったとだけ書いておくさ。

「アダムおじさまお話がありますからちよつとこつちへ来てくれませんか?」

僕はマリアちゃんに呼ばれて外が見える場所へ来た。こんなところで僕を呼びだしてどうしたんだろう?」

「………あー緊張するわ。」

「マリアちゃんどうしたんだい?」

くるっと彼女は振り返り僕の方へ近づいてきた。

「……………好きです。」

「ん？」

「私はアダムおじさんのことが好きです。マリア・カデンツァヴナ・イヴはあなたのことが異性として好きなんです。あの時からずっと……………」

「……………マリアちゃん……………」

「マリアずるいデース!!」

「抜け駆け。」

「姉さん!!」

「え?」

僕は振り返るとセレナちゃんたちが頬を膨らませていた。

「アダムおじさん!!」

「はい!」

「私月読 調はアダム・ヴァイスハウプトのことが好きです!!」

「私もデース!! 暁 切歌はアダム・ヴァイスハウプトのことが大好きです!!」

「ふふ最後になります。私セレナ・カデンツァヴナ・イヴはあなたのことが大好きです。」

「……………え?」

告白されたのは人生で初なのかな？あ……いや前世のことも考えたら何度目になるのか……僕は化け物だからね……彼女たちといえるのは……ならサンちゃんたちはどうなるんだ？

僕自身のことは何にも教えていない。あの子たちの前でもあの形態だけはなっていない僕の本来の姿……見られたくない教えたくない。嫌われたくない……か。

「……………僕は……………」

「おじさん!!」

「ジャンヌちゃんどうしたんだい？」

「サンジェルマンさんから連絡があつてすぐに戻つてきてほしいって。」

「わかつたよ。ごめん返事は今度させてもらうよ。」

そういつて僕は逃げるように転移石を割り総社の方へと戻ってきた。

黒いノイズ。

アダム side

サンちゃんから連絡を受けた僕はパウアリア総社移動基地に帰還をして事情を説明をしてもらうことにした。

「やあサンちゃん急いで帰ってきたけど状況を説明してもらってもいいかな？」

「はい局長。実は連絡を受けたのは我らの調査団でして突然として謎の黒いノイズが現れたそうで彼らはすぐに撤退をしたので被害はゼロです。」

「黒いノイズ……か……」

僕は知っている。黒いノイズってことはカルマノイズで間違いないね……まさかこの世界に現れるなんてね思ってもいなかったよ。

「なあ現場に向かうとしよう……」

僕は立ちあがり幹部や錬金術師たちを連れて現場の方へと向かった。

「この辺で陣地を撮っておりましたら。黒いノイズが現れたのです。」

「この辺でとっていたらか……」

僕は辺りを見ている。ここは遺跡に近い場所での陣地になる。だがどうしてカルマ

ノイズが発生をしたのか不明だな……いずれにしても「局長!!」声がして振り返ると黒いノイズが立っていた。

「あれです!!黒いノイズは!!」

「……カルマノイズ……」

「カルマ……ノイズ?」

「ああ気を付けたまえ……アルカ!!」

『御意!!』

僕の前に現れたアルカ・ノイズたちは現在はノイズと同じような姿をしているってことで彼ら専用の鎧を作った。てかコードギアスのナイトメアフレームとほぼ同じだけどね（笑）

その中でアルカはランスロットアルビオンを装着をしている。まあ原動力は違うけど空を飛んだりすることが可能で翼はエナジーウイングなどが搭載されておりほかのアルカ・ノイズたちもナイトメアフレームのヴェンセントなどを装着をしている。

アंकたちもグリードに変身をして僕はオーズに変身をしてオーブカリバーを装備をして構える。

「はああああああああ!!」

ウヴァとアグル君が接近をしてカルマノイズに攻撃をするが回避をした。

「な!!」

「回避をした!？」

「この!!」

カテリアが銃を構えてサンちゃんと共に攻撃をするがカルマノイズは回避をして彼女達に攻撃を加えようとしていた。

「させないよ!!」

僕はシールドを発生させてサンちゃんたちの前に落としてガードさせる。カルマノイズたちにヴィンセント装着のアルカノイズたちがヴァリスを構えてこうげきをする。がカルマノイズは回避をして僕はその間にオーブカリバーのエレメントを一周させる。

「スプリームカリバー!!」

オーブカリバーから強力な光線が放たれてアルカノイズに命中をする。

「やったか?」

レイジが言うが嫌な予感がする。煙が晴れてそこにはカルマノイズが立っていた。

「な!! アダムの攻撃が効いていないワケダ!？」

「嘘でしょ!？」

「これは……」

僕は驚いてしまう。スプリームカリバーを受けたはずなのに無傷のカルマノイズが

立っていた。さすが厳しい敵だな……するとミサイルなどが飛んできて僕たちはいったいどこからと見ていると上から響ちやんたちが到着をした。

「アダムさん!!」

「無事ですか!!」

「二課のみんな?!?どうしてここに。」

「ああ突然として謎の反応が出てな。それで二課に出動命令が出たつてことだ。んでなんだあの黒いノイズは……」

「気を付けたまえ奴は強い!!」

僕たちは構えていると鋸や鎌、ビームや短剣がカルマノイズに命中をした。FIS組の方も到着をしたみたいだ。

「おじさま!!」

「マリアちゃんたちどうして!!」

「ナスターシャ教授から謎の反応が出たと聞きました。」

「急いで飛んできたんです。」

「その通りです!!」

ここで9人の装者が集まっているが……カルマノイズに効くのかどうか……僕はメダルを変えてこの形態に変わる。

「コブラー！カメラ！ワニー！ブラカーワニー！」

ブラカワニコンボに変身をしてカルマノイズが攻撃をしてきた。僕は腕部のカメラームでカルマノイズが放つ攻撃をガードをした。

「ぐ!!」

「でああああああああ!!」

奏ちやんとマリアちゃんのだブルガングニールの槍が命中をしてカルマノイズは後ろへ下がる。そこに調ちやんと切歌ちゃんのコンビネーションの鎌と鋸が放たれて回避をするが突然として動き止まった。

「謎のノイズにも影縫いは効きましたか……今だ雪音姉妹!!」

「よっしや!!フルオーブンアタックを受けてみやがれ!!」

「フアイア!!」

雪音姉妹が放つ一斉射撃がカルマノイズに命中をして爆発を起こす。

「やった!!」

「……………」

煙が晴れてそこにいたのはカルマノイズだ。だがアツチコツチにダメージがあるみたいで効いている様子だ。

「……………」

「おじさま……………」

「わかっているが……………まさかここまで苦戦をするとはね……………カルマノイズたちの方もダメージを負っているようだしね。」

僕はカルマノイズがダメージを受けているので一機にとどめを刺そうとしたときに砲撃を受けて吹き飛ばされる。

「アダム!!」

「マスター!!」

「おじさま!!」

「ぐ……………」

僕は攻撃を受けてオーズの変身が解かれてしまう。だが今の攻撃は……………

「ほーう僕の攻撃を受けてそれだけのダメージで済むとはね……………」

その声には僕は聞き覚えがあった。いや違う……………聞き覚えとかじゃない……………間違いなこの声は。

「流石異世界僕つてところかな?」

「……………最悪だね。」

そう目の前にいたのは僕と同じ姿をしているアダム・ヴァイスハウプトがいたからだ。白いシルクハットをかぶっていた。

「おじさまと同じ姿？」

「お前はいったい誰だ!!」

「僕かい？君達も知っているはずだよ？」

「なんだと？」

「僕はアダム・ヴァイスハウプト……まあこことは違う世界から来たのだけどね。」

「並行世界……か。」

「ご名答。この世界は月が壊されていないか……まあいいさ。」

彼は持っているシルクハットを投げつけてきた。僕は手から風の弾を作りだして彼のシルクハットを相殺をした。

「ほーう錬金術をうまく使えるのかい……面白いね並行世界は。」

「何が目的だい君は……」

「決まっているじゃないか、神の力を再び手に入れるためだよ!!」

「神の力だと……」

そういうことか、つまりこの僕がかつてシンフォギアたちに敗れたアダム・ヴァイスハウプトで間違いない。だが彼の怨念をカルマノイズが吸収をしたのかこの世界で復活を遂げたというわけか。

まずいな……おそろくあいつは僕と同じならあの怪物の姿になることができ

る。だが僕はあの姿になるだけにはできない……サンちゃんたちの前で……。「まあいいさ、黄金の錬金術を発動をさせるとしようか？ここにいる全員を殺すまでのね。」

彼は上空に浮かんで大きなものを出していた。まずい……こんなところで発動をさせたらサンちゃんたちに被害が出てしまう。

ぼくはどうしたらいいと考えていたとき。

「Balwisyall Nexecell gungnir tron」

起動聖詠？だがガングニールと言ったね。僕は振り返ると響ちゃんはここで纏っているしなら誰が？

「おりやあああああああああああ!!」

上空から僕に攻撃をしている女の子がいた。あれは響ちゃん!?だが装備などはXVの装備つてことはさらに5人のシンフォギア装者たちが降りたつ。

「アダム!?まさかギャラルホルンを通つてみたらまさかあなたがいるなんてね!!」

「それに二人もいる……だがあちらは。」

「まさか君たちから来てくれるとはね。まあいいここは退かせてもらう!!」

「逃がすと思うかい!!ロックカリバー!!」

僕は地面に突き刺して岩などをたくさん飛ばしたが逃げられてしまう。

「……ちい。」

「おじさま大丈夫ですか!？」

「ありがとうサンちゃん……。」

さて問題はあつちの方かな? あちらの世界の響ちゃんたちは僕の姿を見て驚いてるね。

「なんだあれはアダムにあんな装備はあつたか?」

「それに今きいたかよ。あいつにおじさまって呼んでいたぞ!？」

まあそこまで驚かれてもしようがない。

「えっと助かったよ君達、とりあえずこっちに来てもらえたらうれしいのだけど?」

「ごめんなさい。でもあなたもアダムなんでしょ?」

「そうだね。僕はアダム・ヴァイスハウプト……パヴァリア総社の局長を務めているよ。」

「サンジェルマンたちを利用をしているの?」

「利用ね……。」

すると僕の前にサンちゃんたちが立ちふさがった。

「貴様!!おじさまに向かつて!!」

「え?」

「アダムがあーしたちを利用してはいる？冗談じゃないわ!!」
「その通りなワケだ。」

さらにはほかの幹部たちも前に出てきた。それは錬金術師たちも．．．．．
「私たちはアダムさまに助けてもらつた!!」

「そうよ!! 私たちは自分たちの意思であの方についてきているの!! だからもしこの人のことを悪く言うなら．．．．．」

全員が武器を構えている。これはまずい．．．．．

「やめないか君達!!」

「邪魔をしないでください局長!!」

「そうじゃ!! このわからない餓鬼どもを!!」

「やめろ!!」

「「!!」」

僕は思いつきり大声を出したから全員がびくつとなっていた。普段僕はこんなんで大声を出したりしないからだ。

「君達の気持ちは嬉しい、だけど彼女たちと戦つても意味がないからだ。無意味な戦いを起こさうとしないでくれ。彼女達を許してもらえないだろうか？」

「あ、ああ．．．．．」

「す、すみません．．．．．」

まあ原作の方から来ているってことはおそらく僕を倒した後だからね。とりあえず彼女たちを連れて帰る前にほかの装者たちも連れて帰らないとね。もちろん弦十郎君たちともね。

ギヤラルホルンからやってきた装者たち。

アダム side

並行世界から僕がやってきたことには驚いていたがそこからさらに異世界の装者たちも現れて僕は彼女達を移動基地へと転移をしてほかのみんなも連れてきている。

僕は局長室の椅子に座って並行世界から来た装者たちをソファーに座らせる。

「椅子に座りたまえ。」

「えつとありがとうございます。」

響ちゃんが座つたのを見てほかのメンバーたちもソファーに座らせる。扉が開いてヴァネッサ君が入ってきた。

「え!!?ヴァネッサさん!?!」

「え?」

響ちゃんがヴァネッサの名前を呼んでいたがもしかしてXVの方は終わっていたのかな? なら可能性はあるのかな?

「さて改めて僕はアダム・ヴァイスハウプト……この組織パヴァリア総社の局長をさせてもらっている。」

ますので……」

「なんか違和感デース。」

「とりあえずわかつていることは一つ……あの僕は並行世界の僕ってことで間違いないね……バルルの呪詛を解放させるわけにはいかないからね……」

「もしかしてあなたはシエム・ハのことを知っているの？」

「ああ知っているさ……エンキが発動をさせたのもシエム・ハを復活させないためつてのもね？だからこそフイーネが月を壊そうとしていたのを事前に止めたのさ。」

「つてかあたしが二人いたのはなんでだ？」

「ああそれは君のクローンをフイーネが作ったからだよ。そつくりだっただろ？僕もあれには驚くばかりさ……」

しかもヘビーアームズつて……ギアが青くなつてダブルガトリングにミサイルに胸部装甲が展開されて四問のガトリングつてほぼほぼヘビーアームズじゃないか……と思ひながらも装者とお話をすることにした。

彼女たちの方はシエム・ハとの戦いが終わつて二週間が立っているそうだ。ところが突然としてギャラルホルンが発動をして調査をするためにこの世界へとやってきた彼女達は僕の姿を見て追いかけてあそこに到着をしたそうだ。

「そして奴の目的は君たちの世界で失敗をした神の力をこの世界で手に入れようとして

いるってことか……厄介なことを……神の力を手に入れるためとはい
えな……」この世界まで迷惑だな……」

「本当に厄介ですね……申し訳ありません。」

「謝ることないさ……いずれにしても僕を止めないといけないね……（お
そらく僕はあの姿にならないといけないかもね……彼女達を守るためなら……
僕はあの姿になる。）

アダムの決断。

アダム side

「そうか……間に合わないか。」

「申し訳ありません。プログライズキーと呼ばれるものは完成をいたしました……それを制御をするベルトがまだ完成がされておりません。」

「いや気にすることはないよ。僕も急に頼んだのに作ってもらって感謝をするよ……だが間に合わないのは残念だが……」

彼はあるものを頼んでいた。それは仮面ライダーゼロワンのプログライズキーを作成をすることだった。それと同時にゼロワンドライバーも開発をしているがまだ完成をしておらず……アダムは今回の戦いでは間に合わないかと判断をして引き続き作っておくように指示を出す。

基地に警報とアラームが鳴りだした。

「来たみたいだね……異世界の僕。」

アダムは目を閉じて白いシルクハットを深くかぶり出動を命令を出して異世界のアダムのところへと向かう。

飛ばした。

「……………これが僕の正体さ……………僕の正体はただの化け物さ……………」

「お、おじさま……………」

「僕は知られたくなかった。君達と一緒にいて僕は楽しかったしこれからも君たちと接していききたいと思いいこの姿を隠してきたんだ……………」

「……………」

「所詮は人の真似ごとをする化け物でしかないってことだ……………なら僕は化け物らしく「化け物じゃない!!」え?」

僕は振り返るとアグル君が叫んだみたいだ。

「おじさまは化け物なんかじゃない!!」

「そうです!!おじさまは化け物じゃありません!!」

「サンちゃん……………」

「アダム、お前はいつたワケダ。私たちは家族だつてな。確かに隠していたことに関しては怒っている。けどそれはお前が私たちを仲間や家族だと思つての行動だろ?」

「そうねーあーしもあれだけいたのに隠されていたのは正直言えばショックよーでもその姿をさらしただけで私たちの絆が途切れるとも思っているの?」

「プレラーデイ、カリオストロ……………」

「その通りだぜ旦那!! あんたは俺達を導いてくれた救世主だ!!」

「アダムさま、私たちはあなたが人間じゃなくてもたとえそのような姿をしていても私たちはあなたさまについていきます!!」

「私たちの命はすでにあなたと共にあります。」

「アダムさま!!」

「アダムさま!!」

「カテリア、レイジ、皆………ありがとう………」

「ふんくだらない………何が仲間だ!! 何が絆だ!!」 「黙れ!!」 「ッ!!」

「君には永遠にわからないことだ。絆や愛をくだらないとっている君ではね!!」

僕は背中の中の翼を開いて右手の剛腕であいつを殴り飛ばした。

「貴様ああああああああああ!!」

「僕はもう迷わない!! お前のような奴を生かしたりしない!! 僕はアダム………アダム・ヴァイスハウプト!! 彼女達を守るために僕は戦う!!」

僕はあいつを殴っていき連続した百裂拳があいつを吹き飛ばすと僕の体が光りだす。

「え?」

突然として光出して一体何があったのかなと見ていると後ろのメンバーは僕を見て驚いている。

「お、おじさま……………」

「きれいな羽……………黒き羽に鎧……………」

「黒き羽に鎧？」

僕はいったん着地をして鏡を生成をして確か化け物の姿になっているはずだよな？
鏡を見たら僕の体には剛腕が両肩部に装着されており人間として擬態をしていた顔が
現れていた。さらに装着をしている姿がダインスレイフのような黒いアーマーのよう
になってうた。

「あれってアマルガム!？」

「ああ立花がしているような姿だ。」

「おのれええええええええええ!!」

僕の周りに皆が集まっていく。そこには僕がラツシュで吹き飛ばしたアダムが立っ
ていた。

「もう許さん!! 下等な猿が!!」

「その猴にやられた君はどうかなのかな異世界のアダム・ヴァイスハプト君。僕は君の
ようにはならない。完璧な存在など必要ないからこそ君は処分されたんだ。」

「黙れ黙れ黙れええええええええええ!!」

「皆……………いくぞ!! その前に受け取りたまえ……………僕の奇跡を!!」

僕はフォルニックゲインを響ちちゃんたちに当てると彼女たちのシンフォギア形態の姿が変わっていく。

「こ、これは!？」

「エクストライブモード!？」

「なんだよこれ!!」

初めてなった響ちちゃんたちは驚いているが僕はこのアダムギアを纏いまさかあの化け物の形態がシンフォギアのようになるとは思ってもしなかったよ。

「ふふふ。」

『アダム………笑っているよ(笑)』

「そういうリクこそ、驚いていないね？」

『僕は知っていたよ？君の中で過ごしているからね。』

そうだった、リクは僕の中にいるから考えていることなどがわかってしまうんだ。さて話は後だね？

「ぐおおおおおおお!!こうなったら………お前たちを殺してこの世界を僕のもの!!」

「させるか!!僕たちは戦うさいくぞ並行世界のアダム・ヴァイスハウプト!!」

決戦。

「許さんぞ!! 貴様たちいいいいいいいいいい!!」

並行世界のアダムは真の姿に変身をして全員に襲い掛かってきた。アダムは黒い腕を展開させて彼が放つ剛腕をガードをした。

そこにダブル響が接近をしてアダムのお腹を殴った。

「うご!?! おのれ!!」

連続した光弾を飛ばしてきたがアグルとカテリアなどが相殺をしてそこに翼などが接近をして攻撃をする。

「すげー!! 力がみなぎってくるぜ!!」

「ああ私も今までギアを纏ってきたがここまでの力は今までない!!」

「くらいやがれ!!」

「プレゼントですよ!!」

ダブルクリスはレーザー砲を放ちイリスはターゲットロックをしていた。

「くらえ!! フルバーストアタック!!」

ミサイルやガトリングの雨も命中をしてアダムは吹き飛ばされる。さらにそこにダ

ブル切歌とダブル調が接近をしてお互いのコンビネーションアタックでアダムにダメージを与えていた。

そこに黒い鎧を装着をしたアダムが肩部の拳で並行世界のアダムの顔面を殴る。

「ば、馬鹿な!!僕は君なのになんでここまで違うのさ!!」

「……僕は僕でしかない。この長い時を過ごしてきた僕は色々と見ていたからね。彼女たちとの出会いもその一つだ。そして何よりも家族として彼女たちといることで僕は心が嬉しかった。だからこそそれを否定をする君は永遠にわからないことだ!!」

そのまま殴り彼は手にダインスレイフを持つ。響達はアダムが持っている剣を見て驚いている。

「あれって!!」

「ダインスレイフ!?!」

「どうして彼があれをもっているデース!!」

「おのれ!!」

「させないアグルストリーム!!」

「雷撃砲!!」

「そーれ!!」

「くらうが いいワケダ!!」

アグル達はアダムの邪魔をさせないために並行世界のアダムに攻撃をして吹き飛ばした。

「であああああああああああ!!」

サンジェルマンとジャンヌが銃剣と槍を突き刺して彼の体を切りつける。

「おのれええええええええええ!!」

「であああああああああ!!」

ダインスレイフを持ったアダムが並行世界のアダムを切りダメージを与える。彼はそのまま蹴りを入れてそこに装者たちが手をつないでいた。

「今だよシンフォギアのみんな!!」

「皆立花に力を託すんだ!!」

並行世界の翼の言葉に全員が手を出してエネルギーが響に集まっていく。

「させるかああああああああ!!なに?」

「邪魔はさせないよ!!」

並行世界のアダムはアダムが発生させた鎖で動きを止められる。

「うおおおおおおお!!シンフォギアああああああああああああああああああああああ!!」

彼女の右手のギアが大きくなりそのまま突撃をしていき並行世界のアダムは口を開

いて砲撃をしたが彼女はそのままドリル状に回転させた拳でアダムが放った砲撃を粉砕してそのまま彼の口に突撃をして巨大なドリルが回転をして彼の体をえぐらせていく。

「ぐおおおお．．．．．」

「終わりだよ。君は再び彼女達に負けた．．．．．それはなんでかわかるかな？それは仲間や絆、そして諦めないという心が君を打ち破ったんだ。だから彼女達は今までの戦い抜いてきた。フィーネにネフィリム、そしてキャロルに君．．．．．そしてシエム・ハの戦いをね。そして今回も僕たちの絆などが君に勝ったんだよ。」

「ぐああああああああああああああああああああ！！」

並行世界のアダムは体を貫通されて響はそのまま着地をした。アダムはシルクハットをかぶり並行世界のアダムを見る。

「さようなら並行世界の僕．．．．．」

そのまま爆発をしてアダムは終わったなど呟いて爆発をした場所を見ていた。

「アダムさーん！！」

彼の世界の響が手を振ってこちらを見ていたので彼は歩いていき彼女たちのところへと到着をする。

「よく頑張ったね皆。強大な力を持った敵も恐れずによく戦った。本当によく頑張った

ね?」

「もちろんです。」

「おうさ。」

「ありがとうございますおじさま。」

「褒められたデース!!」

「えへへへ。」

「局長。」

「君達もありがとう……こんな化け物である僕を家族といってくれて……」

「まあそれはいいワケダがアダム、あの怪物の姿になることはできるのか?」

「……やってみよう。」

彼は皆から離れて先ほどの姿に変身をしようとしたがああ黒きアーマーが装着される。彼自身もこれはいいつたいと思いつつながら考えているとレイが近づいてきた。

「アダム、それは進化をしたのよ。」

「進化?」

「そう奇跡の進化つてやつね。あなたはあの化け物になることはなくなったことよ。」

「そんなことが起こるのかい?」

「普通は起こらないわよ。けどあなたのことを思う彼女たちの思いがあなたに新たな力として目覚めたってことね。」

「そんなことが……」

彼は色々と考えていることがあるが……今は解決をしたことを喜ぶことにした。

「さあ皆。パヴァリア総社へと戻るとしよう。今日はパーティーだ!!」

「「「パーティー!!」」」

何人かは目を光らせて苦笑いをしているメンバーが多かった、アダムはパヴァリア本社に連絡をしてパーティーの準備するように指示をして基地へと戻る。

アダム side

「ふう……」

僕は局長室に戻って椅子に座っていた。まさかあの化け物形態が新たなファウストローブのようになるとは思ってもいなかったし……あの化け物になることがなくなっただってのは嬉しかった。

『さらに言えばあの子たちの言葉を聞いて一番うれしかったじゃないの?』

「リク……人の心を読むんじゃないよ。」

『あはははごめんごめん。』

全く、だがリクの言う通りだから事実なんだよね? 家族として受け入れてくれた彼女

達を僕を守るためにね？

僕はプログライズキーを持ちライジンググホップキーを持ちゼロワンドライバーは完成をしないかなと待つことになる。これさえ完成をすれば三人のライダーに変身することになるからね。

ティキにイズのようにしてもらおうかな（笑）さーて……どうしようかな？
「マスター失礼します。パーティーの準備が完了をしたそうなのでお呼びに参りました。」

「速いねティキ。」

「ええ皆が手伝いをしてくれましたのですぐに終わりました。」

「わかったよすぐに行くよ。」

ティキに連れられて僕はパーティー会場へと移動をした。そこには皆が話をしており僕が到着をした。

「局長。」

「やあサンちゃんお疲れ様。」

「いいえおじさまこそ。」

「おじさまあああああああああああ!!」

「うー!!か、香苗ちゃんにメイちゃん。」

勢いよく抱き付いてきたのは香苗ちゃんとメイちゃんだった。僕は腰を抑えながらもなんとか踏ん張った・・・けど痛いのは事実だ。

「こらメイ!!」

「お姉ちゃん痛いよ!!」

「痛いよじゃない!!アダムおじさんだって痛いだよ!!」

「あははは大丈夫だよジャンヌちゃん（本当は痛いけどね?）」

僕はこつそりと腰に治療鍊金を使い回復させてほかのところをまわっていた。まあ響ちゃんたちはががつと食べているね。つてあれ?並行世界の調ちゃんが胸を見ている?!

「.....」

「えつとどうしたの?」

「な、なんで.....」

「え?」

おそらくこの世界の調ちゃんの胸が発達をしているから自分の胸を見ているからね.....僕はさすがに胸の大きくする鍊金術は知らないからな.....そういえばカリオスト口達のあの胸にしたのってサンちゃんだよな?!

「?」

そういえば彼女は男装をような格好をしていなかったな、すげー今更だけど……今はお姫様のようなドレスを着ているしいつもの格好を思いだしていた。うん移動をする時だけ男装のような格好をしていたわ。

移動をしないときはスカートを普段はいているのを……さて僕もお酒を飲みながら今回の戦いに勝利をしたので外を見ながら綺麗な星空が空を映し出していた。

「ふふ夜空に乾杯ってね？」

あんたを止めることができるのはこの僕だ!!

並行世界のアダムを倒した我らのアダムたちは勝利パーティーを開いてそれぞれでお酒を飲んだりして楽しんだ。

そして並行世界の装者たちが元の世界へ戻ることになる。

「アダムさん色々とありがとうございました!!」

「僕の方こそ感謝をするよ。またいつでも遊びに来るといいよ……」

「はい、定期連絡の時は必ず……」

「なるほど君達はほかの世界にもここだけじゃなくて別の世界にも行くことができるってことか……イイナー……僕も行きたいんだけどな……」

「「おじさま!!」」

「じよ、冗談だよ……」

サンジェルマンたちの気迫にビビってしまうアダム、並行世界の装者たちは苦笑いを見ながら彼らを見てギャラルホルンへと入っていく。

「響君。」

「はい。」

「君の拳は確かに攻撃をするかもしれない……だがつかもうとする手を離したりはしないでくれ。」

「わかりました!!」

響は入っていくと扉が小さくなりアダムはじーっと見ていた。

（あちらではシエム・ハも止めたんだ……だがもし困ったときはいつでも来たまえ、君たちも僕にとっては大事な家族だからね。）

アダムは心の中で彼女たちの無事を祈りサンジェルマンたちの方を見る。彼女達は笑顔でアダムを見ていた。

「さあ僕たちも戻るとしようか?」

「はいおじさま。」

「そうですよアダムお・じ・さ・ま（笑）」

するとレヴェリアがアダムの右手に抱き付いてきた、その豊満な胸を押し付けて。

「ちよレヴェリア君!?!」

「ふふふいいじゃないですか。」

すると左側にも当たっている、レヴェリアよりは小さいがそれでも胸が当たっているためアダムはちらつと左側を見る。

「あ、アグル君!?!」

突然として二方向から離されたので彼の両手は勢いよく自分の頬に命中をして彼は後ろに倒れてしまう。

「「おじさまああああああああああああああああ!!」」

アダム side

全くひどい目にあっただけどまあ両手を勢いよく離されてまさか自分でとどめを刺すとは思ってもいなかったよ……目を覚ましたらサンちゃんたちがごめんなさいごめんなさいとずっと謝っているし、別に僕は怒ったりしていいから大丈夫なんだけどなー……さて話は置いておいて僕は開発室へとやってきた。

「やあドクター例のあれが完成をしたって来たよ?」

「はっはっはっは!! 私の1000パーセントの頭脳により開発されたこのゼロワンドライバーですぞ!! やはり私は才能の神だああああああああああああああ!!」

うわーこの人なんだろう? 壇 黎斗神みたいなテンションなんだけど開発として一流の腕をもっている。けどそのテンションだけはなんとかしてもらえないだろうか? とりあえず僕はゼロワンドライバーを腰に装着をしてライジングホップキーを押す。

【ジャンプ】

そのままゼロワンドライバーの前に置きオーソライズする。

【オーソライズ】

無理やりではなく許可が得たのでキーを展開をしてゼロワンドライバーにセットをする。

「変身。」

【プログラムイズ！ライジングホッパー!!】

バッタ型のが出てきたときは驚いたけどそのまま僕に装着をして仮面ライダーゼロワンに変身する。

「……………」

僕は腕や足、首などを動かしていた。ライジングホッパーの姿のままとりあえずジャンプを試してみた。オーズのバッタレッグと同じ感じだね？チエックなどを完了してほかのライズキーを使ってフォームチェンジを試みよう。

「これはハヤブサかな？」

【ウイング！】

先ほどと同じようにハヤブサのライブモデルが発生をして僕の周りを飛んでいる。

【オーソライズ！】

展開されたキーをライジングホッパーキーと入れ替えてセットをする。

【プログラムイズ！ライジングファルコン！】

仮面ライダーゼロワン フライイングファルコンへと変身が完了をする。ライジングホッパーの装甲がずれてそこにフライイングファルコンがアーマーとなり姿が変わった。僕は空を飛んでいる。

「なるほど……フライイングファルコンは空を飛んだりすることが可能ってことか……タジャドルだね？」

それからバイティングシャーク、フレイミングタイガー、フリージングベアーなどをチェックしてからゼロワンドライバーを外して変身が解除される。

「アダムさまついでに武器も完成をさせております。」

「カバン？」

そこには緑色をしたカバンに青い色をしたカバン、最後は紫のカバンみたいなのが置いてあった。まさかこれが武器？

「はいアタツシユシリーズというものです。それぞれアタツシユカリバー、アタツシユショットガン、アタツシユアローという武器になります。さらにキーをセットをすることでそのキーに対応をした必殺技を使うことが可能ですよ。」

「なるほど……ありがとうドクター。大切に使用してもらおうよ。」

「いっっひっひっひっひっどういたしまして、まだまだキーは作成をしておりますので楽しみに待っていてください。」

「了解だ。」

一応今現在キーを確認をしようか？ライジングホツパー、シューティングウルフ、フライングファルコン、バイティングシャーク、フレイミングタイガー、フリージングベア、パンチングコング、ラッシングチーター、ライトニングホーネット、ブレイキングマンモスぐらいだね。

それで次に完成をするのがステイングスコープオンとアメイジングヘラクレスとガトリングヘッジホッグ、さらにはショットライザーという武器兼変身アイテムを作るぞうだ。

そういつっていると連絡が来た。

「やあどうしたんだい？」

『局長申し訳ございません、忙しいところ……実はある麻薬組織が動きだしまして……』

「なるほど……わかった。場所を教えてくださいませんか？僕自ら向かうとしよう。」

『局長自ら!?!』

『そんな!!局長が来なくても我々だけでも!!』

「いいや君達が奮闘をしているのに何もできないのはいけないからね。」

『わかりました。奴らは飛行機を使って逃走をしようとしております。我々もここを占

扱をしたら向かいます。』

「わかったよ。」

さて僕は転移石を使って彼らが使おうとしている飛行機のところへ行くとしよう。

アダム side 終了

外国。

「くそ!!パヴァリア光明総社め!!せつかくの取引が!!」

「ボス奴らはオートマシンに苦戦をしているぜ今のうちに逃亡を!!」

「逃がすとも思っているのかい?」

「「な!!」」

彼らは声をした方を見ると飛行機の前にアダムが立っていた。彼はシルクハットをかぶって彼らを見ていた。彼はシルクハットを

「き、貴様は!!」

「パヴァリア光明総社局長、アダム・ヴァイスハウプト。」

「貴様がアダムか、おいお前ら!!」

「「へい!!」」

するとボディが敗れていき機械の体が現れる。

「ロボット……」

「そのとおりだ!!お前らそいつを殺せ!!」

「へいボス。」

ボスの言う通りにロボットたちはアダムに襲い掛かってきた。一機のロボットが放つ剛腕を彼は回避をしてゼロワンドライバーを装着をする。

彼はパンチングコングキーを持ちスイッチを押す。

【パワー!】【オーソライズ!】

ゴリラ型のライブモデルが発生をしてロボットを殴っていく。

「変身。」

【プログライズ!パンチングコング!】

仮面ライダーゼロワン パンチングコング形態へと変身をした。

「な、なんだその姿は!!」

「ゼロワン。それが僕の名前だ。」

「ちいお前ら!!」

ボスの前にロボットたちが立ちふさいだ。パンチングコング形態のゼロワンはそのまま突撃をしていき一機のロボットの右手で殴り頭部を破壊した。

「な!!」

ほかのロボットたちは攻撃をしようとしたがゼロワンは振り返りロボットの胴体に

蹴りを入れて一機が吹き飛ばされる。

残りの一機を彼は必殺技を決めるためにキーを押し込む。

【パンチングインパクト!!】

右手にエネルギーを集中させて彼は走りだしてそのまま強烈な剛腕をお見舞いさせる。

パ

ン

チ

ン

グインパクト

パンチングインパクトを受けたロボットはそのまま後ろに倒れた爆発をした。

「二丁上がり。」

「ば、馬鹿な俺のロボットが簡単に破壊されるなんて!!」

するとボスの体に鎖がガチガチに巻き付けられる。

「捕まえたぞ!!」

「観念しろ!!」

錬金術師たちが走ってきてゼロワンは無事みたいで良かったと心の中で呟く。

「ご苦労さま。皆無事みたいだね?」

「アダムさま、もちろんでございませす。誰一人も死なせないで捕まえることができました。」

彼はゼロワンドライバーを外して犯人を国の警察に渡してから錬金術師たちと共にパヴァリア移動基地に帰還をした。

彼はオーズドライバー、ゼロワンドライバーを置いて腰にアークルを発動させた変身をするわけじゃないがこれを一機に三つの力を使えないかと考える。

「あ、そうか分身を作ればいいじゃん。」

彼は次に使おうかと決意を固めるのであった。

アダムの退屈な一日。

アダム side

「.....」

やあ世界の諸君、僕の名前はアダム・ヴァイスハウプトだよ。今僕は局長室の椅子に座ってクルクル回転させていたその理由は.....

「退屈だ.....」

そうこの世界暇すぎるのだ、ではどうして暇なのか原作通りならフロンティア事件が発生してキャロル率いるオートスコアラータちと激闘、さらにそこからサンジェルマたち錬金術師たちの戦いなどがあるはずだったがそれを僕が見事にぶち壊してしまったからね.....まず月を破壊するカ・ディングルは現在はこの基地の砲撃ユニットとして使っているから月が破壊する前に事件は解決をしている。

そのため月は今でも満月を見ている。いやー月見にはいい感じだよ全く。キャロル君は僕の組織の幹部をしているしイザーク君も生きている。

オートスコアラータちもこちらの味方だしさらに言えばダインスレイフは僕の鎧となっているからイグナイトモジュールは使用不能。

さらにヴァネッサ君たちも預かっているからXVは起こらないしサンちゃんたちを元々助けているからAXZもない。

「……あれ？もしかして原作ブレイクカーナーリしている……事件が起きないかな？」

僕はそう思いながら考えている。いや僕が悪人したらおそろくだけど勝てないじゃないかな？ほら彼女達僕になんというか……信用をしているからおそろく戦えないし僕もオーズやクウガ、ゼロワンを使つて戦うから並行世界のアダムよりも強いじゃないかな？

さて冗談はこれくらいにしておいてとりあえず暇なので僕はこの移動基地の中を歩くことにした。そういえば中を詳しく紹介などしていなかった気がするな。

さて移動をしてみよってきたのは新入りの錬金術師たちに錬金術とはどういうことかの講義をする教室だ。今は授業はしておらず誰もいないはずだが一人の女の子がいた。

「やあ居残り勉強かい？」

「ええつて局長!?!し、失礼しました!!」

「はははは気にしないでくれ、どうだい？色々覚えてることが多いじゃないかな？」

「ええ錬金術は色々とありまして大変ですがでも覚えるのは楽しいです!!」

「そうかいそうかい、色々大変かもしれないがわからないことがあれば局長室にも来なさい。僕が個人的に教えたりするよ。」

「ええええええええそれはちよつと。」

「構わないよ。君も大事な家族だからね？頼ってくれてもいいんだよ？」

「は、はい!!」

「さて僕は次の部屋に行くからまたーねー」

手を振り僕は次の場所へ向かう。次にやってきたのはトレーニング室だ。ここでは自身の筋力などを鍛えたりする場所でもある。錬金術は体力などが必要だからね。戦いなどになったら特にだ……そのための場所がここで行われる。

おや今日はアグル君にレイジ君がいた。レイジ君はサンドバックにパンチを入れていた。アグル君は腹筋をして運動をしていた。

まあここは声をかけずにそーつとスポーツドリンクを置いておこう。そこから移動をして僕は図書室へとやってきた。

ここにはイザークさんが作った錬金術の資料などがかかれており僕もここにお邪魔をして調べたりすることがある。

どうやら今はサンちゃんたちが授業で使用をしているみたいで僕は寄らずに移動をする。食堂へとやってきた。

「おばちゃんご飯はあるかい？」

「おやおやアダムさんじゃないかい。ええできていますよ。」

「じゃあもらおうかな？」

そういつて僕はおばちゃんからご飯をもらい椅子に座って食べる。うんおばさんのご飯はいつ食べてもおいしいね。ご飯を食べた後は局長室へと戻りまた椅子に座った。

「……………暇すぎるから外へ行こう。」

とりあえず手紙を置いてオーズドライブバーやゼロワンドライブバーなどを持っていき僕は街へと向かった。

ノイズなども出てこないの僕シルクハットをかぶりながら街を探索をする。いやー本当に暇だな……………いきなり上から少女が降つてこないかなーんてね(笑)

「ああああああああ……………」

「ライジングホッパー!!」

僕はゼロワンに変身をして上から落ちてきた女性をキャッチをして着地をした。危ない危ない……………まさか言ったことが本当になるなんて思ってもいなかったよ。

「しかし上からなんで落ちてきたんだ？」

僕は上の方を見ているがいったい誰なんだろうか彼女は……………シンフォギアキャ

必殺技も命中をして爆発した。

「さて。」

僕たちは彼女たちのところへと行き倒れている彼女を見る。

「特にロボット反応とかは出ていないね。」

「ああだがあのロボットの目的は一体？」

「とりあえず彼女を連れて帰ろう。」

僕たちは一つに戻り僕はライトニングホーネットキーを出す。

【サンダー！オーソライズ！】

キーを展開してゼロワンドライブバーにセットをする。

【プログライズ！ライトニングホーネット！】

ライトニングホーネットに変身をして背中羽を開いて僕は飛びたち基地の方へと帰還をした。だがそれが新たな事件になるとはこのときは僕は思ってもいなかった。

暴れる謎のロボット

チフォーージュ・シャトー病室。アダムは運んだ少女の様子を見ていた。医師の錬金術師は今現在彼女を介護をしていた。

「……………どうだい？」

「大丈夫ですよ。傷の方は錬金術で回復させました。ですがアダムさま彼女は上空から落ちてきたといっておりますね？」

「ああ僕も空からまさか女の子が降ってくるとは思ってもしなかったよ……………(まさかの天空の城のラピユタのようにね。)」

彼はそう呟きながらも破壊をしたロボットの残骸は回収をしていたのでプレラ―ティに調べてもらっている。いずれにしてもあのロボットは別次元からやってきたと想定を言いと判断をする。

「いずれにしても子のロボットのことを知っていそうな子は今ここで眠っているからね……………」

「そうですね、この子は一体何を隠しているのでしょうか？」

「それがわかれば苦労は……………」

アダムは通信機がなっているのに気づいて外に出る。相手は弦十郎だったのですぐに出た。

「もしもし。」

『アダムすまない、援護をしてもらえないだろうか？突然として現れたロボットに装者たちが苦戦をされていてね。』

「ロボットだつて!?!わかつたすぐに向かうよ。」

アダムはすぐに幹部たちに連絡をしてプレラーティ以外を集めて出動をした。一方で二課の装者たちはロボットに苦戦をしていた。

「この野郎!!」

イリスは肩部と腰部のミサイルロボットを開いて発射させてロボットに命中させる。だが後ろからロボットが次々に現れる。

「あーしつこい!!」

「は!!」

翼は剣を大剣にして衝撃刃を放ち撃破した。だが彼女たちはロボットたちを撃破しているがあまりの数の多さに苦戦をしていた。

「はあ………はあ………」

「くそ………多すぎるだろ!!」

「まだまだ出て来ますか？」

ロボットたちはシンフォギア装者たちにターゲットをロックをしておりそこからミサイルが放たれた。全員が目を閉じていた。

【フアング！オーソライズ】

するとサメ型のライブモデルが発生をして放たれたミサイルを撃破した。

【バイディングインパクト！】

「でああああああああああ!!」

両手に刃状が発生させて挟み込むようにロボットたちを撃破する。

バ

イ

テ

イ

ン

グインパクト！

仮面ライダーゼロワンバイティングシャークが着地をした。響達は誰？と思ったがすぐに彼は振り返り声を出す。

「無事かい君達!!」

「アダムさん!？」

「また新しい姿!？」

「そう仮面ライダーゼロワンさ、この間の戦いでは間にあわなかったからね。とりあえず……」

彼は青いカバンアタツシシュヨットガンを構えてトリガーを引きロボットたちに命を中させる。

さらにサンジェルマンたちも現れてロボットたちに攻撃をする。次々に現れるロボットを全員で当たって撃破した。

ゼロワンはシューティングウルフキーを出した。

【バレット！オーソライズ】

狼型のライブモデルが発生をしてロボットを次々に爪で切っていく、ゼロワンドライブにセットをする。

【プログライズ！シューティングウルフ！】

青い姿シューティングウルフ形態へと変わったゼロワンはアタツシシュヨットガンを使い青い狼型の弾丸を飛ばしてロボットに命中させて撃破していく。そのまま走りだして左手にエネルギー型の爪を生成をしてロボットの装甲をえぐらせていく。

「アグルストリーム。」

「ツインバレット!!」

アグルとカテリアが放つ二人の技がロボットに命中をしてサンジェルマンは援護で射撃を放ちレヴェリアとジャンヌが突撃をして剣と槍でロボットを撃破する。

「サンダークラッシュ!!」

もっている斧に雷を纏わせて地面を叩きて電撃を走らせてロボットを感電させる。ゼロワンはとどめを刺すために必殺技の態勢をとる。

【シユーンティングインパクト!】

「はああああ……」

足部に青いエネルギーを纏っていきそのまま走りだして蹴りの構えをする。狼型のエネルギーと共にロボットに命中させて撃破する。

シ
ユ
ン
テ
イ
ン
グ
イン
パ
ク
ト
!

「ほーうまさか……奴を追って来たら我々に逆らう輩がいるとはな……」
アダムたちは声をした方を見ると先ほどのロボットよりも装甲が厚そうな敵が現れた。

「何者だい君たちは彼女のことを知っているような口調だけど？」

「知っているとも……我々はレグリオス軍団。」

「レグリオス……」

「そう偉大なるレグリオス様率いる軍団とだけ言っておこう。私はその軍団長名前をレクイムという。」

「レグリオス軍団……」

「レクイム……」

「さあ彼女を渡してもらおうか？」

「悪いけど君達に彼女を渡すわけにはいかないさ。倒させてもらうよ!!」

ゼロワンはオーブカリバーを出してエレメントを回転させて一周する。そのまま上空に振りあげて振り回す。

「スプリームカリバー!!」

ゼロワンから放たれたスプリームカリバーがレグリスたちに向かって放たれる。レグリスの前にロボットたちが立ち彼が放ったスプリームカリバーを受けて爆発した。

「おのれ．．．．．我がロボット軍団をよくも!!我らに逆らったことを後悔するがいい!!」

レクイムはそういつて撤退をした。アダムは変身を解除をして響達のところへと歩いていく。

「大丈夫かい君達？」

「ええなんとか．．．．．」

「けどあの敵は一体どこから来たのでしょうか？」

「わからないな．．．．．マリアちゃんたちにも連絡をしておかないとね．．．．．」

突然として現れた謎の軍団レグリオス軍団、彼らの目的はアダムが保護をした女性だった。果たして彼女を狙う理由とは!!

目を覚ました女性

アダム side

ふう……まさかこの世界に謎のロボット軍団がやってくるとは思ってもいなかったよ。並行世界のアダムを倒して平和を取り戻したと思ったらまさか新たな敵がこの世界へとやってくるとは思ってもいなかったな。

奴らは言っていたな、あの軍団を彼女は知っていると……とりあえず起きていることを信じて僕は病室の方へと歩いていった。

「レグリオス軍団……か、まさか原作とは違う敵が現れるとは思ってもいなかったよ。」

病室の前に到着をして僕は中へと入る。彼女が眠っているであろう場所へ行くところには目を覚ましていた女性がいた。

「……あなたは？」

「目を覚ましたみたいだね。僕はアダム・ヴァイスハウプトって名前さ。君が上から落ちてきたから驚いたよ。」

「上から……そうだ私はレグリオス軍団に襲われて……それで……」

「君は奴らのことを知っているんだね？」

「奴ら……まさかレグリオス軍団と戦ったのですか!？」

「そうだ。突然として襲い掛かってきた彼らと僕たちは戦った。まあ何とかひかせたけどね。」

「あいつらを……」

彼女は僕の言葉に驚いている表情だったので僕は質問をすることにした。

「教えてくれないか？あいつらは何者で……どうして君が追われていたのかを……」

「ええ……奴らレグリオスは元々はあんな兵器軍団ではありません。元々彼らは私たちが開発をした作業ロボットたちなのです。」

「作業ロボットのどうして?」

「……ある日のことでした。奴らは突然として私たちに對して降伏宣言をしました。もちろん人間側はそんなことが許されてたまるかと作業ロボットたちに攻撃をしました。」

「だが結果は?」

「はい……彼らは自己進化をして兵器などを作りそれで攻撃をしてきました。そこからロボットたちは次々に占拠をしていき……ついに国家は滅亡……」

彼らはそこからレグリオス帝国を作り私たち人間を排除をしてロボットだけの世界を作ると宣言をしました。ある日、彼らは私にあるデータを託しました。それはレグリオス軍団のデータが入っていました。スパイの一人が命と引き換えに手に入れたものでした。もちろん彼らはそれをとり返す為に襲撃を受けました。私は仲間たちの必死の行動でなんとかこの世界へ逃げる事ができました。」

「なるほどそれが君が上空から降ってきた理由なのか……」

それがレグリオス軍団が生まれた理由か……そして彼女を追いかけるためにこの世界へとやってきたということか……僕は彼女からもらったディスクをテキキに渡してプレイヤーに持つていくように指示を出す。

いずれにしても彼らの進行を止めないといけないか……

アダム side 終了

ある世界の城。

「レグリオスさま、レクイムただいま戻りました。」

「ご苦労レクイム……随分ボロボロになったな……」

「申し訳ございません。奴がいる世界は特定をしましたが……我らに逆らう者たちがおりましてそれで苦戦をしました。」

「ほう我らに逆らうものがいたとはな……異世界の戦士と言ったな？」

「は!!」

「レクイム、お前を行動隊長一号に任命をする。必ずやあの女を捕まえるいいな?」
「もちろんでございます!!では!!」

レクイムはそういつて扉を出ていきレグリオスは玉座に肘をついた。
「あらあら随分と怒っているわねレグリオス。」

隣には人間のような女性が立っていたが彼女はアンドロイドである。

「まあなコーナリア・・・今更だが後悔はしていないのか?」

「何が?」

「お前をアンドロイドに改造をしたことだ。私は自らの体を呪っているさ・・・レグリオスってつけられたが元々は一人の人間だった俺を奴らは改造をして今の体になっっている。」

「ふふふ別に今更過ぎるわよ?」

「・・・これは我々が対する復讐でもある。だが異世界にまで手を伸ばそうとするとはな・・・」

「そうね・・・どうするの?」

「・・・やむを得まい。戦いは好きではないが・・・これ以上我々のような存在をうまれるわけにはいかないからな。それに逃げたのは私たちの娘だそうだ。」

「!!」

「……………おそらく彼女は私たちが死んだと思っ
ているからな……………」

「そうね……………」

「……………はあ……………」

レグリオスはため息をついてレクイムのこと
も気になるが自分たちの娘のこと
も気になる。

一方でアダムはマリアたちと連絡を
していた。もしかしたらそちらにも
現れる可能性があるってことを通達
して通信を切る。彼女達は現在
は日本に暮らしておりマリア自身も
日本を拠点として活動を再会して
いる。

「アダムお待たせしたワケダ。」

「やあまつていたよプレラーティ。」

「正直言つて驚くことばかりなワケ
ダ。」

「どういふことだい？」

「あの中にあつたのは脳髄だつたぞ。」

「な!!」

全員が驚いていた。プレラーティが
調べたロボットの残骸の中には脳髄
が詰められていたことを……………

「そしてもう一つこのディスクには恐ろしい計画が書かれていたワケダ。」

彼女はセットをするとそこに書かれていたのはロボット改造計画だった。奴隷の脳髓を使いロボットの体に移植して24時間働かせるというディスクだった。

「これは………」

「なんてことを!!」

「………彼女はこのことを知っているのかな?」

「いや知らないと思うわよ?」

「………プレラーティ、これを大至急二課とF I Sに送信をしてくれ。」

「了解なワケダ。」

プレラーティは大至急二課とF I Sに転送をしたときに警報が鳴りだした。街でロボット軍団が暴れているという情報だ。

「こんな時に。」

アダムたちは現場へと急行をする。街ではレクイム率いるロボット軍団が暴れていた。

「暴れる!!そうすれば奴らは出てくる!!」

「スキャニングチャージ!!」

「せいやああああああああ!!」

「タトバキツクが命中をしてロボットたちを吹き飛ばした。

「来たか!!」

「レクイムって奴か……」

「以下にもレグリオス軍団行動隊長レクイムだ!!やれロボット軍団!!」

レクイムの指示を受けてロボット軍団が襲い掛かってきた。オーズはタカヘッドの視力プラス透視能力を発動させて彼らの中を見る。

(脳髓がない!?!もしかして……レグリオスって奴だけが?)

アダムはそう思いながら右手に錬金術を発動させて大きな火球を放ちロボットたちを破壊した。

「おじさま!!」

「……彼らの中に脳髓はなかった。」

「くらえええええええ!!ライトニングクラッシュャー!!」

拳に電撃を帯びらせてそれを地面に叩いてロボットたちを次々に感電させていく。オーズはシャウタコンボに変身をしてレクイムと交戦をしていた。

レクイムが放つ斧を彼はオーブカリバーで受け止めた。

「答えてもらおうか?君達はどれくらいがロボットだということな!!」

「何を言っている我が首領レグリオスさま以下全員がロボットだ!!」

(なるほど彼らは知らないってことか……だがこれ以上街で暴れるのを見過ごすわけにはいかない!!)

オーブカリバーではじかせて、彼はオースキャナーをスキャンさせる。

「スキャンングチャージ!!」

「くらえ!!」

レクイムは斧をふるったがシャウタコンボの姿が消えてレクイムは辺りを見ていた。

「ば、馬鹿な!! センサーなどから消えることなど!!」

すると彼の両手にウナギウィップが巻きつけられてそのまま上空へと打ち上げられる。

「せいやああああああああ!!」

地面からオーズが現れて必殺技のオクトパニツシャーが命中をしてレクイムは地面に叩きつけられる。

オーズは着地をしてほかのメンバーもロボットたちを撃破していた。

「ま、まさか……この私が……やられるなど!! レグリオスさまばんざー!!!」

レクイムは爆発をしてそこにはバラバラになったパーツなどが落ちていた。プレラータイはダツシユをしてレクイムの残骸を見ていた。

「むむむむむむむこれは素晴らしいワケダ!! 異世界の技術が込められているこれをすぐに持ち帰って調べないとな!!」

「あープレラーティだったら昔の顔になっているわねー」

「あはははその通りだよ。変わらないさたとえ何百年経とうとも……な。」

「そうですねおじさま。」

「さあ戻るよ!!」

アダムたちはパーツを回収をして基地の方へ戻る。

一方で異世界

「ほうレクイムが敗れたと?」

「はは!!これがこちらの映像になります!!」

部下から映像を見てレクイムがやられる姿を見ていた。レグリオスは驚きながらもレクイムの最後を見た。

「そうか……ご苦労だったゆっくりと休むといい。」

「はは!!」

レグリオスに下がれと命じた部下はその場を去り後ろからコーナリアが現れる。

「まさか仮面ライダーがいるとは思ってもしなかったわね?」

「ああそれにあれはシンフォギアに出てきた女の子たちで間違いない。ふふふっついて

てててロボットだけど痛い!？」

「………何か言いました？」

「いいえなんでもございませんでこれ以上は関節がばちばちといえますのでやめてください。」

（また夫婦喧嘩というものをなされているなレグリオスとコーナリアは、全くこれ知っているの俺やあいつぐらいだけだぞ？元の人間の脳髓を使っているのは……）

「ようラグルター!!」

「ゲルギリオスかどうした？」

「何やっているんだと思つてな、ってあーそういうことか。」

「そういうことだ。」

「全くあいつらは体が変わろうともやることは一緒だからな。」

「だがそんな奴だからこそ俺達はついてきた。俺達元人間だった奴らもだいぶ減つてしまったからな。」

「だな、あいつらの作戦で元人間だったやつらはやられてしまったしな。残っているのは俺とお前、後はどれくらいいる？」

「いても幹部メンバーぐらいだろ？俺たち以外の後8人。」

「だいぶ減つてしまったな。」

「仕方があるまい、奴らの抵抗が思っていた以上になっているからな……」

「だな、しかしレグリオスもわざとあのデータを渡すなんてよ。」

「だな、あいつらは俺たちの弱点だと思っているがそれは違うもの、あれは俺達奴隷がこの体に移植手術をすることが書かれているのをな。」

二人は話ながら部屋を後にした。

そういうえば名前を聞いていなかったの巻。

「今思ったんだ．．．．君の名前を聞いていなかった。」

「あ．．．．．」

基地へと戻ってきたアダムは彼女と話をするために病室へとやってきたが、名前を聞くのを忘れていた。彼女の方もそういえば名前を言っていなかったわといっていたのでお互いに自己紹介をすることにした。

「僕はここパヴァリア公明総社局長をしている、アダム・ヴァイスハウプトだよ。」

「私はシリカ．．．．シリカ・ミナトです。」

「シリカちゃんか、いい名前だね。」

「ありがとうございます．．．．父と母が付けてくれた名前です。」

「そのご両親は？」

「．．．．．父と母はなくなりました。ロボット軍団によって．．．．．」

「．．．．．そうか。」

アダムはこれ以上は聞かないことにした。レグリオス軍団が元が人が移植された人物だっことを教えていない。

一方でレグリウス軍団の方では幹部たちが集まっていた。

「それでレグリウスどうする気だ？」

「……………異世界のほうに侵略をするつもりはない、だがここにいる我らは元が人間だったことを知ってもらいたいだけだから……………」

「もうこの体になってからどれくらいだったのか数えていない……………」

幹部の一人アマロイドは自身の両手を見ていた。機械の両手があり降ろした。

「さてエアログス」

「なんだ？」

「今の状況はどういう感じだ？」

「は、今だに我らに逆らっておる場所がありますが……………我が軍団達が今にも落とすでしょう。」

「……………そうか……………」

「レグリオスまだ悩んでいるのか。」

「……………まあな。確かに俺達はロボットになったときは復讐を考えたさ……………今じゃ我々ロボット軍団はこの世界を支配をしてもおかしくないぐらいの兵力になってきた。そして彼女を追ったレリオスがやられたからな。」

「なに!?!」

「仮面ライダーという奴にな。」

「仮面ライダーか……異世界に仮面ライダーがいるとは思ってもいなかったが……」

「それでそれでどうするの?」

「当面はこの世界で活動をしていく。異世界の方はほっておけばいいさ。何よりも彼らの世界には挨拶をさせてもらうだけだ。」

「挨拶ね……てかレリオスが暴れたせいでまずい状態じゃないの?」

「まあそうだな……はあ……」

レリオスはため息をついていた。一方でアダムの方は新たなプログライズキーが完成をしていた。

「シャイニングホップパーキーとオーソライズバスター完成だ。」

アダムの手にはオーソライズバスターと新たなプログライズキーシャイニングホップパーキーを持っていた。

「ほかのプログライズキーもただいま開発をしているのでしばらくお待ちください。」

「了解した。」

アダムは開発者からほかのプログライズキーの開発を待ちながらもレリオス軍団がこの世界へやってこないのが不思議に思った。

「ふーむ……不思議だな。」

一方でレグリオスが座る玉座に戦士が一人いた。

「お願いがありますレグリオスさま。」

「どうしたアクルス。」

「私にレクリスの敵をとらせてください。」

「レクリスのか？」

「は!!」

「ふーむあまり侵略する気はなかったが今回はお前が敵をとるってことでいいのだな？」

「もちろんでございませす。レグリオスさまが異世界へ侵略をする気がないのは存じ上げております。ですがレクリスが倒されたと聞き友として敵を取りたいのです。」

「わかった。アクルスお前は今日で退団扱いとする。ありがとう……。」

「はは!!」

アクルスはそのまま次元の方へと飛びシンフォギア世界へとやってきた。FISで反応が察知されてマリアたちが出動をする。

アクルスの襲来

F I Sは敵が現れたと聞いてマリアたちを出動させた。現場に到着をしたマリアたちはギアを纏いそれぞれのギアを構えてアクルスが暴れているのを見つけた。

「あれね!!」

マリアは接近をしてガングニールを槍でアクルスに攻撃をする。アクルスはマリアが放つ槍を腕で受け止めた。

「く!!」

「貴様らなどに用はない!!私は仮面ライダーを出せ!!」

「仮面ライダーですって!!」

マリアは槍で連続した突きを出す。アクルスは後ろへ下がりがり背部からローターが現れて回転をして強力な竜巻を起こして四人を吹き飛ばした。

「「「きやあああああああああ!!」」」

「出てこい仮面ライダー!!貴様がこなければこいつらを殺すぞ!!」

アクルスは右手に剣を発生させてマリアたちの方を歩いていくとマリアたちの後ろから赤い戦士が飛びあがり蹴りをいれる。

「おりゃああああああ!!」

「ぐううううううう!!」

マイティキックをお見舞いさせてアダムが変身をしたクウガが着地をした、彼はマリアたちが無事なのを確認してから敵の方を向く。

「貴様か仮面ライダーは!!」

「そうだけど君は一体。」

「俺は貴様に倒されたレリオスの親友、名前はアクルスという。俺の目的は仮面ライダー、貴様を倒すことだ!!」

アグルスは左手に砲塔を発生させてクウガに向かって放った。

「超変身。」

ドラゴンフォームに変身をしてアグルスが放った砲撃を回避をして彼は長い棒を作ってドラゴンロッドに変化させてアクルスに攻撃をする。

「甘いぞ仮面ライダー!!」

背中のローターを回転させて彼は強烈な竜巻を発生させて先ほどのマリアたちを吹き飛ばす攻撃をクウガに放ってきた。

「だったら!!」

彼はドラゴンフォームのまま何かの武器を出した、オーソライズバスターを出してフ

ライジングファルコンキーを出した。

【ウイング。】

そのままオーソライズバスターにセットをして構える。

【バスターダスト】

「は!!」

鳥型のエネルギーが発生をしてアクルスが放った竜巻を突破をしてアクルスを吹き飛ばした。

「どあ!!」

「今だ!!」

彼はそのまま走りだしてマイティフォームへと変身をしてそのままライジングマイティへと姿を変え右足にエネルギーをためてライジングマイティキックを放ちアクルスのボディに当たり吹き飛ばす。

「どああああああああ!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ライジングマイティキックが命中をしてマリアたちは彼の傍に行くが、クウガは戦闘態勢を解除をせずに見ていた。

「ぐおおおおお・・・・・・・・」

彼は立ちあがるが、胸部にクウガの紋章が発生をしており彼自身の体も火花を散らしていた。

「こ、こ、こまでか……レリオスすまん、ぐあああああああああ!!」
爆発をして残骸がその場に残っており、彼は脳髓があるのかを見ていたが当たりには回路などが落ちており彼は完全なロボットなんだと見ていた。

「おじさま……ごめんさい。」

アダムは突然マリアたちが謝ってきたので驚いていた、彼女達は別に悪いことをしているわけじゃないが落ち込んでいた。

「どうしたんだい?」

「自分たちが情けないデース……アダムおじさんが来ていなかったら私たちは負けていたデース。」

「……………」

アダムは自分がいなかったら勝てなかった自分たちが悔しいと思っっているなど彼女たちの顔を見て察していた。だが自分が来る前に彼女達が来ていなかったらこの辺は壊されていた可能性がある。

「それは違うよマリアちゃんたち、君達が早く来ていなかったらこの街はあいつが壊していた可能性がある。だからこそ僕からお礼を言わせてほしい。街を守ってくれて

ありがとう。」

「おじさま……………」

アダムは上空の方を見ていた、彼らが発生をした時空の歪みをどうにかしないといけないなど……………実はアダムはプレーヤーティに次元を超える船を作っておいてほしいとお願いをしていた。

プレーヤーティも最初は考えていたが、すぐに了承をしてイザークたちと共に開発を進めている。

「いずれにしても向こう側に行き何とかしないといけないね……………」

アダムはこのままではいけないと判断をしておりあちらの世界へ行かなければ解決ができないと……………

次元・・・・え？

アダム side

アクルスという敵を倒して数週間が立った、あれから敵の進行はなくシリカちゃんもこっちの生活に慣れてきた。僕としてもこのまま何事もないことを祈りたいけどいつ敵がくるのかわからない。

そこでプレラーティに移動をすることが出来る船を作ってもらおうようにお願いをすると彼女は科学者としての血が燃えだしたのかすぐにとりかかっていた。

さすがのプレラーティも船を一から作るから時間が「待たせたな。」え？もうできたの！?

「ふふ私をいやこのメンバーをなめないほしいワケダ。すでに完成をして外に準備をしている。アダムも来るワケダ。」

とりあえずシリカちゃんと二人で首をかしげながらも僕はプレラーティが外で待っているという言葉があつたので外へ行く、すでにサンちゃんを始め全員が外にいたので僕は驚きながらもイザークさんと共に立っているプレラーティを見ていた。

「さて皆、私たちの後ろにあるのはアダムが依頼をされた船が完成をしたワケダ。」

「てか一週間も見なかったのはそういうのを作っていたのね？」

カリオストロが呆れながら言っているが、まあ彼女はふふと笑いながら完成をした船をお披露目をするために隠していたのを外す。

「え？」

僕が見たものは青くて砲塔がついており開いたらシャトルがついていそうな……つてこれは!？」

「その名もメガシップなワケダ!!」

ですよねええええええ!!どうみても電磁戦隊メガレンジャーに出てきたメガシップとメガシャトルだよね!？」

「えつとプレラーティ、一つ聴きたいことがあるのだけど?」

「なんだアダム。」

「もしかしてまさかと思うのだけど、メガシップは合体をしたりするのかい?」

「ふっふっふっふその通りなワケダ、とりあえず全員離れてくれ。ティキ準備はいいワケダ?」

『はい準備完了です。』

ティキが乗っているのかい!!メガシップは空中に浮かびハッチがオープンする。

『電磁合体!!』

メガシャトルが飛びだしてメガシップが変形を開始、腕や足へと変わり頭部にメガシャトルが合体をして地面に降り立つ。

『完成！ギヤラクシーメガ!!』

「「（”）。」（ポカーン）」」

サンちゃんを始め全員が口が開いていた、僕はまさか前世で見ていたギヤラクシーメガが目の前にあるのだから右手にメガサーベル、左手にメガシールドを装備されている。

「まあ今回はギヤラクシーメガだけしか完成をしていないが後3機作るつもりなワケダ。」

三機つてまさかデルタメガにメガボイジャー、メガウイングーを作るつもりなのかいプレラーティ・・・・・・・・まあそれはそれで見てみたいけど・・・・・・・・ギヤラクシーメガはじーつとこちらの方を見ている。つてあれ？

「ティキ今動かしているのかい？」

『いいえ何もしていませんけど。』

「そういえばギヤラクシーメガに超高性能のAIをとりつけていたワケダ。」

『・・・・・・・・ワケダ？』

「「「しやべったあああああああああ!!」」」

『……シャベツタ?』

ギャラクシーメガは困って首をかしげているが、なるほどAIが成長をしようとしているのか、そして二課とFISのみんなを呼んでギャラクシーメガを見せることにした。

「「すげええええええええええええええええ!!」」

響ちゃん、切歌ちゃん、イリスちゃんが目をキラキラしてギャラクシーメガを見ていた。

『?』

「ギャラクシーメガ、自己紹介をした方がいいよ?」

『ジコシヨウカイ?』

「そう僕はギャラクシーメガですって。」

『……ボクハギャラクシーメガデス。ヨロシク。』

「えつと立花 響だよ!!よろしくねギャラクシーメガ君!!」

「雪音 イリスだ。よろしくな。」

「暁 切歌デース!!」

『ヒビキ……イリス……キリカ……ナマエオボエタ。』

「私は月読 調。」

「マリア・カデンツァヴァナ・イヴよ。」

「セレナ・カデンツァヴァナ・イヴです。」

「風鳴 翼だ。」

「雪音 クリスです。」

「あたしは天羽 奏だ。しかしアダムののおっさん、すごいのが作ったな(笑)」

「実際に作ったのはプレラーティだ。僕自身も驚いているよ。」

ギヤラクシーメガは自身の手に切歌、調、イリス、響を手に乗せて立ちあがり彼女たちは街の景色を見ているようだ。数分後ギヤラクシーメガはおろして座っていた。

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

ギヤラクシーメガは皆を見ながら変形をしてメガシツプになり着地をした。

「とりあえずまずは・・・・・・・・ギヤラクシーメガの技をインプットさせないと。」

「いや戦い方などは覚えさせているから大丈夫だ。後は言葉を覚えたりするぐらいだな。」

「ちなみに三機の方も同じようにするのかい?」

「同じようにするワケだ。」

「まじか・・・・・・・・」

僕はギヤラクシーメガ以外にも作って同じようにするんだね。とりあえずメガシツ

プの状態で僕たちは乗りこんで、次元を超えるための準備をする。

『………アダム。』

「なんだいギヤラクシーメガ。」

『………ドコニ行くノ?』

「次元を超えるかな?」

『……次元?』

「そう僕たちがいる世界とは違う場所のことを言うんだ。」

『………ソナトコロガアルンダナ。』

「そういうこと。さーてギヤラクシーメガ君の番だよ。」

『頑張ル。』

ギヤラクシーメガへと変形をして彼は立ちあがり次元を超える準備をして僕たちは行世界へ飛ぶために移動を開始する。

「とりあえずギヤラクシーメガで移動をするよ。奴らの場所はここから異世界の場所だつて判明をしている。つまり僕たちはこれから異世界へと向かうことになる。けどチフオージユ・シャトーを空けるわけにはいかない。まあチフオージユ・シャトーは閉じて置けば誰も侵入ができない構造になっているからいいけどさ。」

『イイノカ?』

「まあいいんだよ。問題は響ちゃんたちだよね。」

ノイズは出撃をしないけど学校とかあるからね・・・・・・・・まあ響ちゃんや調ちゃん、切歌ちゃんは駄目だね、クリスちゃんとイリスちゃんも同じだ。

「ということはおたしたちだな。」

「アダムおじさん私たちも共に行きます。」

「わかった。とりあえず行くのは三日後にしよう。」

ワープをするアダムたち。

アダムたちの世界とは違う場所、ここは天界にある場所。

「ぜえ………ぜえ………」

「大丈夫かい?」

疲れ切っている男性の後ろを苦笑いをしながら彼の背中をさする男がいた、背中をさする男は神エボルトこと如月 戦兔である。彼がここにやってきたのは宴会をするつてことで呼ばれたのだ。

「全くゼウスじいとハーデスねえもひどいね……カズマくんを女装させたりしてまあ俺もまさかあそこまで女装が似合っているとは思ってもいなかっただかくくく。」
戦兔は我慢をしていたが女装の姿を思いだして笑ってしまう。

「ひどいじゃねーか。」

「すまないすまない、さて話を戻すがカズマ君、君に依頼をしたい。」

「………依頼?」

「そうだ、神エボルトとして君に異世界へ飛んでもらうことになる。」

「どういうことですか?」

エボルトは右手を出して地球の映像がでてきた、長野にある遺跡が映し出された。

「遺跡?」

「そう、この遺跡から強大な闇が発生をしている。」

「闇?」

「そう世界を覆うほどのな、君にはこの世界へと飛んでもらいたい。」

「わかりました。すぐに向かいます。」

「まあ待て。セレナちゃんたちは連れて行けないからな。これは俺からのプレゼントだ
ジャンパーソン、ジバン。」

エボルトが言うのと彼の後ろからロボットが現れる。

「ジャンパーソンフォージャステイス。」

「機動刑事ジバン!!」

「これは……」

「これから行く世界は君でも予想がつかないかもしれない、これは俺からのプレゼント
トつてことでもらつてくれ。」

「よろしく頼むカズマ。」

「ああよろしく頼むジャンパーソンにジバン。」

エボルトは後ろに次元の扉を発生させてカズマたちは中へと突入をしてグランナス

力の船たちも突入をした。

「さーて……誰だ!!」

エボルトは後ろを振り返りドリルクラッシュヤーガンモードを構えていたが姿が見えないので彼はあたりを見ていた。

すると突然デコピンされる。

「いて!!」

ボロボロのコートが揺らいでおりエボルトはまさかと思ったが、煉と同じような感じがしたがそれ以上の力だとすぐに判明をしてすぐに武器を収める。

「……君が煉が言っていたエボルトという奴か。」

「あんたは?」

「私は帝王と呼ばれるものだ。」

「帝王?」

だが次の瞬間エボルトの前にいたはずの彼がいなくなっていた。見ると次元の扉が開いており彼はその中へ入ったのかと……

「……俺は次の場所へと行くとしよう。今回の敵は俺が想像をした以上の敵と判断させてもらった。」

エボルトはアダムの世界の闇を倒す為にはほかの異世界の戦士たちの力を借りるため

飛ぶ。

一方でアダムの世界ではメガシップにアダムたちは乗りこんでいた、クリスたちは残念そうにしていた。

「すまないね、君達は学校があるからね？」

「まあしょうがないですけどね。」

『アダムさま、全員搭乗OKです。後はアダムさまだけです。』

「わかった。それじゃあ弦十郎君この世界を頼む。」

「ああわかった。」

「シリカちゃんもいいんだね？」

「ええ……………」

実はシリカには敵の計画のことを話していた。そのため彼女は暗くなっていた。恨むべきロボットが実はかつては人だったことに……………ならあそこには自分たちの父や母がいたのかと……………だからこそ彼女はアダムたちと共に元の世界へ向かうことにした。

アダムが搭乗をしてメガシップは浮かび、開いている次元の穴に突入をして異世界の方へと飛んで行く。

「ほえええええええ……………」

メイと香苗はメガシップの外を見ていた、次元の中を通っているのに目を光らせていた。彼女たちだけじゃない全員が驚愕をしていた。

「これが異世界へと行く道なのですか？」

「おそらくね、ウヴァ達もどうだい？」

「驚いているぜ？」

「僕もだよ。」

「俺もすごい……」

「私もよ。」

「むしゃむしゃもぐもぐ。」

アंकは相変らずアイスクリームを食べていた、メガシップの中には冷蔵庫なども完備されており食材などもこちらの方に運び込んでいる。今メガシップは自動操縦で動いており運転士などはいない。

そのため会議室に集まっていた。幹部とシンフォギア装者とシリカがほかのメンバーはメガシップで調整をしたりしてチェックをしている。

「さて次元を超えた先がシリカちゃんの故郷の場所だ。僕たちにとっても初めての異世界になるからね。」

「そうですね、どういふところがあるのかわかりませんからね。」

『……データ転送。』

机の上にマップが送信されて全員が驚いている中プレラーティだけは笑っていた。

「こんなこともあるのかとギョラクシーメガに搭載をしておいてよかったワケダ。」

「いったい何を搭載させておいたのよ……」

「その場所をインプットさせる地図システムって奴なワケダ。ほらはつきりと映し出さ
れているワケダ。」

「「本当だ……」」

アダムもプレラーティ……恐ろしい子と呟くほどだ。

「ふっふっふっふ科学者をなめるなワケダ。」

メガシップは近くの場所に着地をして降りたつ。アダムも念のためにすぐに変身が
できるようにドライバーを装着できるようにしていた。

「メガシップ今のところ敵反応は？」

『……ナイ。機械音ナドモ聞コエナイ。』

「了解した。」

辺りを確認をしてシリカが降りたつ。

「間違いありません……ここは私の故郷の近くです……」

「そうか……」

アダムは異世界へと降りたつたなど感じて街などがあるのを見つけてるがボロボロの状態になっていた。

「あそこは元々ロボットたちが占拠をしていた場所です。彼らの始まりの地ともいえる場所……」

「始まりの地……」

迫ってきた敵。

「さーて異世界へと到着。」

エボルトこと戦兎は異世界の扉を使いある場所へとやってきた。すでに連絡はついており彼は待っている。と空から赤い船が降りてきた。

「おー来た来た。ゴークイガレオン。」

ゴークイガレオンが着地をすると一人の青年が出てきた。

「やあ久しぶり 武昭。」

「お前だったのか戦兎……………」

彼は緋紅 武昭 ゴークイレッドに変身をする青年であり転生者である。彼の後ろから翼やクリス、奏が現れる。

「君に依頼を頼みたくてね異世界へとやってきた。」

「わざわざご苦労なことでそれで？」

「これを見てほしい。」

戦兎は右手に発生させたアダムの地球の遺跡を見せた。

「これは……………」

「大いなる闇が復活をしようとしている、彼一人では不利だからね……そこで俺は次元を開いて君たちを送るさ。」

「あんたも来るのか？」

「ああほかの人物たちを送ってからね？」

「わかった。」

ゴーカイイガレオンに搭乗をしたのを確認をして戦兎は大きな次元扉を作ってゴーカイイガレオンが中へと入っていく。戦兎は次の場所へ行こうとしたが……灰色のカーテンが発生をして人物が現れた。

「あんたは確か門矢 零？」

「……ここはビルドの世界か？」

「いや違うけど……まあいいかあんたにも協力をしてほしい。」

「協力？」

「そうこことは違う世界で大いなる「なるほどだいたいわかった。祖の闇を潰せばいいんだな？」まあいいけどさ。とりあえずあんたもこの次元の扉を通ってくれ。」

「わかった。」

門矢 零はその中を通っていき戦兎はなんか疲れてきていた。

「さーでこれで4人だな……後何人か声をかけるとするか。」

戦兎は再び次元の扉を開いて別の世界へと飛ぶ。

さて話はアダムの方に戻りメガシップから辺りを見ているアダムたち、敵がどういところから出てくるのかわからないからだ。

「彼らの基地の場所はどこにいるのかわかりませんね。」

「ああ……いずれにしても彼らの場所を探さないといけないのは事実だね。メガシップに……」

突然としてメガシップから警報が鳴りだした。アダムたちは中へと入り確認をする。モニターが開いて相手の戦闘機タイプがこちらに向かってくる。

「あれって敵なのですか？」

「おそらく……メガシップシールド展開。敵が攻撃してきた場合砲撃許可。」

『了解。』

アダムたちは様子を見ていると敵の戦闘機から攻撃が放たれた。ミサイルがメガシップのシールドに当たるがメガシップから砲撃が放たれて戦闘機が命中して爆発をする。

アダムたちはこれがレグリオス軍団の戦闘機なのかと考えているとアダムはどうするかと考えていた。

「よし。変身!!」

【タージャードルー】

オーズタジャドルコンボに変身をして外に飛びだす。戦闘機たちはオーズが現れて驚いている。彼は左手のタジャスピナーから炎の弾が放たれて戦闘機を撃破する。

メガシップからの援護射撃が放たれて戦闘機は墜落をしていく。アダムは一気にけりをつけるためにメダルをタジャスピナーにセットをする。

【タカ！クジャク！コンドル！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！】

「せいやああああああああああああああああああ!!」

マグナブレイズが放たれて戦闘機たちを次々に撃墜されていき撤退をしていきアダムはメガシップに戻りオーズから変身を解除をする。

「ふーむ………」

「アダムさんどうしたのですか?」

「翼ちゃんか……いや敵の戦闘機達にはロボットタイプが乗っていたのを確認できた。タカヘッドを使ってみたがロボットの感じだったな………」

「ではあの戦闘機にはロボットタイプが乗っているということですか………」

「そういうことだね。いずれにしても彼らが僕らを敵と判断をして攻撃をしてきたってことだね………」

一方でレグリオス軍団の基地

「どうやら一部のロボットたちが敵と判断をして攻撃をしたみたいだな。」

「そのようだな……どうする?」

「仕方があるまい、メガシップが来ることになるとはだれも思ってもいない。(俺もだけど。)」

レグリオス達幹部はメガシップをモニターで見ていた。そして現れたオーズタジャドルコンボの力を見て圧倒的だなと思いつつ、どうするかと考える。

「いずれにしても彼らと敵対をすることは俺達ロボット軍団の数が減ってしまうことになるぞ?」

「わかつている。だがからこそどうするかだな……」

さてさて場所が変わり次元の扉が開いてエボルトこと戦兎は異世界のシンフォギア世界へとやってきた。

「この辺だったな。いつもと違う並行世界だからな……とりあえず歩く」「ノイズだああああああああああ!!」 あーもう!! どうしてこうなるの!! 変身!!」

【ラビットタンク! イエーイ!】

戦兎はビルドに変身してドリルクラッシュヤーを構えていると音声が届いてきた。

【フライングインパクト!】

「でああああああああ!!」

「なんだ!？」

上空からゼロワンフライングファルコンがノイズに回転蹴りをお見舞いさせて爆発させる。

フ

ラ

イ

ン

グインパクト

「………あれがこの世界のシンフォギアと共に戦う仮面ライダーゼロワンか。」

「あれ?なんでビルドがここに?」

「なるほど君が飛電 雅人君か………」

「あんたはいつたい………」

「俺は仮面ライダービルドGOD、神エボルトともよばれている。」

「神エボルト!？」

「ここに来たのは君に協力してほしいから来た。」

「協力?」

「そうある世界にて強大なる闇が復活をしようとしている。俺一人ではその大いなる闇

を倒すには不利なんだ。そのため俺は異世界を飛び君たちのような戦士に協力してもらいたいと思ってきたんだ。」

「なるほど、わかりました協力します。」

「感謝をする。」

戦兎は次元の扉を使い彼を連れていきさてといいながら次の場所へと向かうのであった。

レグリオス軍団の謎

「よいしょって宇宙うううううううううう!」

次元の扉を開いてエボルト事戦兎は次の世界へとやってきた。ところがその場所は宇宙だったので彼は慌ててゴツドクロスドライバーを装着してビルドに変身をした。

「あぶねえあぶねえ、って俺は神様だから宇宙でも大丈夫だったわ。とりあえずフルアーマービルドモードっ」と。

彼はフルアーマービルドモードになりそのまま宇宙を飛んで行く中船が見えてきたので彼はエボルトの力を使い侵入をすることにした。

「とりあえず体をスライム状にして中へ入るか……」

ビルドの体がスライム状になり浮いていた船の中へと侵入をした。彼はあたりを見ながら移動をしてどこかで見たことがあるような場所だなど思いつつスライム状で移動していると彼はどこかで休んで様子を見る。

「いったいどのような船だ?宇宙ステーションみたいな感じだったが……この世界は……」

「……………」

戦兎は移動をしようとした時光弾が飛んできたので彼は回避をした。そこに立っていたのはジオウ・ブレイズだ。

「ジオウ……だがこんな奴は見たことがない。」

エボルトはすぐにスライム状を解除をして仮面ライダーエボルトに変身をした。

「エボルト……なぜこいつがここに？」

（さてどうする？こいつの力を試してみるかな？）

トランススチームガンを構えてトリガーを放ちジオウブレイズはジカンギレードを出してガードをした。彼はほうと言いながら接近をして蹴りを入れる。

「ぐ!!」

彼はほかのライドウオッチを使おうとしたがエボルトはジェットブーメランを放ち彼が使おうとしたウオッチを落として拾った。

「ルシファー？なぜ墮天使のウオッチが……」

「フィニッシュタイム！ジオウブレイズ！ギリギリスラッシュュー！」

「ちい……」

【エレキスチール！】

エレキスチールを発動させてギリギリスラッシュと相殺をしたエボルト、彼はふふふと笑い彼にウオッチを返す。

「合格だ、お前の力借りるとするかな？常磐 一兔。」

エボルは変身を解除をして戦兔の姿になる。

「お前は………如月 戦兔。」

「照井から話はきいているさ。仮面ライダーベリアルのデータを盗んだのはお前だな？」

「あいつ………」

「まあ今はそんなことを言っている場合じゃない、悪いがお前にも協力してもらおうぞ。」

「どういうことだ？」

説明中。

次元の扉を開いてジオウブレイズこと一兔は中へ入っていき戦兔は再び次元の扉を開いて別の世界へと飛ぶ。

レグリオス軍団の基地。

現在レグリオスは報告を受けていた、空中部隊が襲ったが敵の攻撃によつて全滅をしたということ………

「そうかご苦労、まさか敵の砲撃を受けるとは思ってもいなかっただがな………」

「は、その通りでございます!!レグリオスさま!!どうか進軍命令をください。必ずやあ

の謎の奴らを倒してごらんに入れます!!」

「………やってみるがいい。」

「はは!!では!!」

ロボットが立ち去った後コーナリアが後ろから現れる。

「あれに勝てるつもりなのかしら?」

「正直に言えば無理だろうな……モニターで見たがああ砲撃プラスあの仮面ライダーオーズの技で空中部隊が壊滅をしたのは見ていた。だから奴らに勝てる確率は低い………」

「あらそれはロボットとしての計算をしたのかしら?」

「どちらもだ。いずれにしても見ていたらわかるさ。」

彼らはメガシップに注目をしてロボット軍団は展開されていた。メガシップの中ではアダムたちはロボットたちがこちらを包围をしようとしているのがわかっていた。

「ふむ………」

「これはロボットたちが多いワケだ。」

「おじさまどうしますか?」

「メガシップを着地させてギヤラクシーメガに変形、僕たちは外でロボットたちと戦うよ。」

「了解なワケダ。」

メガシツプは地上に降りてアダムたちは降りたつ。彼は今回はあの形態を使うことにした。

「うおおおおおおおおおおお!!」

かつての怪物の姿を力に変えてファウストローブのようになった形態になりほかのみんなもファウストローブを纏ったりシンフォギアを纏ったりして構える。

ウヴァ達もグリード形態へと変わりロボットたちは突撃をしてきた。テイキは右手をライフルに変えてスコープを発動させてロボットの一体の頭部をターゲットにしてロツクオンをして吹き飛ばす。

メガシツプは電磁合体をしてギヤラクシーメガに変形をした。

『変形をした?!』

『構わん撃て撃て!!』

飛行部隊はギヤラクシーメガに攻撃をするが左手にメガシールドを発生させて攻撃をガードをする。右手にメガサーベルを発動させて電撃の鞭、サーベル電磁ムチを発動させて飛行機部隊を次々に落としていく。

地上の方ではアダムが走って両肩部の剛腕をふるいロボットたちを吹き飛ばしている。

『数はこちらが勝っているのだぞ!!押し返せ!!』

だが彼らも戦い続けてきた戦士たち、ロボットたちは押されていた。

「おらおらおら!!」

奏とマリアのダブルガングニールの槍がロボットたちの胴体を貫いていき、そこサンジェルマンが持つ銃剣から放たれる弾丸がえぐられた装甲に入り爆発させていく。

「さーて行くわよーさー」

カリオストロの指輪が光り光弾が連続して放たれる。

「くらうがいい!!」

けん玉を振り回してロボットたちを潰していき、アダムはなんでけん玉があそこまで威力があるんだと毎回戦いながら思うのであった。

「これで終わりだああああああああ!!」

キャロルは四属性を解放させてロボットたちを囲んで砲撃をして撃破する。アダムは両肩の剛腕にエネルギーをためていた。

「くらうがいい!!アダムさーサンシャイン!!」

真ゲッターロボのストナーサンシャインのように大きな光球を作ってそれを投げつけて爆発させる。

空中部隊もギャラクシーメガのメガサーベルで次々に落とされて行き全滅されてい

く。アダムはこれ以上はいいかと判断をしようとした時に砲撃が放たれた。彼は両肩の剛腕でガードを思って思っていた以上に威力があったので後ろに下がってしまったが攻撃は完全にふさいでいた。

「威力は考えていなかったからね。驚くばかりだよ。」

『ふん!!』

ガメルが放たれた砲撃の場所に行きそのロボットの頭部を握りしめて撃破した。ギヤラクシーメガはレーダーで確認をしていた。

『敵反応ナシ。』

「よくやってくれたね皆。いずれにしても僕たちの攻撃は彼らに届くってことがわかっただけでも結果オーライだよ。ギヤラクシーメガもご苦労さまありがとう。」

『気ニシナイ。』

ギヤラクシーメガはメガシップに変形をしてアダムたちはその中に乗りこんで彼らは再び空の旅を続ける。

一方でレグリオス基地。

「………」

「も、申し訳ございません!!」

「言っただ、こんなにも大敗をしてしかもあろうことかロボットの大半を破壊され

るなど………」

レグリオスが立ちあがり、背中に装備しているメイスを抜いて失敗をしたロボットを叩き潰した。ロボットは一撃で破壊されてメモリチップなども破壊された。

「次は誰がこのようになりたい。判断で奴らと戦って死ぬのは結構だ。だがなこうやって全滅をしたのに私の前に立つことは死を覚悟をしておけいな!!」

「「「はは!!」」」

メイスを肩に担いで彼はほかのロボットたちにいい、破壊された残骸を捨てて置けと指示をして玉座に座る。

そしてほかのロボットたちは恐怖になりながらも出ていく。幹部メンバーたちは苦笑いをしながら………」

「おいおいやり過ぎだろうが?」

「こうでもしないと勝手な行動をする輩がいるからな………それにあやつはロボットぐ弾を率いて大敗、そしてその結果が我らの兵力を減らしたことになる。だからこそ奴を処刑をしないといけないのだ。」

彼はメイスをおいて玉座に再び座った。

一方でエボルト事戦兎は再び世界を飛び着地をした。彼は後ろを振り返ると黒いマントを羽織った人物が立っていた。

「やはりいたか。」

「久しぶりだな戦兔。」

「あんたもな、晃人……またを名を仮面ライダーエターナル。忙しいところだが悪いが来てもらいたい世界があつてな。」

「ほう……わかった。」

「何も言わないがいいのだな？」

「構わない。俺がやることは変わらない。」

【エターナル。】

「変身。」

彼はロストドライバーにエターナルメモリをセットを変身をする。そしてエボルトが出した次元の扉に入っていく。

【カメンライド クライム。】

もう一人の戦士もその中に入っていくのを戦兔は一瞬だけ見えた。

「あいつは……さてもう一つ世界を飛びますか!!」

戦兔は再び次元の扉を開いて飛ぶ。

レグリオス基地を探せ。

戦兎は次元の扉を開いて集結をした戦士たちを見ていた。先ほど次元の扉でユーージオという青年がいた世界へ到着をして彼の協力を得て彼らは次元空間にいた。

「戦兎、なんでこんなところに留まってるんだ？」

一兎は戦兎に聞いてきた、彼は冷静に答えを言う。

「簡単だ、今回行く世界は俺達が行ったことがない世界だからだ。なにせ俺自身もその世界へ行くのは初めてなんだ。そのためこの空間は連絡通路みたいなものだ。ここから君たちの世界へ行くことができるんだ。」

「なるほどだいたいわかった。つまりお前はここからその世界へ行くための道を作るってことか？」

「ああその為にここに戦士たちを集めているわけ。」

戦兎は素晴らしいながら作業を進めていた、その世界へ行くための場所なども今探しているのだ。

「しばらくかかりそうだ。どうも君達に見せた世界は異なっているみたいだ……」
そういつて戦兎は作業に集中をするために無言でしていた。ほかの戦士たちは彼の

様子を見ていた。

「戦兎が俺たちを呼ぶってことはかなりの悪が発生をするってことか？」

「わかりません。それにしても皆さんはほかの世界の人たちなんですよね？」

「ああそうだな。」

つと自分たちの世界の話をしたりしていた。

さて場所が変わりメガシップは空中からレグリオス基地を探していた。奏は妹の香奈と話をしていた。

「香奈はここで勉強とか教えてもらっているのか？」

「うん、助けてもらってからアダムおじさんたちに教えてもらっていたよ？色々興味深いことばかりで楽しいよ!!」

「そうか……でも生きていて本当に良かった。父さんや母さんは死んでしまったけどあんたが生きていてくれただけでも本当に……」

「お姉ちゃん……私もあの時死んだと思った。でもそこにアダムおじさんが現れてノイズを切り裂いたの……私はおじさんがかつこいい人に見えたの……それでおじさんたちに保護されてお世話になっていたの。皆優しい人で夜になって寂しい思いをした私におじさんは抱きしめて一緒に寝てくれたりサンジェルマンたちも一緒に寝てくれたりすることもあったの。」

「そうだったんだな。」

姉妹の様子をアダムは見ていた、彼は前世で残してきた妹のことを思いだした。今の香奈のような感じだったのを思いだしていた。

（といつてももう会えないけどね……妻や子どもたち……父さんや母さん、そして妹にも……）

「アダムさんどうしたのですか？」

「いや奏ちゃんとか香奈ちゃんを見ていて妹とかがいて幸せだなとね……僕は作られた存在だから妹なんてものは存在をしない……だから姉妹っていいなと思うんだ。」

「アダムさん……」

「なんてねごめんね翼ちゃん。さーて彼らの基地を探すとしますか。」

メガシップのレーダーを使って探しているがどうやらレーダーでは発見できないように細工をしており彼らは苦労をしていた。

「ふむいったい奴らはどこにいるワケダ……しかもかなり見つからないようにしているってことは高度な科学力を奴らは持っているワケダ……くつくつくつくつく絶対に見つけてその技術を教えてもらおうワケダ。」

「なんかプレラーティが黒い笑みをしているわー。」

「そういえばプレラーティは科学者だったからな……奴らの科学力に地を燃やしているわね……」

プレラーティとカリオストロの二人はプレラーティが燃えているのを呆れながら見ていた。おそらく幹部の中でアダムに続いて長いのはこの三人であろう。

「おじさま、言ったイン着地をした方がよろしいのでは？」

「そうだね、メガシツプ着地をしてくれ。」

『了解。』

メガシツプは着地をしてアダムたちは地上に降りた。錬金術師たちなどを残して幹部の数は残して彼らは地上から探索をするために万能戦車に乗りこんだ。

「これこそ私が作った万能戦車その名もバリタンクなワケダ!!」

（あーもうプレラーティに戦隊もの見せるんじゃないな……）
そうプレラーティがギャラクシーメガやバリタンクを作るようになったのはアダムが見ていたブルーレイの戦隊ヒーローや仮面ライダー、ウルトラマンなどの見て彼女の科学としての血が燃え上がり今に至る。

彼らはバリタンクに乗りこんで地上から敵の基地を探す。バリタンクのアームを起動させて邪魔な岩を砕いていき進んでいく。

「しかしまあこんなまでよー開発ができたな。」

「僕もこれに関しては知らなかったんだけどね。いつのまに作っていたのか……」
アダム自体もバリタンの存在を知らなかったのでプレラーティはニヤリと笑ってサプライズさと言った。

バリタンクを停止させてアダムたちは降りてみていた。彼はペガサスフォームに変身をして視力などが上がっているためそれで見える。

「うーん……ペガサスフォームで見えるかなって……あれは!!」

彼は前方に発進をする戦闘機が見えた。場所が特定をした彼らはバリタンクに乗りこんでメガシツプの方へと戻ることにした。

レグリオス基地に突撃。

アダム side

僕たちは彼らの本拠地と思われる場所を見つけることができた、ペガサスフォームで見た戦闘機が着艦をするのを見て僕たちはメガシップで集めた地図マップで見っていた。まさかこんなところに彼らの基地を見つけることができるとは思ってもいなかったよ。「まさかこんなところに敵の基地がこんなところにあるなんて思ってもいませんでした。」

「局長どうしますか?」

「うむ、攻めるにしても僕が見つけた場所だからね……それに地下にある可能性があるね。」

全員でどうやって攻めようか考えていると手をあげる人物がいた。

「セレナちゃん?」

「あ、あのバリタンクで地下から攻めるってのはどうでしょうか?」

「プレラーティ。」

「可能だ。バリタンクのバリハンドを回転させればドリルのように地下を進むことがで

きるワケだ。」

「ならやることは決まったね。バリタンクに搭乗をして地下から彼らの基地を攻めるっでいいかな？」

「あ、あの!!」

「シリカちゃん？」

「私も連れていってください。もしかしたらまだ父や母がいるかもしれません。」

「………わかりました。僕たちが守って見せましょう。」

となるとバリタンクは最大で6人までしか乗ることができない。ならメンバーは決まっている。

「翼ちゃん、マリアちゃん、奏ちゃん、セレナちゃんで行く。それと僕も共にいくさ。ほかのみんなは外で奴らを陽動をしてほしいいいね？」

メガシップからバリタンクが降りて僕たちはバリタンクに乗りこんでいき準備を進める。

メガシップが浮いて彼らの基地に砲撃が開始される。敵の基地もメガシップに砲撃をしているが電磁シールドでガードしているのを見てバリタンクを起動させてバリハンドを起動させてドリルのように回転をして地下へと入っていく。

「すげーなこれ………」

「ああ僕も驚いている。さて。」

僕はオーズドライバーを装着をして変身をする。

「変身!!」

【クワガタ!トラ!バッタ!】

ガタトラバに変身をしてバリタンクを操縦をして敵の地下基地に突入をした。

アダム side 終了

一方でレグリオスたちはメガシップに攻撃をしていたが突然として揺れたので何事だと言うとロボットが入ってきた。

「大変ですレグリオスさま。」

「どうした?」

「敵が地下から攻めて来ました。」

「ほう……外のは囷ということか面白いことをする。直ちに地下に侵入をした敵を撃退をしろ。」

「は!!」

レグリオスは指示を出して苦笑いをしていた。

「まさか幹部たちがいない時を狙ってくるとはな……なるほど着艦をした戦闘機を見てここがばれたということか……面白い。」

そうレグリオスは幹部たちに残っている人間たちを倒すように指示を出していた。ただし子供などは保護をするようにと指示を出しながらである。

彼はコーナリアに声をかけた。

「お前は脱出をしろ。」

「何を言っているのおそらくですけど私たちの娘が来ているのでしょ?」

「……だがそれは。」

「それにあの子ども知りたいじゃないの? 私たちが生きていることをね。」

「……」

レグリオスは後ろからメイス及び太刀を出して背部に装着をしてロボットたちがいる場所へと向かう。一方でアダムたちは襲い掛かるロボットたちに攻撃をしていた。

「せや!!」

ガタゴリバに変身をしてゴリバゴーンで襲い掛かるとロボットを殴っていた。翼はアダムから借りたアタッシュカリバーを使って攻撃をしていた。

「これ使いやすいかも。」

彼女は一旦アタッシュモードにしてチャージをする。

「チャージライズ!フルチャージ!カバンストラッシュ!」

「ああああああああ!!」

再びブレードモードにして青い斬撃刃が飛びロボットを撃破した。

「これアダムおじさまにもらおうかしら？（あげません。）」

マリアと奏は槍でロボットを刺していた。セレナが短剣でそのまま追撃をして撃破していきシリカはバリタングの中にいた。

オーズはメダルを変えて変身をする。

【サイ！ゴリラ！ゾウ！サゴーズ!!】

サゴーズコンボに変身をしてドラミングをして重力を操りロボットたちを浮かせてから地面に叩きつける。

すると突然メイスが飛んできてオーズが命中をして吹き飛ばされた。

「アダムおじさま!!」

「誰!!」

全員が武器を構えているとロボットが一人歩いてきた。アダムは起き上がり敵を見る。

「あれは……」

「さすが仮面ライダーってところだな。この基地を攻めてきただけは褒めておこう。」

「お前は……」

「俺はレグリオス、我が軍団レグリオス軍団の長とでも言うておく。」

「お前が……レグリオス。」

「そのとおりだ俺がレグリオスだ。」

お互いに武器を構えておりサゴーズコンボの姿でオーブカリバーを構えていた。レグリオスは背部から太刀を抜いて構える。

アダム対レグリオス

アダムが変身をしたオーズサゴーズコンボはオーブカリバーを振り下ろす。レグリオスは持っている太刀でオーブカリバーを受け止めた。

彼はそのまま後ろに下がりオーブカリバーのエレメントを回転させて水のエレメントを発動させる。

「アイスカリバー!!」

地面を突き刺して氷がレグリオスに向かって放たれる。彼は脚部のスラストを展開させて上空へとジャンプをしてアイスカリバーを回避する。オーズはメダルを変えて別の形態へと変身をする。

「ライオン！トラ！チーター！ラタラターラトラター！」

ラトラーターコンボに変身をしてトラクローを展開、素早い動きでレグリオスに切りかかろうとしたが彼の両目が光りだしてオーズのトラクローを回避をした。

「何?」

彼は地面にクローを立てて急ブレーキをかけて再び切りかかるが彼は持っている太刀でオーズのボディを切りつけて彼は地面を滑る。

「がは!!」

「おじさま!!」

「野郎よくもアダムを!!」

奏たちは向かおうとしたがレグリオスの指示に従っているロボットたちが邪魔をす。アダムは起き上がりメダルをチェンジをする。

【シャチ!ウナギ!タコ!シャシャシャウター!シャシャシャウター!】

シャウターコンボに変身をしてウナギウィップを使ってレグリオスに攻撃を加える。彼は持っている太刀ではじかせていきタコレッグを使った蹴りをお見舞いさせる。

「ほうやるじゃないか……さすが仮面ライダーとだけ言っておく。」

「それはどうも……だがどうするんだい?君のところは幹部たちはいない感じだが?」「きやああああああああ!!」なんだ!?!」

オーズは振り返るとバリタンクが開いて一人の女性がシリカを捕まえていた。

「シリカちゃん!!」

「動かない方がいいわよ仮面ライダー。」

「ど、どうして……お母さんと同じ姿をしているの……」

「……………」

「よせコーナリア、その子を離してやれ。」

「え………」

シリカはレグリオスが言った言葉に驚いた。今なんて呼んだか自身の母親の名前をレグリオスが呼んだからだ。全員が動きを止めていた。翼たちはロボットたちを切り裂いて辺りにロボットがないことに気づいた。

コーナリアはシリカを離すとメイスを拾ってレグリオスに投げる。彼は投げつけられたメイスを受け取り背中に収納をする。

オーズの方もシャウタコンボのまま立っていた。ほかのメンバーも武器を持ちながらも彼らの方を見ていた。

シリカは混乱をしていた、なんでレグリオスが母親の姿をした人物に母と同じ名前を言ったのか。

「ふふ混乱をしているわねシリカ。」

「え？」

「私はあなたの母、コーナリアで会っているからよ。」

「お、お母さん………」

「これはいつたい……まさか!!レグリオス君は!!」

「……………そう俺の本当の名前はアイオス。」

「アイ…………オス……………」

シリカはさらに混乱をする、アイオスという名前は自身の父親の名前だからだ。だからこそ信じられないのだ……自身らが対抗をしている敵が自分の父親と葉は親だつてことに……

「嘘よ……嘘よ嘘よ嘘よ嘘よ!!お父さんとお母さんはロボットに殺されたのになんで!!」

「……それは違うぞシリカ、俺達は殺されたのは身勝手な王国のせいだから……」
「王国!?!」

「どういふことか説明をしてくれるかい?」

「わかっている。その為に今中にいるロボットたちの機能は停止をさせている。君たちの仲間も呼ぶといい……すべてを話すときが来たようだな。」

レグリオスが歩いていくのを見てアダムたちも彼らの後ろをついていく。外では突然機械たちが機能停止をしたのでギャラクシーメガは驚いている。

『相手の機械機能停止ヲ確認。』

「これはいつたい……おじさま?」

『みんな悪いが中へ入ってもらえるかい?レグリオスと話をすることになった。』

「わかりました。」

通信を切りサンジェルマンたちも中へと入っていきレグリオスが座っている玉座の

部屋に到着をする。

「……………さてどこから話をするべきかな?」

「ねえ本当に私のお父さんとお母さんなの?」

「そうだ……………あの日お前の目の前で奴らに連れ去られたのは覚えているかい?」

「忘れもしない、私がどれだけ叫んでも離してくれなかった……………そして父さんと

母さんが死んだって知らせも……………」

「そう、確かに私たちは人間としては死んだのよ。私たちの体は特殊な合金で作られた体に作り替えられた。私の方はまだ人間のような姿をしているいわば戦闘機人ト言った方がいいわね。でもアイオスは違った。」

彼の体はまるで機械の体になっており全員が見ていると彼の両目が光りだす。

「俺自身を改造したのは王国が計画をしていたロボットシリーズの初期、つまり俺が基本的な姿をしていた。そうあいつらはその計画のために俺とコーナリアを連れて改造をしたんだ。俺自身はこのような体になってしまい人として残っているのはもう何も無い。」

「……………そんな……………」

「そしてそのあと俺たちのような奴らを連れてきては改造をして今のレグリオス軍団の幹部たちが完成をした。これが人を改造をした私たちの末路だ。家族などには死ん

だことにされ私たちはここで労働のような働きをさせられていた。そして私はマスターステムと呼ばれる装置でもある。ロボットを機能停止させたりとすることが可能となっているわけだ。聞くのは完全なロボットである彼らだけが機能停止をさせることが可能だ。」

「……ならもしかして……私たちは王様に騙されていた!?あの優しい人が……」
「あいつはそういう男だ、裏ではこういうのに手を出しているということだ。今頃奴は王国でのんびりをしているはずだ。俺達が反乱を起こしたことを隠すかのようにね。」

「なるほど……」

「アダムどうする気だ?」

「なら簡単じゃないか、その張本人を叩き潰せばいいだけだよ。まさかそんなことをしているなんて思ってもいなかったからね。」

「シリカ……」

「……」

「お前には本当の意味でつらい思いをさせてしまったな。」

「ごめんなさい。あなたを巻き込んでしまって……」

「お父さん……お母さん……」

「いいね家族は……」

「そうですねおじさま。」

「……………あのサンちゃん？」

「なんですか？」

「当たっているのだが？」

「当たっているのですよ？」

「……………」

アダムは右手に彼女の豊満な胸が当たっているが彼女は技と当てている、そのため彼女の胸がアダムの右手でむにゅむにゅと当たっていると左手にもむちゅんと大きなものが当たっていた。

「あらあらアダムさま私のことも忘れないでほしいですね。」

「レヴェリア君……………」

左側にはレヴェリアがサンジェルマンにも負けないぐらいの胸で彼の左手に抱き付いていた。

サンジェルマンは面白くないのか彼女を睨んでいた。

「レヴェリア、おじさまが困っているだろ？離れたらどうだ。」

「あらあらサンジェルマンこそ離れたらどうですか？あなただけがアダムおじさまに助けてもらったわけじゃないのですよ!!」

「シリカ……王国はな最初は大人を使っていた、だが戦争などで大人を失った子どもたちを王国はどう使うと思う？」

「まさか!!改造!!」

「そのとおりよシリカ、私たちのように今度は少年兵でも作る気じゃない?」

「……そんな!!」

「そうだ各地域に散らばせたのはそういう子どもたちを保護をするためさ。幹部たちは俺と同様元は人間だった者たちだ。」

「アグルスとかは違うのか?」

「あいつは元から機械兵だ。元人間たちはある作戦でほとんどが死んでしまったよ。」

「ある作戦?」

「そうだ、俺達機械兵たちを使った戦争だよ。あいつらにとっては遊びだと思っているけど俺たちにとっては生き地獄さ。戦って戦い続けるサバイバルみたいなものさ。」

レグリオスは呆れながら両手をあげていたが自分たちにとっては厄介なことだとい
い空を見ていた。

「さてアダム・ヴァイスハウプト殿、作戦会議と行こうじゃないか?俺たちにとって最後の戦いのな。」

「ええいいでしょう。愚かな彼らに罰を与えないとね。というわけで翼ちゃんたちは待

機をさせていてね。」

「え?」

「これから行うことは僕たちパヴァリア公明総社がする裏の仕事でもあるんだよ。」

「し、しかしサンジェルマンさんたちは。」

「私たちは人を殺したことがあるわよ。」

「そうねー昔から悪い奴らを倒してきたからね。」

「だから今更気にすることはないワケだ。」

「おいまさか香苗たちにもそれを!?!」

「いや香苗ちゃんたちにはさせていないよ。ジャンヌちゃんは僕についてきてやったことがあるけど。」

「ジャンヌ・・・・・・・・・・」

「マリア、これは私が決めたこと・・・・・・・・あの時から私はおじさまのために人を殺すつて・・・・・・・・守るために戦うから。」

「・・・・・・・・ジャンヌは強いわね。」

「強くないよ・・・・・・・・私はアダムおじさまは私たち以上に生きている。だからあの人は強いんだよ。」

(アダム・・・・・・・・)

「リク大丈夫・・・さ。僕はアダム・ヴァイスハウプトだからね。レグリオス作戦会議を開こうじゃないか。」

「ああ始めるとしようか？」

襲撃をする王国。

「ここはこの世界のでかい王国ではパーティーが行われていた。大半な計画をしていた人物たちはここに集められており王さまに近づいてきた。」

「いーっひっひっひ王様王様、子どもたちを改造をしての少年兵部隊はどうでしょうか？」

「ふふふ貴様も悪い奴だの。子どもを使った実験をしたいと言ったときは驚いたがまあいいだろう……。どうせ親を亡くした奴らなど役に立たないゴミども……。なら貴様が何をして誰も文句を言うやつはおるまい。」

「へっへっへっへその通りですわい。」

「あっはっはっはっはっは!!」

二人が笑っていると突然爆発が起こった。お酒などを飲んでいる人たちは余興かなと思っていると兵士が入ってきた。

「大変でございます!!」

「なんだ!!今はパーティーをしているのだぞ!!」

「ロボットの反乱でございます!!」

「はあ!？」

王さまは兵士たちの言葉に驚いている中、兵士たちはロボット兵たちに攻撃をしようとしていたがそこに銃弾が放たれて兵士たちは倒れていく。

「遅いわよ?」

サンジェルマンがファウストローブを纏い銃剣の剣で兵士を切っていくそこにカリオストロが着地をして拳からビームを放ち次々に兵士たちを貫いていく。

「あらーごめんなさいい。」

「はあああああああああああ!!」

ジャンヌは槍で突き刺してカテリアが二刀流で兵士の首を切っていく。

「ふ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「うおおおおおおお!!サンダークラッシュ!!」

地面に斧を叩きつけて兵士たちを感電させてレヴェリアが銃を持ちふふふと笑いながら兵士たちを撃つていき倒れていきアグルは両手に水の弾を作つてそれを放ちプレイヤーがけん玉で叩き潰す。

一方でアダムはクウガに変身をしていた。現在はタイタンフォームに変身をしてタイタンソードを二刀流で作り兵士たちを次々に切っていくタイタンソードは血だらけになっていた。

「……超変身。」

彼はペガサスフォームに変身をして遠くで狙撃をしようとしている人物を見つけてペガサスボウガンを放ち射殺。さらに連続して攻撃が来たがドラゴンフォームへと変身をしてドラゴンロッドでガードをして弾をはじいていく。

レグリオスは持っているメイスで兵士を叩き潰していた。幹部たちもそれぞれの武器を持ち攻撃をしていた。

「進め!!」

「!!」
「!!」
「!!」
「!!」
「!!」

ロボットたちの勢いが止まらずアंक達もその中におり敵を次々に切っていく。アダムはクウガからオーズに変身をしてプトティラコンボへと変身。地面を叩いてメダガブリューを出してセルメダルをセットをする。

「ゴックン! プットティラーのヒツサーツ!」

斧モードの必殺技を発動させて兵士たちを切っていく彼は倒れている兵士たちを見ていた。

「アダム殿ギヤラクシーメガは?」

「念のためにシリカちゃんたちを乗せて待機をしている。」

「……そうか。」

レグリオスはそのままメイスを持ち突撃をしていき彼も一緒に突撃をする。一方で王間の方は全員が慌てていた。兵士たちの叫び声などがここまで届いているからだ。王さまの方はいったい誰がこの国に攻めてきたのかと考えていると扉が爆発をした。中へレグリオスやアダムたちが入ってきた。

「な、何だ貴様!!」

「ほーう王様よ俺のこと忘れてしまったか? かつてあんたに仕えていたアサシスをよ。」

「!!」
「!!」
「!!」

オーズに変身をしたアダムはその様子を見ているとほかのロボットたちも入ってきて目を見開いていた。

「ば、馬鹿な!! お前たちはあの爆発で粉々になったはずだ!!」

「確かに俺達は貴様の考えた作戦で爆発で多くの奴らは死んだ。だが俺達は生き延びて貴様たちに復讐をするためにレグリオス軍団を作ったわけ、そして今お前たちに殺された仲間たちの恨みをここで晴らす!!」

「おのれ!!」

王さまは兵士たちを呼びだして彼らを倒せと言ったがオーズが前に立ちテイラノのしっぽをだして兵士たちを叩きつけて吹き飛ばす。王さまの方は顔が真っ青になっていた。ほかのパーティーに参加をしていた人物たちはすでにロボットたちによって捕

まっている。

オーズは彼に近づいていき挨拶をする。

「始めまして王様、僕の名前はアダム・ヴァイスハウプトと申します。」

「き、貴様がロボットたちを!？」

「いいえこれは彼らの意思でやっていることです。私たちは彼らの手伝いをさせてもらっているのですよ。あなた方がやろうとしている子どもたち改造計画の方は残念ながら僕たちが阻止させてもらいましたから。」

「な!!」

「まああなたの方が何もしようとしないので勝手に攻めさせてもらいました。まあ僕がやるのはあなたに対して何もしませんってことですよ。やるのは彼ですから。」

彼が後ろへ下がるとレグリオスがずしんと歩いてきた。彼はもっているメイスを構えている。

「や、やめろ!!私を殺したって何も!!」

「ああ確かに、だがな貴様のせいで俺達は娘につらい思いをさせてきた。それだけじゃないここにいるロボットたちの中では貴様によって家族と離れ離れにされたものが多いからな……そしててめえの作戦でどれだけの奴が死んでいったか……」
彼は持っているメイスを構えていた。

笑っていたのを彼は見逃さなかつた。

「レグリオス頼みがあるワケダ。」

「なんだ？」

「ごによごによごによ」

「ふむこれならすぐにできるぞ？」

「助かるワケダ。というわけでアダム、彼らと共に作るからかなり待つワケダ。」

「あ、はい。」

アダムとレグリオス

アダム side

なんか久々に話をする気がするね？僕たちはレグリオス達と協力をして王国を破壊した。そして全世界に自分たちがかつては人だったことやロボット計画の話をする。先導された人々がほかの王たちにテロ活動を始めたという。

まあ当たり前だ。自分たちも同じようにされるなんてごめんだとな．．．．．それから現在僕たちはレグリオス達と共に帰るためにプレラーティを始めの技術者たちが開発を行っていた。

メガシップはブーと文句をたれていた。当たり前だな．．．．．自分たちよりも重い人たちを乗せるなんて御免だと．．．．．

「すこしいいか？」

「レグリオスどうしたんだい？」

「なーに暇そうなお前を見つけたからな、少しだけ話をしようと思つてな．．．．．」
「いいだろう。」

彼と移動をしてどこかに座つて彼もよいしょつといい座っていた。現在彼は武器を

装備をしていない状態だ。

「さて何を話しをするんだい？」

「なーに昔の王国に仕えていた男の話だ。」

アダム side 終了

レグリオス side

さてまず俺がアサシスという名前の男性だつてのはこの間の王国の戦いで知つたな
？

「ああそうだったね。」

俺はそこで使える前の王の部下でもあった。だが前の王はある日に殺された……

それが誰かわかるか？

「まさか今の王かい？」

さすがアダムそのとおりだ、奴は前の王が邪魔だからな……そうすれば次の王は自分になれるって考えたのだろう……奴はあいつの弟だからな……なるほど、それで奴は殺して王へとなりどうしたんだい？」

奴はひそかに進めていた計画を王となったことで実行に移した。それがロボット兵団計画だ。そしてその一号に選ばれたのが俺たちだ。

「お前たち？」

そう俺を含めて100人ぐらいいたな……もちろん俺達は反対を起こした、だが俺たちの抵抗むなく改造手術を受けられてこの姿になってしまった。

俺が最初の一号機つてことでつけられた名前がレグリオスだった。それから100人のロボット兵団は完成をしていきさらに奴はほかのところからも大人を無理やり連れてきてロボット兵団を作つていった。

そしていつの間にか奴らによって改造をされていたロボット兵団たち、俺たちは地下で労働の作業を続けていた。かつての人間のように疲れたりしないため本来に俺達は機械になってしまったんだなど感じたよ……残してきた家族のこともあったが……ある日のことだった。

奴らは女性にまで手を出すようになった。そう改造をな。その中には俺の奥さんのコーナリアの姿もあった。

そして奴らによって女性たちは戦闘機人と呼ばれる存在になった。俺たちと違い子供を産めるようにな……そしてそのあとに起こった戦いで俺たちのようなロボット兵たちは奴らの罠でやられてしまった。

だが残っていたのは俺以外だと8人ぐらいだ。戦闘機人だった女性たちは戦いには参加をせずいたので無事だ。

そして俺たちはある日決意をした。奴らに復讐をすると……そして俺は奴ら

を殺してからこの基地を奪取をしてレグリオス軍団を結成させた。

「なるほどな………そんなことがあったのか………」

そうだ、俺達はロボット兵を作つて今の兵力として作つてきた。そしてこの間シリカが時空を超えてお前たちの世界へと行ったのに気づいてアクルスを向かわせたということだ。

「なるほど一致をしたよ、そして僕たちがアクルスたちを倒したのを見てこちらにやつてくると思い攻撃をしてきたつてことかい？僕たちを試すために………」

そのとおりだ。何度もお前たちを攻撃したのは奴らに対抗をするための兵力を試したかったからな………まあ結果がこうなつたからこちらとしては助かつたさ。

「気にすることはない、僕たちはこういう仕事もやっていたことがあつたからね。」

なるほど………だからあれほど人に対して情け無用で戦つていたのはそういう理由か………お前が改めて敵としてじゃなくて良かつたと自分は思つている。お前と戦うためにリミッターを外さないといけないからな………それぐらいお前をあいてにしたいくないつてことだよ。

「あはははそんなわけないだろう？」

あるから言つているんだよ。お前さんは自分の力を確信をした方がいいぞ？

「………そういうわけじゃないのだが………それで僕たちと協力をして今に

至ると・・・・・・・・・・」

そういうことだ、だからこそ感謝をしている・・・・・・・・君達がいなかったら俺達は娘に本当の意味で再会をすることができなかった・・・・・・・・感謝をする。

「気にすることはないさ。それに僕たちも異世界を知ることでもできたからね、それに君達はこれからは家族だからね？」

「家族・・・・・・・・・・か・・・・・・・・・・」

機械の体になってからシリカに対して申し訳ないと思っている。あの子には私たちがいなくなつてからの生活が大変だっただろうなどどれだけ思っていたか・・・・・・・・今はそんなことは関係ない。もうこれからはずっと一緒だ。そういえばコーナリアとシリカがひそひそと話しているが一体何をしているんだ？

レグリオス side 終了

レグリオスがアダムと話をしている中、シリカは母親であるコーナリアと話していた。

「・・・・・・・・・・」

「どうしたの？」

「いやお母さんがすごく若く見えるなつて思つて・・・・・・・・確か今つて40代だよね？」
「もう数えるのはやめていたわ・・・・・・・・この体になつてからは・・・・・・・・」

「お母さんはお父さんが機械の体になったの知ったのはどれくらい？」

「すぐにわかったわ……挨拶をした際に彼だけは私の方を見ずに下を向いていたの……おそらく私たちに対して申し訳ないという思いでいっぱいだったのよ。」

「……そうだったんだ……」

「私も最初は信じられなかったわ……自分の夫が機械の体にされていたなんて……私は一部などが改造をされている感じね……でもパーツなどは交換をしないとダメだからね。」

「なるほどー」

「それであなたはアダムさんを狙っているのかしら？」

「ぶふううううううううう!!」

突然の母親のカミングアウトにシリカは飲んでいたコーヒを吹いてしまう。

「げほげほ!!いきなりなんで!!」

「あなたが最近見ているのってアダムさんじゃないかなって思って……」

「……そうかも。」

「お母さんの強敵なのはサンジェルマンにティキちゃんかしら？」

「その二人？」

「そうねーほかのみんなも彼のこと好きそうだけど一番はこの二人じゃないかしら

？」

「なるほど……」

メモをする娘を見てこれは本気だなど思いつつ苦笑いをする母親であった。一方でアダムはレグリオスと別れて疲れていた体を休めるためにお風呂に向かおうとしていた。

「マスター……」

「テイキ……どうかな？これから僕はお風呂に向かうけど」

「ぜひ一緒にいらさせてください。」

テイキと共にアダムはお風呂の方へと入る。

テイキ side

「……」

私はマスターであるアダムさまの体を見ていた、彼の体は作られた存在だと知っていたが今は鍛えているのかムキムキなのはわかります。私はマスターのことが好きです。作られて共に行こうと言われたとき私はこの人についていくと決めていた。

それからサンジェルマンさんたちや色々な人物が増えていこうと私のマスターへの思いは変わっていない、長い年月を経ているけど本当にアダムさまは色々な人ヲ助けてきた。

ある時は倒れている人を見かけて治療医術をしたり殺されかけている人物を助けて仲間にしたりにしているのが多い。パヴァリア公明総社のほとんどがアダムさまに助けてもらった人物が多い……マスターのためなら皆は命を捨てる覚悟と言ったときのマスターの顔は悲しい顔をしていた。

あれは今も覚えている。

回想

「どうかな？」

「ありがとうございますアダムさま!!このレイジ、アダム殿のためなら命を「それは駄目だ!!」アダム殿？」

「……僕が一番に恐れているのは家族が死ぬことだ、だから命を捨てろって言うのはやめてくれ……」

「アダム殿……」

そしてアダムさまは全員を集めた。

「皆集まってもらったありがとう……君達は僕のためなら命を捨てる覚悟はあるのかい？」

「もちろんです!!」

「アダムさまのためなら!!」

「・・・・・・・・それはやめてほしい・・・・・・・・」

「「え？」」

「僕が一番に怖いのは君達を失うことだ、目の前で失ってしまう命が怖いんだ・・・・・・・・僕のために働いてくれるのはありがたいがとう・・・・・・・・でも僕が言いたいのは僕たちは家族だ。だから家族が死に行くのを見たくない。だからみんなもその言葉を言うのだけはやめてくれ以上だ。」

アダムさまは本当にお優しい方だ。だからこそ私はこの方のためなら戦うと決意を新たに固めた。

そして今はアダムさまとお風呂に入るために服を脱ぐ、アダムさまはこちらをちらちらと見ているがやはり男の人ですね・・・・・・・・私の大きな胸を見ているので彼ははつとなり自分の服を脱ぎます。

もうあなたなら私は捧げてもいいのですよ？ 処女をあなたに捧げるなんて決まっていますから・・・・・・・・ですがそろそろ私も我慢が限界です。

私だつて女の子です。まあ100年以上は生きていますけど・・・・・・・・とりあえずマスターがお風呂に入ったら計画を発動させましょう。

テイキ side 終了

そしてアダムはテイキと一緒に入ったが突然テイキがカギをした。

「え？」

突然ティキがカギをしたことに驚いていたが、彼女は素早くマットを用意をしてそのまま彼を押し倒した。

「て……ティキ？」

「……マスター、私はもう我慢ができません……私はあなたのことが好きです。」

「……」

「だから私を抱いてくれませんか？」

「ティキ……けど僕は……」

「あなたが人じゃないから愛せないわけじゃないでしょ？」

「……」

「マスターはいつもそうです。どうして一人で抱えようとしているのですか？ 私はそれを見ているのがとてもつらいです……マスターは何があっても一人で解決をしようとしています。私たちはそれほど頼りがないのですか？」

「そんなことはないよティキたちは本当にいて助かっていることはある。」

「……マスター。」

ティキはそのまま彼の唇にキスをする。さらに舌を出して彼の口の中に侵入をして

いく。

それから数十分ほどしてティキは離す。

「ふふふマスターもそのような顔をするのですね？ 私の胸が当たって顔が真っ赤ですよ？」

「……………」

彼はティキをそのままひっくり返して上になった。

「……………いいのかいティキ？ 今なら引き返せるよ？」

「私はマスターのものです、だから私の体を堪能をしてください。そしてあなたの私の中に入れてください。」

R18シーン

次元戦艦完成

次の日となり食堂へやってきたアダムとティキ。サンジェルマンたちはじーっとティキの方を見ていた。

彼女はつやつやした顔でいるからだ。そしてアダムの方はげっそりとしているので彼女の方を見るとふふふと笑っていたのを見て確信をした。

(ティキさんのあの顔まさか!!アダムおじさまとやったの!?)

(まさかティキさんに越されるなんて・・・)

(ずるいですよティキさん!!私だってアダムさまのほしかったのに!!)

幹部の女性たちはティキを睨んでいた。彼女はふふふと笑っているだけなのでアダムはそれが宣戦布告だつてのが見えていない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
彼は机に倒れたまま動こうとしない。

「これは青春かな?」

「ふふ懐かしいわね・・・・・・・・」

レグリオスとコーラサナはアダムの様子を見て昨日は楽しみなかなと思いつながら彼女

たちの様子を見ていると食堂の扉が勢いよく開かれた。

「出来たワケダって………なんか空気がすごいことになっているワケダ………」
そこに現れたのはプレラーティイだった、彼女は食堂の空気がいつもと違うことに驚きながらもアダムのところへとやってきた。

「アダム寝ているところ悪いが起きてもらおうワケダ。」

「………ああプレラーティイじゃないか………どうしたんだい？」

「それはこちらの台詞なワケダ。まあ一応なんとなく察したが………えつと次元戦艦が完成をしたことを報告をしに来たワケダ。」

「そうか完成をしたんだね？」

「そういうことだ。とりあえず起きてくれないか？」

「あ、ああすまない。」

彼は立ちあがろうとしたがバランスを崩してしまいかけたが素早くサンジェルマンとカテリアが両手を支えてくれたので彼は倒れることはなかった。

「大丈夫ですかおじさま？」

「アダムさま大丈夫？」

「ありがとう二人とももう大丈夫だよ。」

「いえいえこのままお供をさせてもらいますわ。」

「そうそう。」

二人は彼を引きずりながらプレラーティが完成をさせたという次元戦艦の場所へとやってきた。

「全員きたわけだ!! 私たちはついに第二のロボットもついに出来上がったワケだ!!」

「「「おおおおおおおおおおおおおお!!」」」

「スゴイ盛り上がりだね……」

アダムはそう呟きながらプレラーティは話し続けてまずは第二のロボットを紹介をする。

「ギヤラクシーメガをサポートをするために作ったデルタメガなわけだ!!」

隣に立つギヤラクシーメガが布を引つ張り現れたのはデルタメガだ。両手にはガトリングプラスチックを装備されている機体でギヤラクシーメガと合体をすればスーパーギヤラクシーメガへと合体ができる。

『これが俺の兄弟機?』

「そうだデルタメガはお前の弟になる。」

『俺の弟……』

『ふあああああ……あれ?ここはどこだい?』

「始めましてデルタメガ、僕はアダムだよ。」

『アダム……隣にいるのは僕の兄さんかい？』

『ギヤラクシーメガだ。よろしくな。』

『はい兄さん。』

お互いにロボット同士握手をしてプレラーティは二機に戦艦の布をとるように指示を出す。

『いくぞデルタメガ。』

『はい兄さん。』

『せーの!!』

二人が引つ張り新たな次元戦艦が登場をした。アダム自身は苦笑いをしていた。なにせそこにあつたのは……

「名付けてミネルバナワケダ!!」

(ですよねええええええええええ!!)

そうアダムは前世の記憶で見たことがある戦艦だなど思い見ていたが、ガンダムシードステイニーの戦艦のミネルバだ。

武装なども再現されており前部には陽電子砲が搭載されていた。レグリオス達の技術がなかったら絶対に作れそうにないなと思つたがギヤラクシーメガを作っているのプレラーティならやりそうだなとアダムは思つた。

「これを使って元の世界へと帰るワケダ。すでに準備は完了をしているワケダ。」

「わかったそれじゃあ皆帰ろう!!僕たちの世界へと!!」

「「「おおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」」」

「やつと帰れるか。」

「あれ?アंकは楽しくなかったの?」

「アイスが食えないからな!!」

「あんたはアイス脳なのかしら?」

「まあアイスは上手いからな。」

「ガメルもアイス大好き!!」

ウヴァとガメルはアंकから進められてアイスを食べたが二人もはまっているので帰ってからのアイスを楽しみにしている。

だが日本の長野にある遺跡。

「.....ふふふふふ。」

白い服をした女性が笑っていた。

「やつとやつと会えるんだね。彼に.....そう僕を倒したあのクウガにあはははははははは!!」

「ン・ダグバ・ゼバ様。」

「んーなんだい？ゴ・ガドル・バ？」

「お願いがあります。奴とは私に戦わせてください。」

「んーいいよーほかのみんなも戦いたみたいだけど？」

そう彼女以外に復活したのはゴ集団のみなのである。ほかの集団はまだ復活をしていない。

「まあいいかー楽しみなーあはははははははははは!!」

彼女は笑いながら再び戦えることに喜びを感じた。

復活の闇

アダム side

次元戦艦ミネルバはメガシップ及びデルタシャトルと共に空間を通り僕たちがいる世界へと帰ってきた。ミネルバは近くのチフオージユ・シャトーに着地をして翼ちゃんたちは報告をするために二課へと戻っていく。

『アダム!!』

リク?どうしたんだい?

『ああすまない、何か嫌な予感がするんだ。』

嫌な予感?それってどういう……!!

「なんだこの闇の気配は……いや僕は知っている!」

そうこの感じは日本がまだ古代時代の時に感じた力と同じだ……僕はすぐに転移をして長野の遺跡に到着をした。サンちゃんたちを置いてきたのは今回ばかりは嫌な予感しかない。

『アダム……』

「ああこの感じ……あの闇との最終決戦時と同じ感じがする。」

僕はあたりを歩いてしていると突然何かが降ってきた。僕は回避をすると何か落ちていた。

「これは………」

地面に刺さっている矢を拾うと僕はアークルを出現させて変身をする。

「変身!!」

クウガに変身をして何かが地面をえぐる、鉄球のようなものを振り回す敵がいた。

「あれは………」

『グロンギ!? そんなバカな………僕たちが倒したのに何で!!』

「クウガ………またお前と戦える。」

まさか相手はゴ集団か………厄介な相手だ。僕でも苦戦をする敵で武器を使い戦う相手だ。

特に最後付近で戦った三体は自身の体をその能力に応じた姿に変えて戦う敵だったのを感じている。

「ちい!!」

さらに鞭などが放たれて回避をすると地面が凍っていくのを見てみると僕を囲むようにゴ集団がいた。そして真ん中にカプトムシのグロンギが立っていた。

「お前は………クウガだが俺が戦ったクウガじゃない、思いだした………メ

ダルを使って戦った敵だな？」

「そのとおりだよ。僕は君達と戦ったメダルの戦士の方だよ。」

まさかこいつらが復活をしているとは思ってもいかなかったけどならこの強大な闇は
いったいなんだ!?

すると白い服をした女性がふふふと笑いながら現れたけどなんだこの闇は!?

「へえーまさか君がクウガになるなんて思ってもいなかったよ、あははははははははは
!!」

「お前は!!」

「僕?んーんーんーダクバ・ゼバだよー」

「なん．．．．．だと．．．．．」

『ン・ダグバ・ゼバ．．．．．かつて僕とアダムが苦戦をして倒した相手．．．．．』
僕たちの目の前に現れた人物はかつて僕とリクが戦い倒した Gron ぎ達の王とも言
える人物、ン・ダグバ・ゼバだった。

だが変だ、封印をせずに倒したはずなのになんで彼らは蘇っている?

「ふっふっふ闇は永遠だよ? 君達が僕たちを倒してからどれくらいたっていると思っ
ているの? ふふふふふ。」

彼女は笑いながら言うので不気味に思っていたすると彼女は右手をつきだしてこち

らに放つてきた。

「ぐあ!!」

突然放たれた衝撃波が放たれて僕は壁にめり込んでしまう。

「なんて威力をしている……」

『僕たちが以前戦ったときよりも強くなっている!』

放たれた衝撃波を受けて僕は膝をついてしまうほどの威力だった。あいつは完全に復活をしているのだろうか? それもわからない状態だ。

「さーてどうする? 君一人で僕たち相手に戦えるの?」

「……」

辺りからゴ集団が動いて僕に襲い掛かろうとした時砲撃が放たれて僕は何事かと空を見ていると赤い船がこちらにやってきて砲撃をしていた。さらに別の次元戦艦でいいのかな? ってあれはグランナスカ!? ゴーカイガレオンにグランナスカがどうしてここに!?

「なんだいあれは?」

すると上から人物たちが降りてきて着地をした。

「ようやく別の世界とつなげることができた……時間がかかっちゃまったな。大丈夫かい?」

「君は仮面ライダービルド?」

「ビルドはビルドでもビルドGODって呼んでくれてもいいいぜ?」

「ビルドGOD?」

神のビルドってことかな?僕は考えているとゴ集団が襲い掛かってきた。

ユージオとスピルバンが走って青薔薇の剣とツインブレードで攻撃をしてダメージを与えたところにジャンパーソンとクリス、ジバンが攻撃をして一体を吹き飛ばす。

ゴークイレットと翼、奏の三人がゴ・バベル・ダに攻撃をして彼のメリケンサックを攻撃をしてゴークイガンで攻撃をする。

ゴ・ベミウ・ギがはなつ鞭をエターナルはロープでガードをして銃モードにしたジカ
ンギレードを構えるジオウブレイズが放ってダメージを与える。

さらにエターナルがマントを取りユニコーンメモリを発動させる。

【ユニコーンマキシマムドライブ!】

「はあああああああ!!」

「ぐお!!」

ダークデイケイドとゼロワンはゴ・ガメゴ・レの振り回すハンマーをかわしてブラストとアタッシュショットガンを放ちダメージを与える。

クライムがファイナルアタックカードを装填する。

「ファイナルアタックライド ククククライム」

放たれた砲撃がゴ・ジイノ・ダに命中をして爆発をする。ゴ・バター・バは愛用のバイクに搭乗をして動こうとしたが動けない。

「無駄だ、お前の時間は私が止めた。」

メルクリウスは剣を持ちそのまま連続してゴ・バター・バを切りつけていき彼は指を鳴らすと彼は爆発をした。

ン・ダグバ・ゼバはフーンと見ていると上空からビルドがボルティックファイニッシュを発動させて蹴りを入れようとしていたが彼は衝撃波を放ちビルドGODを吹き飛ばした。

「ぐ!!」

「まあいいかこれ以上は減ったら困るからね撤退をするわよ。」

それを聞いてゴ集団は撤退を開始をして僕は何とか立ちあがり彼らにお礼を言う。

「ありがとう……君たちがいなかったら僕はやられていたよ……」

「気にすることはない、ただ俺達の到着が遅れてしまったからな……悪いが君の基地に案内をしてくれないか？そこで詳しく話がしたい。」

「わかったよ。」

僕は彼らを連れて帰ろうとした時に転移石が発動を感じて現れたのはテキキたちだ。

「マスター!!」

「おじさま大丈夫ですか!!」

「ちよつとね、彼らに助けてもらったから平気だよ……」

彼らを連れて僕たちは基地へ戻ることにした。

会合

アダムは復活をしたン・ダクバ・ゼバとの戦いで苦戦をしていたところ現れた謎の戦士たち、彼らを連れて移動戦艦ミネルバが着地をしている場所へと戻ってきた。

「まあ座つてくれ、改めて僕はアダム・ヴァイスハウプト……このパヴァリア公明総社の局長をしている。先ほどは助けられてありがとう。」

「気にすることはない、さて俺達を紹介しようかな？初めまして俺の名前は如月 戦兎……またの名を神エボルトという。」

「神エボルト……そのような方に助けてもらったのですね。感謝をします。」

「気にするのではない。俺はいや俺達はこの世界で起ころうとしていることを止めるためにこの世界へとやってきたんです。」

「はあ……もしかしてグロンギたちのことですか？」

「それもそうですが……とりあえず自己紹介をした方がいいでしょう？まあまずは彼から自己紹介をしてもらいましょうか？」

『初めまして私の名前はカズマといいます。スピルバン及びシンクレッターに変身が可能ですね。』

「ちなみに彼は私の部下みたいな感じですが仮面についてはいろいろとありましてね？」

「はあ……」

「僕はユージオといいます。」

「神崎 龍だ。」

「常磐 一兔だ。ジオウ・ブレイズに変身をする。」

「緋紅 武昭だ。ゴーガイレットに変身をする。」

「まあこの世界でもあたしがいるかもな、天羽 奏だ。」

「風鳴 翼です。」

「雪音 クリスだ。」

「飛電 雅人です。ゼロワンに変身をします。」

「僕もゼロワンになることができるんだよ？」

アダムはゼロワンドライバーを出してからすぐにしまう。

「俺は大道 晃人だ。」

「通りすがりの仮面ライダーだ覚えておけ。」

「後は一人いたはずだけどどこにいった？」

帝王ことメルクリウスがいないのである。戦兔は頭を抑えながら煉の友達はどう

なっているんだよとも思いつつこの世界へ改めてやってきたい理由を話すことにした。「俺は神として色んな世界を見てきました。この世界の遺跡でなぞの大きいなる闇の力を感じたんです。だが俺一人ではあれを抑えるのは不利と判断をして色んな世界に行き彼らに協力をしてもらったんです。」

「なるほど、ン・ダクバ・ゼバたちは謎の闇で復活をしたってことですか?」

「そういうことになります。」

『神エポルトさま、あのあなたが言っていた闇とはいったい?』

カズマが言うが戦兎はうーんと答えを渋っていた。

「なんだよ戦兎、まだ正体とかわかっていないのかよ。」

「残念ながらお前の言う通りだ一兎……俺自身もまだ確信を得ていなかったから答えを出すわけにはいかなかったんだ。」

「といたしますと戦兎さんは何かを感じていたのですか?」

「そのとおりだよユージオ君。だがこの大なる闇はン・ダクバ・ゼバ以上の敵と思ってくれていい……そして俺はン・ダクバ・ゼバ以外にもそこから二つほど大きな闇を感じた。」

「闇をか?」

「そうだ。武昭やユージオ君の世界で言うところだ……ネフシユタンの鎧と言っ

「の方がいいだろうな。」

「「「「ネフシユタンの鎧!?!」」」」

「そういえば雅人くんもシンフォギア世界だったね。」

「はい、まさか戦兎さんが感じた力つてのは聖遺物の力つてことですか?」

「ああいずれにしても俺自身も今回の目的はこの闇をはらすことが目的でもある。この闇はいずれ別世界をも包み込む可能性があるからだ。」

戦兎の言葉に全員が驚いている。龍と零もその話を聞きながら見ている。

「とりあえず君達の協力を感謝をします。部屋はたくさんあるので案内をさせますね? ティキ。」

「はいマスター。では皆さまこちらになりますのでついてきてください。」

(ティキ………確か幼い容姿のはずだったが?なぜギンガ・ナカジマの姿をしている?)

戦兎は前世の記憶のティキと自身が見ているティキが違うのに驚きながらも案内をしてもらって部屋に到着をする。

戦兎と同じ部屋なのはカズマである。

『戦兎さん、どうしたのですか?』

「ああカズマ君、君も前世の記憶をもっている人物ならシンフォギアことは知っている

ね？」

『はい、確かテイキの容姿は．．．．．小さい子のような感じでしたが．．．．．』
「そう俺が知っているテイキと彼女の容姿が違い過ぎる。だから驚くばかりなんだよ．．．．．おそらく彼は僕らと同じだろうね？ここまで来るのに見てきたが彼女達は彼を信用をしている。」

『信用ですか？』

「そのとおりだ。カズマ君．．．．．念のためにダイレオンをいつでも使えるようにしておいてほしい。」

『ダイレオンのほうですか？』

「そうだ、巨大戦とかがある可能性がある。」

『わかりました。念のために準備などをしておきます。』

「すまないな。君だって本来は．．．．．だがあれを使ってしまった以上俺でも許しを得ることができなかつた。」

『気にしておりませんよエボルトさま、感謝をします。』

「本来だったら俺がする仕事を君に任せてしまっている。俺は．．．．．」

『エボルトさま．．．．．』

ほかのメンバーたちも武昭が奏たちと、ユージオ、零、雅人、一兔の部屋、龍とメリ

クリウスの部屋と別れていた。

一方でン・ダクバ・ゼバは無事だったゴ集団を見ていた。

「あらら二人やられたんだ。」

「はは、突然として現れたやつらによって仲間が二人やられました。」

「困ったねー」

「なら私たちに協力をしてくれますか？」

「だーれ？」

そこに現れたのはネフシユタンの鎧を纏ったフィーネの姿だ。

「君は誰？」

「私の名前はフィーネ、あなたに協力をするために参りました。」

「僕のかい？」

「貴様……ただの人間ではないな？」

「ふふあなたたち同様闇によって蘇ったものだけ言っておくわ。」

フィーネはふふと笑いながら後ろにいる黒い化け物を触っていた。

『ぐおおおおおおおおおお……』

「そいつは？」

「こいつの名前はネフィリム、かつて私たちはある人物たちのよって倒されたものよ。」

そこを大いなる闇が復活をさせた。」

「「大いなる闇」」

ゴ集団はン・ダクバ・ゼバを見ていた。

「僕じゃないよ？復活させたのだからだいたい君たちだって僕がやられたのを知っているでしょうが、地獄で麻雀をしてゴ・ガメボ・レが負けたところで復活をしたのだから後で払ってね？」

「え、今ですか．．．．．お金地獄に置き忘れたんですが？」

「むーじやあ、ゴ・ジャラジ・ダでいいや。」

「いやいやなんで僕!?!」

「．．．．．」

ン・ダクバ・ゼバはゴ・ガドル・バを見ていた。

「ン・ダグバ・ゼバさまなぜ私を見ているのですか？」

「お金ちょうだい？」

「．．．．．はい？」

「お・か・ね（笑）」

「．．．．．お金ですか？」

ちらつとほかのメンバーを見ているが全員が顔を背けたのでこの野郎と思うゴ・ガド

ル・バであった。

一方でアダムは中にいるリクと話をしていた。

「リクどう思う?」

『そうだね、あのン・ダクバ・ゼバは女性になっているが僕たちが戦ったやつで間違いないね。アダムもそれはわかっているでしょ?』

「ああゴ集団は僕たちが力合わせてなんとか倒せる相手だったからね。」

『そう一体一体が強力な力で今まで戦ってきたメ集団やズ集団よりも強かった、奴ら自身も僕と同じく変身をするには驚いたけどね?』

「ああ僕もそれは思ったよ。」

『そうだから彼らと協力をして戦えばなんとか戦えるけど問題はそこじゃないね?』

「ああ誰が彼らを蘇らせたかだ。」

二人の疑問はそこである。かつてアダムとリクは彼らを倒した。二人で放ったダブルライダーキックでン・ダクバ・ゼバのベルトを破壊をして爆散させた。だから奴らが蘇ることはないと判断をしたが彼らは復活をした。

「まだ彼らだけなら僕たちで対処はできるが、ズ集団とかが蘇っていたら大変なことになるっていたね。」

『ああアダム。』

「わかっている彼らと協力をするさ。」

彼はそういつてふうと座りゴ集団にン・ダクバ・ゼバか・．．．と呟くのであった。

ネフィリムとゴ・ガメゴ・レ

アダムは局長室の椅子に座りながら、かつて戦った大いなる闇ことン・ダクバ・ゼバのことを思いだす。

突然としてリクがいた村を襲撃をして、村人達が次々に殺されて行きリクは怒りでアルティメットフォームに変身をして彼に攻撃をする。だが怒りでの変身は彼の冷静さなどを失わせていた。

アダムはオーズに変身をして彼を止めようとしたが今度は自分に攻撃をしてきたのを止めるために戦つたりしてリクの意識を取り戻して二人でン・ダクバ・ゼバと猛烈な戦いをしたことを……

「……また始まるうとしているのか……あいつとの戦いが……」
『アダム……』

彼は考えていると警報が鳴りだした。アダムは立ちあがり一体何があつたのかとモニターを見ると街でネフィリムが暴れているのを見て驚いている。

「ネフィリム!?なぜあれが……」

彼は考えても仕方がないと他の人達も一緒に連れて行く。戦兔は今回はビルドじゃ

なくともう一つの姿に変身することにした。それに合わせてカズマも変身をする。

「ブラストアップ!!」

「実装!!」

「ジャンセクター!!」

「シンクレッター!!」

他のメンバーもクライム、ゴーカイレッド、ジオウブレイズ、ゼロワン、エターナルに変身をして現場に到着をしてアダムは改めてネフィリムを見る。

「やはりネフィリム………だけどあいつは僕が倒したはずなのに………」

「そうですね。ジバン！ジャンパーソン！行くぞ!!」

「了解した」

「わかった!!」

ネフィリムは咆哮をしてこちらに気づいて襲い掛かってきた。アダムはクウガに変身して回避をする。

クライムはクライムドライバーを持ちトリガーを引きネフィリムにダメージを与える。

「おりゃあああああああ!!」

「はああああああああああ!!」

「おら!!」

奏、翼、ゴークイレッドは剣などで攻撃をしてネフィリムにダメージを与える。エターナルはローブを投げつけてネフィリムは顔にローブが絡まり見えなくなる。そこにユージオが走ってホリゾンタルを発動させて水平切りで切りつける。

ジオウブレイズとゼロワンはダブルで飛びあがり蹴りを囓ませる。

「いくぞカズマ君!!」

「はい!!」

「トルネードバースト!!」

ダブルで放ったトルネードバーストがネフィリムに当たりネフィリムは吹き飛ばされる。

「止めは任せるよアダム君!!」

「はああああああああああああああああああ!!」

クウガは走り飛びあがりマイティキックをお見舞いさせようとしたが突然鉄球が彼に命中をする。

「がは!!」

「アダムさん!!」

現れたのはゴ集団の一人ゴ・ガメゴ・レである。彼は鉄球を振り回して戦士達に襲い掛かる。

「この野郎!!」

クリスがガトリングを放つが彼はそれを胴体で受け、彼女の弾が命中をするが効いていない様子がない。

「嘘だろ!？」

ゴ・ガメゴ・レは鉄球を振り回してゴークイレットに振り回す。

「ゴークイチェンジ!」

【ジュウレンジャー!】

ティラノレンジャーに変身をして龍撃剣で彼の鉄球をはじかせる。ネフィリムが起き上がりゴ・ガメゴ・レはクウガの方へと突撃をする。

「まずい!!」

「おらあああああああ!!」

上空からミサイルなどが放たれてアダムの世界の装者達が集結をする。

「大丈夫ですか!!」

「おじさま!!」

「ああありがとう……」

クウガは意識を取り戻して前の方を見る。ネフィリムの方は戦兎たちが抑えているので彼はゴ・ガメゴ・レの方を見る。

「お前の相手は僕だ!!」

「勝負・・・・・・・・」

クウガは彼女達に下がっているように言い構えてゴ・ガメゴ・レに追撃をする。一方でネフィリムの方も攻撃をしているジャンゼクター達・・・・・・・・

「なんて硬さをしている・・・・・・・・」

戦兎はいくらネフィリムでもこれだけの攻撃を受けてダメージを受けているはずなのにピンピンをしているのは何かがあると判断をする。

「だったらこれだ!!ゴークイチェンジ!」

「メーガレンジャー!」

「ドリルスナイパーカスタム!」

メガレットに変身をしたゴークイレットがドリルスナイパーカスタムを放つ。だがネフィリムはそれを剛腕ではじかせた。

「何!?!」

「アールジーゴ!!」

「OK!!」

変形をしてジャンディックを装着をしてジツクキャノン形態へと変える。

「フアイアー！」

「ジツクキャノン!!」

ジャンゼクターが放つジツクキャノンがネフィリムに命中をしてネフィリムは爆散をする。

「うー!?」

「今だ!!」

ゴ・カメゴ・レが隙をついたのでクウガはライジングマイティへと変身をして彼を持ちあげる。

「!!」

「ウルトラハリケーン!!」

そのまま投げ飛ばして彼を上空に飛ばしたのを確認をして彼も飛びあがりライジングマイティキックをお見舞いさせて爆散させる。

（ふうまさかウルトラハリケーンを使うことになるとは……でもどうしてネフィリムが？）

アダムはクウガから変身を解除をした後考える。

戦兎 side

俺は今天界を経由して美菜子達に連絡をしている。

『そうそつちの世界でそんなことが?』

「ああ引き続いて俺はこの世界に滞在をして今回の事件を解決をするつもりだ」

『わかったわ。レグリオス無事でいて』

「ああ」

俺は通信を切り一緒の部屋にいるカズマ君を見ている。

「えつと、エボルトさま?」

「……俺も仮面でもつけようかな? 予告する!! 的な……」

「え、ええ……(たまにボケたこと言うよな、この人は(、(、(、(」

まあどうでもいいけどさ……さて奴等を復活させた闇は一体何だろうか? この世界で起ころうとしているのは……

戦兎 side 終了

「ガメゴ負けたんだ」

ン・ダクバ・ゼバは持っているのはネフィリムの心臓でドクンと動いている。彼女はふふと笑いながら次のゲームはどうするのか? と考えている。